

# 無門慧開の生涯と『無門関』(三)

— 日本僧無本覺心の参学と晩年の事跡 —

佐藤 秀 孝

## 無門慧開と無本覺心のこと

晩年を迎えた無門慧開にとって人生の最後を飾る特筆すべき事跡といえば、一介の日本僧として入宋求法した無本覺心(心地房、法燈円明国師、一二〇七—一二九八)がその席下に投じて参学し、慧開の法を嗣いで帰国した事実を置いてほかにないであろう。慧開は門下に日本僧覺心を得たことで日中間の禅宗史上にその名を残すことができたのであり、そのことは慧開の生涯にとつて「趙州無字」の公案で月林師観から印可を受けたこと、若くして『無門関』を編集提唱したこと、皇帝理宗の帰依を得て仏眼禅師の勅号を賜ったこと、將軍孟珙の請で靈洞山護国仁王寺の開山となったこと、そうした事跡などに匹敵するか、それ以上の重大なできごとであったといつてよい。慧開が門下に覺心を接得育成することがなかったならば、おそらく公案集『無門関』は日本に伝わらず、慧開のことも『無門関』の存在自体も全く世に知られることなく歴史の彼方に葬り去られていたかも知れない。覺心が慧開と邂逅し得たことで『無門関』は稀有にして日本禅林に請来相伝され、やがて日本の禅宗思想を特色づける重要な禅籍となり得たのである。

一方、覺心の門流は中世日本に臨済宗法燈派(由良門徒)として形成されており、五山派の一角として、あるいは林下の門流の一つとして、日本禅宗史上に大きな影響を及ぼしたことは疑いない。師資相承を重んずる禅宗において、法燈派の源流に位置した南宋禅者としての無門慧開の存在は、曹洞宗における長翁如浄(浄長、一一六二—一二二七)の位置、破庵派の無準師範(仏鑑禪師、一一七七—一二四九)や松源派の虚堂智愚(息耕叟、一一八五—一二六九)などの立場と同様、日中間の禅宗の師資相承において特筆すべきものがある。

覺心は信濃近部県または神林県(長野県松本市神林)の出身とされ、俗姓は恒氏または常澄氏と伝えられる。二九歳の

とき南都(奈良県)の東大寺戒壇で受戒し、紀伊(和歌山県)伊都郡の高野山伝法院において覚仏のもとで密教を学んでいる。ついで同じ高野山の金剛三昧院(もと禪定院)に投じて榮西門下の退耕行勇(莊嚴房、一一六三―一二四一)に参学して禅門への道を歩んでいる。また山城(京都府)宇治郡深草の極楽寺に曹洞宗の永平道元(仏法房、一一〇〇―一二五三)を訪ねて「仏祖正伝菩薩戒」を受けているが、ここにいる深草極楽寺とは実際には道元が初開堂した深草の観音導利院興聖宝林禅寺のことを指すであろう。さらに覚心は上野(群馬県)新田郡世良田の世良田山長楽寺に赴いてやはり榮西門下の榮朝(釈円房、一一六五―一二四七)のもとにも投じている。その後、京都で東福円爾(辨円、聖一國師、一一〇二―一二八〇)や妙見堂道祐(一二〇一―一二五六)らとも関わって入宋を志し、とりわけ円爾からは無準師範に参学することを勧められていた。

### 覚心が入宋して普陀山・径山・道場山に赴く

はじめに覚心が入宋渡航してから杭州護国仁王寺の慧開に相見するまでの事跡について、覚心関係の伝記史料をもとに詳しく窺ってみることにしたい。覚心が宋朝禅を求めて入宋渡航の途に着いたのは、日本の宝治三年(建長元年、一二四九)己酉の歳すなわち南宋の淳祐九年のことであった。宝治三年二月に覚心は紀伊の由良を発ち、三月には筑前(福岡県)博多津に到着している。宝治三年は三月一日に建長元年と改元されているから、覚心関係の伝記史料では入宋は一様に建長元年のできごととしてまとめられている。

覚心が示寂した直後に日本に再度渡来した松源派(大通派祖)の西潤子曇(大通禅師、一二四九―一三〇六)は鎌倉山之内の瑞鹿山円覚寺の住持として法燈派の鉄関心開の依頼で「鷲峰開山法燈円明国師塔銘」を撰述しているが、その中で覚心が入宋した当初の動向について、

建長己酉、遂附<sub>レ</sub>舶跨<sub>二</sub>巨宋<sub>一</sub>。首至<sub>二</sub>補陀<sub>一</sub>、登<sub>レ</sub>陸迤邐。趨<sub>二</sub>双径<sub>一</sub>、礼<sub>二</sub>癡絶和尚<sub>一</sub>、寓<sub>二</sub>一單於広衆<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>事不出<sub>二</sub>僧堂<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>機語末<sub>レ</sub>契、更謁<sub>二</sub>道場荊叟和尚<sub>一</sub>。後東遊<sub>二</sub>四明<sub>一</sub>、掛<sub>二</sub>錫育王<sub>一</sub>。(由良町誌・史料、二四三b―二四四a)

と書き残している。また撫州(江西省)金谿県西北五〇里の疎山白雲禅寺(甲利)の住持であった嗣承未詳の雲林師啓(仏心真惠溥照禅師)は法燈派の在庵普在(仏惠広慈禅師、一二九八―一三七六)の高弟で日本から到った日岩一光の依頼を受け、元代後期に「興国開山法燈円明国師塔銘」を撰述しているが、やはり覚心が入宋当初になした動向について、

建長己酉、附<sub>二</sub>海舶<sub>一</sub>、跨<sub>レ</sub>宋、首<sub>レ</sub>礼<sub>二</sub>補陀<sub>一</sub>。次<sub>レ</sub>陟<sub>二</sub>双徑<sub>一</sub>、見<sub>二</sub>癡絶和尚<sub>一</sub>、一<sub>レ</sub>单寓<sub>二</sub>于僧堂<sub>一</sub>、听夕<sub>レ</sub>孜々<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>暫出<sub>一</sub>。機語未<sub>レ</sub>契、更<sub>レ</sub>謁<sub>二</sub>荆叟和尚<sub>一</sub>于道場<sub>一</sub>。東游<sub>二</sub>四明<sub>一</sub>、駐<sub>二</sub>錫育王<sub>一</sub>。(由良町誌・史料、二四六 a)

とほぼ同様に記している。一方、覚心の門流であつた法燈派の自南聖薫は『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』を編集しており、先の二種の塔銘より詳しく覚心の入宋当初の動静を年ごとにつぎのようにならべている。

己酉、宝治三、三月十八日、建長改元(宋朝理宗皇帝淳祐九年也)。(中略)三月二十八日、從<sub>二</sub>博多津<sub>一</sub>附<sub>レ</sub>舶跨<sub>レ</sub>宋。先<sub>レ</sub>礼<sub>二</sub>補陀<sub>一</sub>、次<sub>レ</sub>到<sub>二</sub>長津<sub>一</sub>上<sub>レ</sub>岸。与<sub>二</sub>覚儀・観明等<sub>一</sub>、結<sub>レ</sub>伴頂<sub>一</sub>包<sub>レ</sub>行脚。初<sub>レ</sub>陟<sub>二</sub>徑山<sub>一</sub>、參<sub>二</sub>住持癡絶和尚<sub>一</sub>。寓<sub>二</sub>一<sub>レ</sub>单於僧堂<sub>一</sub>、听夕<sub>レ</sub>孜々<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>曾暫出<sub>レ</sub>堂、機語不<sub>レ</sub>契。

庚戌、淳祐十、本朝建長<sub>二</sub>。師四十四歳。謁<sub>二</sub>荆叟瑀于道場<sub>一</sub>、過<sub>レ</sub>夏。夏末、東方游<sub>二</sub>四明<sub>一</sub>、駐<sub>二</sub>育王<sub>一</sub>寓<sub>二</sub>衆寮<sub>一</sub>、得<sub>二</sub>鰻菩薩舍利等伝<sub>一</sub>。

辛亥、淳祐十一、建長<sub>三</sub>。師四十五歳。尚止<sub>二</sub>育王<sub>一</sub>。(由良町誌・史料、二二〇 a b)

このほかに聖一派の虎関師鍊(海蔵和尚、本覚国師、一二七八—一三四八)も『元亨釈書』卷六「浄禅三之一」に「釈覚心(鷲峰覚心)の章を載せており、つぎのように簡略に覚心入宋当初の動向を書き残している。

遂<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>上都<sub>一</sub>、見<sub>二</sub>勝林順<sub>一</sub>。順者入宋之望也。益深<sub>二</sub>南詢之志<sub>一</sub>。建長之初、泛<sub>レ</sub>舶蹈<sub>二</sub>宋域<sub>一</sub>。直趨<sub>二</sub>双徑<sub>一</sub>、礼<sub>二</sub>癡絶冲<sub>一</sub>。寓<sub>二</sub>一<sub>レ</sub>单於広衆<sub>一</sub>、簡<sub>二</sub>堂外之步履<sub>一</sub>、而機語不<sub>レ</sub>契。乃事<sub>二</sub>徧遊<sub>一</sub>、參<sub>二</sub>荆叟于道場<sub>一</sub>。(日仏全六二・九九 b)

とりわけ、『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』によれば、宝治三年が建長元年と改元された直後の三月二八日に、覚心は筑前の博多津から商船に便乗して入宋渡航を果たしている。宋地に辿り着いた覚心が最初に拝登したのは明州(浙江省)昌国県(現在の舟山市普陀区)の東海上に浮かぶ普陀山(補陀洛山)であつたとされるから、おそらく船の事情などで最初に普陀山を訪れる機会に恵まれたものであろうか。明州海上の普陀山は唐代末期に日本僧慧萼(惠萼)によつて開かれた観音菩薩の霊場であり、南宋初期に曹洞宗(真歇派祖)の真歇清了(寂庵、悟空禪師、一〇八八—一一五一)によつて禪刹に改められている。清了は南宋初期に活躍した曹洞宗の禪者であり、いうまでもなく真歇清了—大休宗瑀—足庵智鑑—長翁如浄—永平道元とつづく道元直系の祖師に当たっている。覚心は普陀山島内の観音宝陀禪寺(現在の普濟寺)など主要な堂塔伽藍に参詣しているものと見られるが、当時、宝陀寺の住持が誰であつたのかは定かでない。

まもなく覚心は長津(未詳)に上陸し、陸路を辿つて杭州餘杭県西北五〇里の徑山興聖万寿禪寺に赴いており、そ

の目的としては破庵派の無準師範に参学することにあつた。径山は唐代に牛頭宗の径山法欽(道欽、国一大師、七一四—七九二)が住庵したことに始まり、大暦四年(七六九)に径山寺が創建されている。北宋末期に径山能仁禪寺と改称され、南宋初期に楊岐派の大慧宗杲(妙喜、大慧普覺禪師、一〇八九—一一六三)が住持して一五〇〇人の修行僧を擁する大叢林へと発展した。孝宗の代に興聖万寿禪寺の勅額を賜わり、寧宗の代には禪宗五山の第一位に列したとされる。南宋後期には破庵派の無準師範が久しく住持し、円爾など多くの日本僧も参学に訪れている。

おそらく四月に普陀山を拝登した後、長津に到つて上岸し、一路、覚心は陸路を通つて径山を目指したものであろうか。興味深いのは覚心が長津で同じ日本僧の覚儀や観明と知り合い、彼らと絆を結んで行脚していることであり、入宋渡航した直後には覚心は単独で行動していたわけではなかつた事実が知られる。覚心は覚儀や観明とともに雲遊して漸く憧れの杭州径山に上山したわけであるが、当代随一の禪匠として名高かつた無準師範はすでに覚心が入宋する直前の淳祐九年三月一八日に世寿七三歳で示寂してしまつていた。覚心にとつて憧れの師範に参学するという夢は叶わなかつたのであり、このとき覚心が如何に落胆したか、察するに余りあるものがある。このため覚心は止むなく新たに径山住持となつていた曹源派の癡絶道冲(玉山、一一六九—一二五〇)のもとに入門掛搭するわけであり、ひたすら僧堂内で真摯に坐禪辦道に努めたと伝えられる。道冲は師範と同じ四川出身の蜀僧であり、やはり当代を代表するすぐれた禪者の一人であつたが、残念ながら覚心は道冲とは機縁が契わず、まもなく径山を離れて再び行脚歴遊している。

淳祐一〇年(一二五〇)に入ると、覚心は湖州(浙江省、烏程県南西の道場山護聖万寿禪寺(禪宗十刹第二位)に赴いており、楊岐派の荆叟如珏(仏心禪師、一一二六—一二六四)に謁して夏安居を過ごしている。如珏は楊岐派の癡鈍智穎の法を嗣いだ高弟であり、後に径山にも住持しているからすぐれた禪者であつたものと見られる。覚心は規矩に厳しい如珏の禪風を慕つていたものようであるが、やはり機縁は契わなかつたとされる。そのため夏末には道場山の如珏のもとを離れ、再び雲遊の身となつている。

### 覚心が明州阿育王山に寓止する

湖州の道場山を後にした覚心は、淳祐一〇年の秋から冬の頃に東遊して四明(明州)に戻つており、鄞県東五〇里に存する仏舍利信仰の名刹として名高い阿育王山広利禪寺に駐錫掛搭している。阿育王山は古くインドの阿育王(アシヨ

一カ王(Ashoka)が建てた仏舍利塔の一つと信ぜられ、東晋の義熙元年(四〇五)に伽藍が建てられたのに始まると伝えられる。北宋代に広利禪寺の勅号を賜っており、法眼宗の宣密居士が禪利第一代に迎えられ、雲門宗の器之懷璉(大覚禪師、一〇〇九—一〇九〇)らが住持している。南宋代に入ると楊岐派(大慧派祖)の大慧宗杲などが住持して大刹への道を辿り、大慧派の普門從廓(妙智禪師、一一九一—一八〇)や拙庵徳光(東庵、仏照禪師、一一二一—二〇三)らが相継いで歴任し、舍利殿および仏舍利宝塔を整備している。南宋中期の嘉定年間(一一二〇八—一一二三四)に阿育王山は禪宗五山の第五位に列しており、同じ郵県の天童山景德禪寺(五山第三位)と並ぶ明州の名刹として知られ、現今の寧波市の阿育王寺へと連なっている。

阿育王山に逗留した覚心は衆寮に寓居し、山内に祀られる靈巖菩薩を参拝し、舍利殿の仏舍利宝塔などを拝登している。その後、淳祐二年(一二五二)まで足掛け三年にわたって覚心はなぜか阿育王山に留まりつづけており、この間の事情や理由などについては、「鷲峰開山法燈円明国師塔銘」や「興国開山法燈円明国師塔銘」および『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』などにも何ら記されていない。覚心が到った当時、阿育王山広利寺で住持を勤めていたのは大慧派の偃溪広聞(仏智禪師、一一八九—一二六三)であり、淳祐八年(一二四八)に阿育王山の第四〇世(二に第三八世)として住持している。『偃溪和尚語録』巻上「慶元府阿育王山広利禪寺語録」には「謝前堂遠無外上堂」(已統蔵一二一・一三六b)が存するから、如浄門下の無外義遠(？—一二六六)が阿育王山の広聞のもとで前堂首座(第一座)を務めていることが知られる。淳祐一年(一二五二)に広聞は杭州钱塘県の南屏山浄慈報恩光孝禅寺(五山第四位)に遷住しており、代わって曹洞宗宏智派の東谷妙光(？—一二五三)が蘇州呉県の万寿報恩光孝禅寺(十刹)から阿育王山の住持に迎えられている。しかしながら、覚心の伝記史料では阿育王山で広聞や妙光と交わした商量問答が何も伝えられていないばかりか、両者の名すら一切記されていない。南宋禅者のもとに参禅学道することを第一として入宋渡航した覚心であったはずなのに、なぜ足掛け三年にもわたって覚心は遍参歴遊もせず、阿育王山の一角に悶々と寓居しつづけていたのであろうか。

## 日本僧源心が覚心に慧開の存在を伝える

淳祐二年(一二五二)に至って漸く覚心は明州郵県の阿育王山広利寺を離れて諸方へと本格的な求法歴遊の旅を再

開しており、このとき杭州钱塘県の護国仁王禅寺の住持であった無門慧開という禅者の存在を初めて聞き知ることになる。子曇撰「鷲峰開山法燈円明国師塔銘」によれば、覚心が護国仁王寺の慧開に参学するに至る過程について、

後因上天台、礼心真供養有感。偶覩壁間所書、念起是病、不統是藥、正抓着痒处。回登大梅山、礼常禅師塔。乃避返本国源心者、以曩曾同参、遂問、久参此地、還遇明眼知識也無。心云、護国仏眼、一代明師、可往参見。乃相率同往。(由良町誌・史料、一四四a)

と伝えており、師啓撰「興国開山法燈円明国師塔銘」においても、

上天台、礼心真供養有感。偶睹壁間所書、念起是病、不統是藥。正抓着痒处。回登大梅山、礼常禅師塔。解后本国源心者、以曩昔同参、遂問、久参此地、還遇明眼知識也無。心云、無門一代明師、可往参見。乃率同抵杭之護国。(由良町誌・史料、二四六a)

とほぼ同様の内容となっている。『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』では、年月日などに関して若干ながら詳しく、

壬子、淳祐十二、建長四。師四十六歳。上天台礼心真、過石橋供養有感。偶睹壁間所書、念起是病、不統是藥。正抓着痒处、歴参訪尋。

癸丑、宝祐改元(理宗皇帝)建長五、道元入寂。師四十七歳。二月廿八日、登大梅山、拜常禅師塔。解后本国源心者、以曩昔同参、遂問、久参此方、還遇明眼知識也。源心云、無門和尚、一代明師、心往参見。乃率抵杭之護国。(由良町誌・史料、一三〇b~一三二a)

と経緯が年時を追うかたちで書き記されている。一方、『元亨釈書』の「釈覚心」の章では、

拜心真于天台、育王之寺、大梅之塔、浙東靈区、足跡皆遍。適值本邦同参源心者、問曰、我周旋諸老之間者久矣。而以吾眼之不<sub>レ</sub>明、也暗<sub>二</sub>于知<sub>レ</sub>人焉。雖<sub>二</sub>吾之暗<sub>一</sub>、庶幾見<sub>レ</sub>人之明乎。子已熟<sub>二</sub>於地<sub>一</sub>矣、又不<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>聞邪。対曰、我之暗猶<sub>二</sub>子之暗<sub>一</sub>、而我之聞寔不<sub>レ</sub>似<sub>二</sub>子之聞<sub>一</sub>也。是子之所謂熟者乎、靈洞護国仏眼師、我所<sub>二</sub>熟聞<sub>一</sub>也。乃相将至<sub>二</sub>護国<sub>一</sub>。(日仏全六二・九九b)とあり、天台山・阿育王山・大梅山という遍歴した順番には問題があるものの、覚心が浙東の霊場を遍く巡礼したこと、さらに日本僧源心と交わした問答の内容がかなり克明に記されている。これら伝記史料の記事を整理して覚心が天台山から大梅山に到って源心と遭遇する経緯をまとめてみることにしたい。

淳祐一二年の夏安居を終えた秋以降のことと見られるが、覚心は阿育王山の東谷妙光のもとを離れて、最初に台州

(浙江省) 天台県西北の天台山を直指して行脚歴遊している。天台山はいまでもなく天台宗祖の天台智顛(智者大師、五三八―五九七) ゆかりの山であり、山中の国清寺は「隋代古刹」として智顛によつて開かれていたが、覚心が到つた南宋後期には景德国清禪寺として禪宗十刹の第一〇位に列している。おそらく覚心は国清寺その他の寺院も訪れたことであろうが、具体的に拝登したことが伝えられるのは、天台山の勝跡として名高い天台石橋(石梁瀑布)であつた。覚心は石橋を無事に渡つて五百羅漢(応真)に茶を献じて供養しており、このとき何らかの感応が現れたことを伝記類は伝えている。さらに覚心は石橋の壁間に「念起是病、不<sub>レ</sub>統是藥」と刻まれた文字、書き下して「念起こるは是れ病なり、続かざるは是れ藥なり」ということが書かれているのを見て大いに發奮し、尋師訪道に対する思いを一層新たにしようとされる。その後も覚心はしばらく天台山の一隅、いづれかの寺院に留まつていたものらしく、あるいはその地は榮西や道元ゆかりの天台山平田に存する万年報恩光孝禪寺であつたのかも知れない。

宝祐元年(一二五三)に入ると覚心は天台山を離れ、二月二十八日には明州鄞県東南七〇里に存する大梅山へと上山している。唐代以来、大梅山には護聖禪寺と保福禪院が存しており、覚心は大梅山の開山始祖である馬祖下の大梅法常(七五二―八三九)の墓塔を拝登している。すでに触れたごとく無門慧開が若くして出家した杭州の天龍寺は、唐代に天龍真覚によつて開かれた禪刹であるが、その天龍真覚が本師と仰いだ禪者こそ大梅山の法常であり、真覚もかつて大梅山の法常のもとで修行の日々を送つていたはずである。大梅法常と天龍真覚の師資を通して、天龍寺で出家した慧開と大梅山を訪れた覚心には接点が存したことになる、すでに両者は不思議な因縁に結ばれていたことになろう。また覚心が大梅山に赴く三〇年前、道元も在宋中に大梅山に上山して法常の墓塔を拝登しているが、その道元が同じ宝祐元年すなわち日本の建長五年(一二五三)八月二十八日に世寿五四歳で示寂しているのも、偶然とはいえないものがある。

大梅山に到つた覚心はかつて日本で同参であつた入宋僧源心と邂逅する奇しき因縁に恵まれている。ここにいう同参の意が明確ではないが、あるいは覚心の先師であつた榮西門下の退耕行勇のもとに同じく参学した道友の意であろうか。かつて覚心と同参であつた源心が如何なる素性の入宋僧であつたのかは定かでないものの、この人は覚心を護国仁王寺の慧開のもとへと導いた陰の功労者であり、あたかも道元(弘法房)に曹洞宗の長翁如浄の存在を伝えた老璣(未詳)や、円爾に破庵派の無準師範の存在を伝えた退耕德寧(？―一二六九)のごとき役割を演じた人であつたといつてよい。

覚心が源心に「久しく此の方に参ずるに、還た明眼の知識に遇うや」と尋ねると、源心は「護国の仏眼は一代の明師

なり、往きて参見すべし」あるいは「無門和尚は一代の明師なり、応に往きて参見すべし」と答えたと伝えられる。このとき覚心はすでに在宋五年目を迎えているが、その覚心をして「久しく此の方に参ずる」と言わしめる源心は、在宋期間がかなり久しかったものらしい。源心としては名だたる南宋禅者たちの中で杭州護国仁王寺の無門慧開(仏眼禅師)こそ一代の明師であると告げ、出掛けて行って会下に投じて相見参学すべきであると覚心に勧めている。しかも源心は単に覚心に慧開への参学を勧めたのみでなく、自ら率先して覚心を杭州護国仁王寺の慧開のもとまで案内しているのも興味深い。覚心が「還た明眼の知識に遇うや」と質問していることから、源心自身もかつて護国仁王寺で実際に慧開その人に参学した経験が存したのかも知れない。

とりわけ『元亨釈書』は覚心と源心のやり取りを克明に伝えているといつてよく、これを書き下すならば、

適たま本邦の同参源心という者に値い、問うて曰く、「我れ諸老の間を周旋すること久し。而して吾が眼の明らかならざるを以て、也た人を知るに暗し。吾れは暗しと雖も、人に見えるの明らかならんことを庶幾う。子は已に地に熟せり、又た聞くこと有らざらんや」と。対えて曰く、「我れの暗きこと、猶お子の暗きがごとし、而して我れの聞くことは寔に子の聞くことに似ざるなり。是れ子の所謂る熟せる者なるか。靈洞護国の仏眼師は、我が熟つら聞く所なり」と。乃ち相い將いて護国に至る。

となろう。このように『元亨釈書』では他の伝記史料に比べて源心との応酬に関して臨場感をより増したかたちで伝えられている。覚心はなかなか思うような禅匠に巡り会うことができず、諸禅者の間を空しく往来していたことを述懐しており、すぐれた禅匠を見究めるすべを源心に尋ねている。源心も自身の眼力の乏しいことを自覚しつつ、覚心より久しく浙江禅林に止まっていたことから、情報を多く集めていることを自尊し、靈洞山護国仁王寺の仏眼禅師の名をしげしげ聞いていることを覚心に告げている。この『元亨釈書』の記載からすると、源心自身は慧開の名を伝え聞くのみで、実際に慧開に参学した経験は存しなかったと読み取れよう。

こうして奇しき因縁によって覚心は漸く無門慧開という禅匠の存在を知り、慧開に相見する機会を得たわけであり、そのさまはあたかもかつて明庵栄西(千光法師、一一四二—一一二五)が黄龍派の虚庵懐敏に相見し、道元が曹洞宗の長翁如浄に相見し、円爾が破庵派の無準師範に相見し得た因縁などにも比せられよう。覚心は二月二八日に大梅山に上山し、かつて同参であった日本僧源心と再会する機会に恵まれていることから、一に四月一五日の結夏日に合わせてそれ



以前に杭州の護国仁王寺の慧開のもとに辿り着いているとも見られよう。しかしながら、つぎに示すごとく実際に覺心が護国仁王寺の慧開と問答を交わしたのが九月に至つてのこととされるから、大梅山で一頻り夏安居を過ごした後、七月一五日の解制を迎えて以降に覺心は源心に伴われて杭州へと向かつたものと解するべきであろう。

ちなみに宝祐元年には杭州钱塘県の北山景德靈隱禪寺の住持であつた大慧派の大川普濟（一一七九—一二五三）が一月一八日に世寿七五歳で示寂しており、後席を継いで阿育王山から靈隱寺に遷住したのは宏智派の東谷妙光であつた。しかしながら二月に靈隱寺に住持してより僅か九ヶ月ほどで、妙光も同年一二月五日に示寂している。妙光が示寂した後、宝祐二年（一二五四）四月以前には大慧派の偃溪広聞が同じ钱塘県西湖南岸の淨慈報恩光孝禪寺から靈隱寺の住持に迎えられる。広聞や妙光がかつて阿育王山の住持を務めていたときに、覺心は阿育王山に掛搭して一隅に寓居していたわけであるが、覺心と源心は靈隱寺や淨慈寺などを素通りし、一路、護国仁王寺の慧開のもとを目指したわけである。

### 覺心が護国仁王寺に到つて慧開に謁見する

覺心が源心とともに杭州に到つて護国仁王寺の慧開に参学したのは宝祐元年（一二五三）のことであり、すでに覺心が淳祐九年（一二四九）に入宋渡航してから五年もの歳月が過ぎ去つている。堅い決意を持つて入宋して正師に参学するという主要目標から見れば、覺心にはかなり無駄な歳月を送つてしまつた思いが存したことであろう。しかも不思議なのは覺心を伴つて護国仁王寺に赴いた源心に関して、果たして日本に帰ることができたのか否か、その後の消息が全く辿れないことであり、源心はまさに覺心を慧開に引き合わせるためだけに存在した感すらあろう。

晩年における慧開の事跡は日本僧覺心との関わりによつて辛うじてその詳細が辿れるのであり、覺心との関わりを抜きにして慧開の晩年を語ることは不可能であろう。それほどに晩年を迎えた慧開にとつて忽然と眼前に現れた一介の日本僧覺心との邂逅は、人生の最後に訪れた画期的なできごとであつた点は疑いなく、慧開の生涯に大きな彩りを添えるものであつた。子曇撰「鷲峰開山法燈円明国師塔銘」には、覺心が護国仁王寺を訪れて慧開と交わした具体的な初相見の問答などに関して、

仏眼見而問曰、汝名什麼。師云、覺心。眼即示以偈云、心即是仏、仏即是心、心仏如々、亘古亘今。与師酬对数回、即蒙三印可。復召師曰、汝来太遲生。師遂問云、抛却一切、以何示人。眼云、覩箇覩底。師便礼拜辞出。眼以对御

録<sub>一</sub>付<sub>レ</sub>師。(由良町誌・史料、二四四a)

と伝えており、師啓撰「興国開山法燈円明国師塔銘」においては、比較的詳しく、

無門纔見擒住問曰、我這裡無門、從<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>処<sub>一</sub>入。師云、從<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>門<sub>レ</sub>処<sub>一</sub>入。門又問云、汝名什麼。師云、覺心。門作<sub>レ</sub>偈曰、心即是仏、仏即是心、心仏如々、亘<sub>レ</sub>古<sub>レ</sub>亘<sub>レ</sub>今。酬<sub>レ</sub>對<sub>レ</sub>數<sub>レ</sub>四、蒙<sub>レ</sub>印<sub>レ</sub>可<sub>一</sub>。復召<sub>レ</sub>師曰、汝来太遲生。無門拳<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>扇子、問<sub>レ</sub>師曰、見麼。於<sub>二</sub>言<sub>一</sub>下<sub>一</sub>忽然大悟。遂問曰、抛<sub>レ</sub>却<sub>レ</sub>一切、以<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>示<sub>レ</sub>人。門曰、覩<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>个<sub>レ</sub>覩<sub>レ</sub>底。師礼<sub>レ</sub>拜<sub>レ</sub>辭<sub>レ</sub>出。門以<sub>二</sub>對<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>録<sub>一</sub>并<sub>レ</sub>袈<sub>レ</sub>裟<sub>一</sub>一領<sub>一</sub>付<sub>レ</sub>師。(由良町誌・史料、二四六a~b)

と記されており、若干ながら前半部分が増加している。「鷲峰開山法燈円明国師塔銘」や「興国開山法燈円明国師塔銘」では、覺心が具体的に護国仁王寺の慧開(仏眼)に参じた時期などは明記されていない。

また『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』によれば、覺心が慧開に参学してから帰国するまでの経緯については「興国開山法燈円明国師塔銘」より若干ながら詳しく、

無門才見<sub>レ</sub>即<sub>レ</sub>擒<sub>レ</sub>住<sub>レ</sub>曰、我這裏無<sub>レ</sub>門、從<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>処<sub>一</sub>入。師云、從<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>門<sub>レ</sub>処<sub>一</sub>入。門問、汝名什麼。師云、覺心。門即作<sub>レ</sub>偈曰、心即是仏、仏即是心、心仏如々、亘<sub>レ</sub>古<sub>レ</sub>亘<sub>レ</sub>今。酬<sub>レ</sub>對<sub>レ</sub>數<sub>レ</sub>四、蒙<sub>レ</sub>印<sub>レ</sub>可<sub>一</sub>。門復召<sub>レ</sub>曰、汝来太遲生。則拳<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>扇子、曰、見麼。師於<sub>二</sub>言<sub>一</sub>下<sub>一</sub>大悟。九月廿八日也。遂問云、抛<sub>レ</sub>却<sub>レ</sub>一切、以<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>示<sub>レ</sub>人。門曰、覩<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>箇<sub>レ</sub>覩<sub>レ</sub>底。師礼<sub>レ</sub>拜。門以<sub>二</sub>對<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>録<sub>一</sub>二冊并<sub>レ</sub>袈<sub>レ</sub>裟<sub>一</sub>一頂<sub>一</sub>付<sub>レ</sub>師。(由良町誌・史料、二三二a)

と伝えている。しかも『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』では、覺心が慧開に初めて相見して問答を交わした際に言下に悟道したとされ、その日が九月二八日であったと明記している点は注目されよう。『元亨釈書』の「釈覺心」の章では、仏眼問曰、汝名什麼。対曰、覺心。眼乃示<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>偈曰、心即是仏、仏即是心、心仏如々、亘<sub>レ</sub>古<sub>レ</sub>亘<sub>レ</sub>今。又徴詰數四、即受<sub>レ</sub>印<sub>レ</sub>可<sub>一</sub>。(日仏全六二・九九b)

としか記されておらず、きわめて簡略にまとめられていて要領を得ない。そこでこれらの記載を踏まえて、覺心が護国仁王寺の慧開のもとに投じたときの経緯とやり取りについて総合的にまとめよう。<sup>15)</sup>

前半の問答を『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』によって書き下してみよう。つぎのようになろう。

無門才かに見て即ち擒住して曰く、「我が這裏に門無し、何れの処よりか入らん」と。師云く、「門無き処より入る」と。門問う、「汝、名は什麼ぞ」と。師云く、「覺心」と。門、即ち偈を作りて曰く、「心は即ち是れ仏、仏は即ち是れ心なり、心仏如々、

古に亘り今に亘る」と。

護国仁王寺にやつて来た覚心に対し、慧開はわずかに一見するや、初相見にも拘わらず名も問わないうちに、すぐさま胸ぐらを捉まえて「我が這裏に門無し、何れの処よりか入らん」と迫っている。慧開としては無門の道号に因んで新到の覚心に入門掛搭の真意を問ひ質しているわけであるが、このとき覚心は即座に「門無き処より入る」と答えている。文字通りには関門のないところから入ると「大道無門」のありようを示したかたちであるが、覚心としては「無門という関門から入っていく」あるいは「無門和尚あなたのもとから入りたい」と応対していることになる。ここで漸く慧開は「汝、名は何ぞ」と覚心に法諱（僧名）を尋ねているが、これはおそらく名を問う以前に慧開が一見して覚心という人物の雰囲気を好しとして見抜いたことを意味しよう。名を問われた覚心はここで始めて自ら「覚心」であると答えている。慧開は初相見で覚心の素性を何ら尋ねることなく問答を開始していることから、当然ながら覚心が日本僧であることを念頭に置いていなかった感がある。すでに在宋期間が五年目に達していた覚心であれば、おそらく南宋禅林の風規に馴染み、中国語（浙江方言）にもかなり精通し、日常会話も堪能になつていたものと見られる。そのため慧開も他の南宋国内の修行僧に接するかのごとく日本僧覚心に応対したことであろう。

目前に現れた一介の修行僧が「覚心」という僧名であること知った慧開は、直ちに四言四句の一偈を詠じて、  
心即是仏、仏即是心、心仏如々、亘古亘今。

心は即ち是れ仏、仏は即ち是れ心なり。心仏如々、古に亘り今に亘る。  
と覚心に示している。慧開が示した偈頌を現代風に訳してみるならば、およそつぎのような意味となるろう。

心は仏にほかならず、仏は心にほかならない。心と仏は真如そのものであり、その道理は古今を貫いている。

慧開としては、心を覚るという覚心の名に因んで心仏一如の道理を一偈に託しているわけである。とりわけ興味深いのは、擒住すなわち慧開が最初に覚心の胸ぐらを掴んだ行為以外は、自らの禅体験のときのような看話禅特有の激しい学人接化の手法ではなく、きわめて穏当な師資のやりとりを通して覚心に対応している点であろう。老齢に達していた慧開としては、自らの面前に突然現れた五〇歳に近い一介の外国僧に独特の雰囲気を察したものと見られ、すぐさま悪辣な手段など用いる必要がないことを察したものであろう。初相見ですでに慧開は覚心の絶妙な応答に満足し切っており、「心を覚る」という覚心の名を踏まえて心と仏のありようを一偈頌に込めているわけである。

しかも両者はその後も問答をつづけており、そのことはとくに師啓撰「興国開山法燈円明国師塔銘」や『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』に詳しい。『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』の当該箇所を書き下して示すならば、

酬対すること四を数え、印可を蒙る。門復た召して曰く、「汝、来たること太だ遅生し」と。則ち扇子を举起して曰く、「見るや」と。師、言下に於いて大悟す。九月廿八日なり。遂に問うて云く、「一切を抛却し、何を以て人に示さん」と。門曰く、「箇の覷う底を覷う」と。師、礼拝す。

となろう。慧開と覚心は応答商量をつづけ、四回にわたって主要な問答がなされたらしいが、その一々の内容などは記されていない。それらの問答を通して慧開は覚心に印可証明を与え、その境界を深く認めたとされる。さらに慧開は覚心を召して「君が来るのはなんと遅かったことか」と告げている。太遅生とは「甚だ遅いぞ」とか「何と遅いことか」「遅きにすぎざるぞ」といった意であり、「太く生」で「甚だくである」と解される。晩年に達した慧開が異国の僧覚心と邂逅したことを「漸く汝に会えたか」と最大限に喜んだこととはいつてよく、真の法嗣とすべき人材に巡り会うことができた感慨を思わず口にしたものであろう。

すかさず慧開は扇子を手に取り上げて「見るや」と迫っており、このとき覚心は慧開の言下に大悟徹底したと伝えられる。あたかも唐代に馬祖下の麻谷宝徹が扇子を使って「風性常動」の道理を示した因縁のごときを覚心は慧開の作略で即座に悟ったともいえよう。『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』によれば、この一連の問答がなされたのを宝祐元年九月二八日のできごとであったと明記しているから、覚心は初相見の問答商量によつて悟道し、慧開から即座に印可を得ていることになるろう。

さらに同じ九月二八日のことであつたのか、別の日になされたものであつたのかは定かでないが、覚心は慧開に「一切を抛却して、何を以て人に示さん」と質問している。慧開に対して「すべての手段方便を投げ捨てたならば、何を人に示せるでしようか」と迫つたわけであり、あたかも『無門闕』第五則「香巖上樹」の古則を踏まえたかのごとき質問といえよう。禅者として究極の接化とは如何にあるべきかを問うものといつてよいだろう。それに対して慧開は「箇の覷う底を覷う」と答えているが、「箇の覷う底」とは、一人の仏法の当体を覷う輩のことであるから、質問した覚心のことを指しているとも解される。慧開としては「覚心よ、そいつの心の中をじっくりと伺い見ることだ」といった意であらうか。いずれにせよ、慧開と覚心が交わした高次な啐啄同時のやり取りが絶妙であるといえよう。

こうした一連の問答商量がなされた後、慧開は『対御録』二冊と袈裟一領を覚心に付与したとされる。『対御録』とは慧開がかつて皇帝理宗と対面し、理宗の勅問に答えたときのやり取りを筆録編集した説法集と見られ、二冊になっていたことが知られる。これが写本であったのか、刊本であったのかは断定し得ないが、理宗とのやり取りを記念して『無門和尚対御録』といった名称で二冊にまとめられ、宋版として刊行されたものではなかったかと推測される。おそらく覚心の応対に満足し切った慧開は、手元にあつた『無門和尚対御録』二冊および自ら日用に掛けていた袈裟一領を即座に覚心に授けたものであろう。

慧開が覚心に贈った袈裟については、現在、京都市右京区宇多野上ノ谷町の正覚山妙光寺に覚心が慧開から相伝したとされる袈裟一領が伝えられている。これは「黄地花入菱花鳥文唐綾九条袈裟」と称され、国の重要文化財として妙光寺に所蔵されている。京都国立博物館編『高僧と袈裟』(二〇一〇年一〇月)の展示図録によれば、これは縦一三七・〇センチ、横三四五・〇センチという大きな象鼻衣であり、覚心が帰国する際に護国仁王寺の慧開より付与されたものとされている。ただし、この妙光寺所蔵の袈裟の左縁には「永仁二年十二月十日」と記され、紐座には「仏法僧宝」とあり、環座には「入宋覚心」の墨書が存している。この九条袈裟は「高僧と袈裟」展に「九条袈裟無門慧開料、無本覚心相伝」として展示されたことがある。ここでは慧開から覚心に相伝された伝法の袈裟そのものではないが、同じ南宋代に製作された九条袈裟とされている。実際に慧開が覚心に付与した九条袈裟であれば、あるいは永仁二年(二二九四)一二月一〇日に晩年を迎えた覚心が改めて法嗣の誰かに付与した年時なのかも知れない。

ところで、覚心が慧開と初相見の問答をなした事跡で問題となるのは、子曇撰「鷲峰開山法燈円明国師塔銘」で「師便ち礼拝して辞し出づ」とあり、師啓撰「興国開山法燈円明国師塔銘」でも「師、礼拝して辞し出づ」と記されている点であろう。これが単に覚心が慧開と問答を交わし終えて方丈(室中)から僧堂に戻った意味であるのか、あるいは覚心が慧開の印可を得て後、いったん護国仁王寺の慧開のもとから辞去した意味であるのか、あるいは覚心が護国仁王寺の慧開のもとに留まらず、問答商量を交わして印可証明を得て後、再び他所に徧参歴遊したのであれば、そのさまはあたかも永嘉玄覺(一宿覚、真覚大師、六七五―七二三)が韶州(広東省)曲江県の曹溪山宝林寺(後の南華寺)に到って六祖慧能(盧行者、大鑑禪師、六三八―七一三)に参じた後、直ちにそのものを辞去したかごとき短期の参学隨身であつたことにならうか。

## 覚心が慧開のもとを辞して帰国の途に着く

覚心が護国仁王寺の慧開のもとに参学してから帰国するまでの期間は足掛け二年にすぎず、実質的には僅か半年間足らずのことであった。しかもその間も覚心は一貫して護国仁王寺に留まって慧開に参学して指導を受けつづけていたというわけではなく、折に触れて他山に徧参することがあったものようである。ただし、このとき覚心が如何なる徧参をなしていたのか、その詳細は何も伝えられていない。

宝祐二年(一二五四)の春に入つて、覚心は護国仁王寺に戻つて日本に帰国する意向を慧開に告げている。子曇撰「鷲峰開山法燈円明国師塔銘」には、覚心が帰国の途に着く経緯について、

甲寅春、復詣護国告別、求示末後句。眼云、覩便了。復以三月林和尚語并無門関二冊授之、并偈曰、心即是仏、心即心、心仏元同亘古今、覚悟古今、心是仏、不須向別追尋。又請頂相贊曰、用迷子訣、飛紅爐雪、一喝当鋒、崖崩石裂。化生蛇作活龍、点黄金為生鉄。去縛解粘、抽釘拔楔、更將仏祖不伝機、此界他方俱漏泄。師便辞出、跨商舶以帰。(由良町誌・史料、二四四a)

と比較的に詳しく伝えている。これに対して、一方の師啓撰「興国開山法燈円明国師塔銘」では、

甲寅春、復詣護国告別、求示末後句。門曰、便了。復以三月林録并無門関授之、并偈曰、心即是仏、心即心、心仏元同亘古今、覚悟古今、心是仏、不須向別追尋。師便辞去、泛舟以帰。(由良町誌・史料、二四六b)

とあり、後半を略して前半のみの記載に終始している。一方、『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』によれば、

甲寅、宝祐二、建長六。師四十八歳。三月廿七日、重謁護国、告回郷意。無門用達磨・寒山・拾得系贊共三頓付之。二十九日、請示末後句。門曰、便了。師便炷香礼拜。門復以三月林録并無門関授之。偈曰、心即是仏、心即心、心仏元同亘古今、覚悟古今、心是仏、不須向別追尋。仍需頂相贊。贊曰、用迷子訣、飛紅爐雪、一喝当鋒、崖崩石裂。有時方便、以無字為鉄掃帚、蕩四衆疑。有時拍盲、似有意揮鹿拳頭、結千聖舌。化生蛇作活龍、点黄金為鈍鉄。去縛解粘、抽釘拔楔。更將仏祖不伝機、此界他方俱漏泄。師礼辞而出、跨商舶以帰。(由良町誌・史料、二二一a、b)

と記されており、「鷲峰開山法燈円明国師塔銘」より若干ながら詳しく、そこには月日なども挿入されて、より具体的

なかたちになつてゐる。また『元亨釈書』の「釈覚心」の章では、

宝祐二年春、告別。仏眼以二月林語・対御録・無門関等一付之。又授偈曰、心即是仏即心、心仏元同亘古今、覺悟古今一心是仏、不須向外別追尋。又写照賛曰、用迷子訣、飛紅爐雪、一喝当鋒、崖崩石裂。化死蛇作活龍、点黄金為生鉄。去縛解粘、抽釘拔楔。更將仏祖不伝機、此界佗方俱漏泄。心辞而出、發于明著博多、乃建長六歳也。  
(日仏全六二・九九b)

とあるから、かなり要約されたかたちとなつてゐる。そこで『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』の記載を中心として、他の伝記史料の内容を加味しながら、護国仁王寺の慧開のもとを辞する覚心の状況を克明に辿つてみることにしたい。

宝祐二年(日本の建長六年)の春、四人歳を迎えた覚心は再び護国仁王寺の慧開に謁見して日本に帰国する意向を伝えている。二種の塔銘ではともに「復た護国に詣りて別れを告ぐ」と記しており、『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』では「三月廿七日、重ねて護国に謁し、郷に回るの意を告ぐ」とあつて具体的な日にちも伝えられている。「復た」とか「重ねて」といつた表記が見られることから、覚心が護国仁王寺の慧開のもとを暫し離れていたらしい消息が窺えよう。とくに『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』では、覚心が護国仁王寺の慧開に重ねて謁見した日時を三月二十七日と明記しており、覚心が帰国するために護国仁王寺の慧開のもとに舞い戻つてゐることが判明する。

護国仁王寺に戻つて覚心が帰国の意向を告げると、このとき慧開は達磨・寒山・拾得という三幅対の祖師図に賛語を揮毫して覚心に付与してゐる。この三幅対の画賛に関しては『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』にしか述べられておらず、如何なる内容であつたのかは定かでないが、覚心によつて日本に持ち込まれたものである。『無門開和尚語録』「賛仏祖」には、これに該当するような仏祖賛は載せられておらず、実際に日本国内の覚心ゆかりのいずれかの禅刹に伝存しているのか否かも不明であるため、賛語の内容も知られない。

さらに三月二十九日に至つて、覚心が慧開に対して「末後句」を求めると、慧開はその要請を快く受け入れ入れている。末後句とは最後の一句、臨終に際して発せられる一句のことであるが、ここでは覚心が門下を去つて日本に帰るのに際し、慧開に仏法ぎりぎりの一句を餞別の偈頌として揮毫して欲しい旨を依頼した意にほかならない。覚心がすぐさま香を炷いて慧開に対して礼拝すると、慧開は本師月林師観の語録である『月林観和尚語録』と自ら編した『無門関』を餞別に授与してゐる。ただし、『元亨釈書』では『月林観和尚語録』と『無門関』のほかに『対御録』も付与されたことにな

つているが、『無門和尚対御録』はすでに触れたごとく慧開が理宗のもとで勅問に答えた内容を書き留めたものであり、他史料では初相見で問答商量を交わした際に慧開が覺心に授与した事になつてゐるから、この『元亨釈書』の記載は虎関師鍊による誤りと見てよいであろう。一見、不可解なのは慧開自身の語録である『無門開和尚語録』がこのとき覺心に授与されていない点であるが、おそらくこのとき語録は編集の途上で、いまだ刊行されていなかったためであろう。

慧開は『月林観和尚語録』や『無門関』を付与した上で、さらに最後の句として、

心は即ち是れ仏、仏は即ち心なり。心と仏は元より同じくして古今に亘る。古今を覺悟すれば心は是れ仏なり。外に向つて別に追尋するを須いず。

という一偈を詠じ、これを餞別として帰国する覺心に授与してゐる。おそらくその場で慧開が揮毫したのではなく、三月二七日に覺心の帰国の意を知つた慧開が予め用意しておいて授けたものであろう。この偈頌は覺心が慧開に参学した初相見の際に慧開が示した「心は即ち是れ仏、仏は即ち是れ心なり。心仏如々、古に亘り今に亘る」の一句を踏まえたかたちでなされてゐる。自己の心の外に向かつて仏を求めないという『無門関』の禅旨とも直結する「心仏不二」のありようが語られてゐる。おそらく慧開が覺心に授与した最後の句の墨蹟原本には、年月日や慧開の自署がなされ、落款などが押されていたことであらう。

いづれにせよ、覺心は慧開の印記を得て宝祐二年三月末に護国仁王寺を辞しており、夏六月初めには日本に帰国してゐるものと思われ、『元亨釈書』のみが明確に明州府港を發つて筑前の博多津に着岸したことを伝えている。こうして慧開から覺心に付与された慧開の名著『無門関』が日本に請来されることとなり、後代の日本禅宗界に大きな影響を及ぼす基が築かれたわけである。

### 慧開が覺心に付与した自贊頂相

帰国に際して覺心は慧開の頂相に自贊を求めており、慧開はこれに応じて自贊の語を書き記してゐる。この慧開が覺心に授与した自贊頂相に関しては、ここに項を改めて論ずることにしたい。『無門開和尚語録』「眞贊」には「日本覺心長老請」と題したつぎのような眞贊が載せられてゐる。

日本覺心長老請。



用「迷子訣」、飛「紅爐雪」、一喝当「鋒」、崖崩石裂。化「生蛇」作「活龍」、点「黄金」為「生鍊」。去「縛解」粘、抽「釘拔」楔。更將「仏祖不伝機」、此界他方俱漏泄。(卍統藏二一〇・二六三d〜二六四a)

この真贊の内容は二種の塔銘や『元亨釈書』に載る自贊のことばとほぼ同一であり、慧開が覺心に付与した頂相贊の語句が『無門開和尚語録』の「真贊」からも確かめられる。おそらく宋版『無門開和尚語録』は覺心が日本に帰国した後、まもない時期に刊行されたものと見られ、その中に辛うじて「日本覺心長老請」の真贊も収められたわけであろう。

一方、京都市右京区宇多野上ノ谷町に存する臨濟宗建仁寺派の古刹、正覺山妙光寺には宝祐二年(二二五四)に慧開自身が自贊を揮毫した絹本着色「無門慧開禪師頂相」一幅が所蔵されて現存している。妙光寺は内大臣の花山院師繼(妙光寺内大臣、一二三二—一二八二)が亡き長男の花山院忠季(法名は妙光)の菩提を弔うべく創建した禪寺で、弘安八年(二二八五)に至つて忠季の弟に当たる花山院師信(空若心性、一二七五—一三二二)の依頼で覺心が開山第一祖に迎えられている。妙光寺に所蔵される「無門慧開禪師頂相」の慧開は左を向いた半身像で描かれており、杭州の護国仁王寺にて贊が付されている。妙光寺様の許可を得てここに慧開自贊頂相を掲載しておくことにしたい。

妙光寺に所蔵される「無門慧開禪師頂相」に揮毫された慧開の自贊を句読点を付して掲載すると、

用「迷子訣」、飛「紅爐雪」。一喝當「鋒」、崖類石裂。

有時方便、以「無字」為「鐵掃帚」、蕩「四衆疑」。

有時拍「背」、似「本意」揮「麈拳頭」、結「千聖舌」。

化「生蛇」作「活龍」、点「黄金」為「鈍鍊」。去「縛解」粘、抽「釘拔」楔。

更將「仏祖不伝機」、此界他方俱漏泄。

日本覺心長老、繪「予陋質」就請「著語」。

宝祐二年、西湖護国禪寺開山、賜「対仏眼」老僧慧開書。

と翻刻されよう。さらにこれを書き下して見るならば、

迷子訣を用いて、紅爐の雪を飛ばす。一喝、鋒に当たつて、崖は類れ石は裂く。

有時時は方便にて、無字を以つて鉄掃帚と為し、四衆の疑いを蕩す。

有る時は背を拍きて、本意を似して麈拳頭を揮い、千聖の舌を結ぶ。

無門慧開の生涯と『無門関』(三) (佐藤)

無門慧開禪師頂相 自贊 京都市・妙光寺所蔵



生蛇を化して活龍と作し、黄金を点じて鈍鍔と為す。縛を去り粘を解き、釘を抜き楔を抜く。

更に仏祖不伝の機を將つて、此界・佗方俱に漏泄す。

日本の覚心長老、予が陋質を絵き、就いて著語を請う。

宝祐二年、西湖護国禪寺開山、仏眼と賜對せらるる老僧慧開、書す。

と判読される。自贊の部分の語句は『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』に記される内容と一致しており、若干の字句の異同が認められる程度である。絵師に慧開の肖像画を描いてもらい、完成に至るまでにはそれなりの日数を要したはずであろうから、おそらく覚心は慧開から印可を得て後まもない頃に頂相の作製を依頼し、その間、覚心は近隣諸山の歴遊に赴いていたのかも知れない。

迷子訣とは道に迷った子を導くための方法であり、紅爐の雪とはもともと痕跡のないものの譬えであるから、ここでは慧開が学人接化のために多くの施設方便なり禪の機関を駆使したことを意味しよう。慧開は自贊の中で、一喝をなしたり、無字の公案を用いて四方の学徒の疑いを払い除けたり、あるいは相手の胸倉を叩いて拳頭を揮う自らの姿を詠じており、厳格な禅者として悪辣な手段指導を行ってきたことを懐古している。そして、こうした仏祖不伝のはたらきを自在に用い、覚心が日本の地で大いに活躍することを願っている。此界とはここでは中国南宋のこと、他方（佗方）とは日本の地を指している。単に「宝祐二年」とのみ記し、月日が挿入されていないのは、おそらく慧開が予め月日を記入せずに年号のみを揮毫していたためではなからうか。三月二十九日は慧開が自贊を揮毫した日ではなく、あくまで「無門慧開禪師頂相贊」が慧開から覚心へと正式に授与された日と解すべきであろう。おそらく覚心は四月初旬には護国仁王寺の慧開のもとを辞し、一旦、杭州から明州へと赴き、明州の港から日本に向かう商船に乗り換えて帰国の途に着いたものであろう。

### 慧開が『大光明蔵』に序文を寄せる

宝祐年間（一二五三—一二五八）に慧開がなした活動のさまは、日本僧覚心との関わりを除くとあまり知られていない。そんな中で注目すべきは大慧派の橘洲宝曇（少雲、一一二九—一一九七）が編集した『大光明蔵』三巻の刊本に、当時の慧開がなした活動を伝える記事が残されていることであろう。『大光明蔵』は一に「伝燈大光明蔵」とも称されており、

宝曇が『景德伝燈録』などから禅宗諸師の機縁などを選んでまとめ、各祖師の章には宝曇自身による評語または讃が付されている。南嶽系(臨濟宗)の禅者を中心に、これに青原系を若干加えており、宝曇の本師に当たる大慧派祖の大慧宗杲(妙喜、大慧普覚禅師、一〇八九—一一六三)の章までが収められている。<sup>(29)</sup>

この『大光明蔵』の冒頭に、杭州餘杭県の径山興聖万寿禅寺の住持であった松源派の石溪心月(仏海禅師、一一七七—一二五六)が「開版疏」を寄せており、ついで杭州錢塘県の靈洞山護国仁王禅寺の住持であった慧開も同様に「開版疏」を寄せている。はじめに径山の住持であった心月が書した「開版疏」の全文を記すならば、

大光明蔵、橘洲曇少雲秉<sub>二</sub>史筆<sub>一</sub>、勾<sub>二</sub>索<sub>一</sub>仏祖機縁、撫<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>書、使<sub>二</sub>學者詳<sub>二</sub>其旨<sub>一</sub>。於<sub>二</sub>宗門<sub>一</sub>非<sub>二</sub>小補<sub>一</sub>也。然後人伝写争宝<sub>レ</sub>之、而真贋相半。四明明禅人、校<sub>二</sub>定元本<sub>一</sub>刊行。須<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>志之士与<sub>二</sub>賢士大夫<sub>一</sub>相助發<sub>レ</sub>揮<sub>レ</sub>之。重説<sub>レ</sub>偈曰、

仏祖親伝<sub>二</sub>真命脉<sub>一</sub>、橘洲筆底發<sub>二</sub>淵源<sub>一</sub>、郁乎光燄十万丈、只貴<sub>二</sub>知音<sub>一</sub>一印伝。  
宝祐乙卯自恣日、径山石谿心月書。(正統蔵一三七・三八五b)

という内容になっている。かつて覚心が入宋した直後に参学した曹源派の癡絶道冲が示寂した後、その後席を継いで径山に住持したのは無準師範や癡絶道冲と同じ蜀僧の石溪心月であった。心月の門下には後に日本に渡来した大休正念(仏源禅師、一二五—一二八九)がおり、日本から入宋求法した無象静照(法海禅師、一二三四—一三〇六)も心月の法を嗣いで帰国している。径山の心月のもとで四明(明州)出身の竹窓紹明という書記が宝曇編『大光明蔵』を刊行せんと企てており、住持の心月は宝祐三年(一二五五)の自恣の日に疏文を撰して紹明に付与している。自恣とは夏安居の最終日である七月一五日に修行僧が制中の罪過について反省懺悔する作法のことであるから、自恣日とは解制日の七月一五日の意にほかならない。心月は宝祐四年(一二五六)六月九日に八〇歳前後で示寂している<sup>(30)</sup>ことから、この「開版疏」は示寂する前年に記された貴重なものである。

日本の南北朝期に編集された『仏祖正伝宗派図』や室町中期に編集された『仏祖宗派図』および江戸期に編集された『正誤仏祖正伝宗派図』といった禅宗の宗派図の類いを紐解いても、心月の法嗣に竹窓紹明という禅者の名は載せられていない。わずかに『癡絶和尚語録』卷下「径山癡絶和尚法語」に「示<sub>二</sub>紹明維那<sub>一</sub>」(前住「建康天禧」)と題した法語が収められており、ここにいう紹明が竹窓紹明その人を指すのであれば、紹明はもともと癡絶道冲の法を嗣いだ高弟の一人であったと見られる<sup>(31)</sup>。紹明は道冲の後席を継いだ心月のもとで径山の書記という要職(西班牙頭首)を掌っていたことに

なり、その間に『大光明藏』の刊行を企画していたものであろう。

一方、護国仁王禪寺の慧開も径山の心月と同じ頃に『大光明藏』に「開版疏」を寄せているものと見られ、『大光明藏』に載せられている慧開の疏文とはつぎのような内容になっている。

径山明書記、持<sub>レ</sub>伝燈大光明藏并石谿老子疏語、扣<sub>レ</sub>知音<sub>一</sub>刊行。不<sub>レ</sub>揣<sub>二</sub>荒蕪<sub>一</sub>、見<sub>レ</sub>義勇<sub>レ</sub>為、迅筆野語、以<sub>レ</sub>壯<sub>二</sub>其志<sub>一</sub>云、

仏祖単伝無<sub>レ</sub>尽燈、分<sub>二</sub>輝百億<sub>一</sub>愈晶明。曇孫饒舌添<sub>二</sub>光采<sub>一</sub>、共力流<sub>二</sub>通正眼睛<sub>一</sub>。

靈洞護國遠孫無門慧開、贊成。(已統藏一三七・三八五b-c)

この「開版疏」の文章は当時の慧開が如何なる活動をなしていたのか、その一端を知る上でも貴重であることから、書き下しも載せておくことにしたい。

径山の明書記、『伝燈大光明藏』並びに石谿老子の「疏語」を持ちて、知音を叩きて刊行せんとす。荒蕪を揣らず、義を見て為すに勇む、迅筆・野語にて、以て其の志しを壮まして云う。

仏祖単伝の無<sub>レ</sub>尽燈、輝きを百億に分ちて愈いよ晶明たり。曇孫は饒舌にして光采を添う、共に力めて正眼睛を流通せん。靈洞護國の遠孫、無門慧開、贊成す。

径山の石溪心月のもとで四明(明州)出身の竹窓紹明という書記が『大光明藏』を重刊する際に心月の疏文を得ており、これを持参して勸募のため諸地をめぐり、護国仁王禪寺に到って慧開にも同じく「開版疏」を請うたものであろう。心月は宝祐三年の自恣の日に疏文を撰しているから、慧開もその後まもなく同様に「開版疏」を寄せているものと見られる。おそらく紹明としては当代に国都杭州の禅刹で大きな化導を敷いていた径山の心月に匹敵する禅匠として護国仁王禪寺の慧開に白羽の矢を立て、真摯に慧開のもとを叩いて『大光明藏』刊行のため賛助を慧開に求めたものであろう。時期こそ明記されていないが、つぎの径山住持となった大慧派の偃溪広聞(仏智禪師、一一八九—一二六三)ではなく、護国仁王寺の慧開が「開版疏」を撰していることから、心月が径山で示寂する宝祐四年六月以前に紹明は護国仁王寺の慧開のもとを訪ね、慧開より親しく「開版疏」を得ているものと推測され、慧開も『大光明藏』の刊行に賛意を示しているわけである。

『大光明藏』に寄せた慧開の「開版疏」は覚心が日本に帰った後に慧開が如何なる活動をなしていたか、その一端を伝えている点で興味深いものがある。慧開は歴代の仏祖によって法燈が無<sub>レ</sub>限に枝分かれしてそれぞれに光明を放つて

きたこと、そのありようを橘洲宝曇がすぐれた言説を通して紹介したとし、正しい仏祖の教えの眼目を広く流通させた旨を語っている。ただし、実際に『大光明蔵』が刊行されたのは咸淳元年（一二六五）に至つてのことであり、実に慧開が示寂して五年の歳月を経た後のことであつた。

### 法弟の竹巖妙印が示寂する

晩年を迎えた慧開にとつて落胆したであろう事跡として、同門の法弟に当たる竹巖妙印（竹崖とも、一一八七—一二五五）が慧開に先んじて宝祐三年（一二五五）八月二三日に世寿六九歳で示寂している事実が挙げられる。大慧派の無文道璨（柳塘、一一二四—一二七二）の詩文集『無文印』巻五「墓誌塔銘」には、禅僧の塔銘として「石霜竹巖印禪師塔銘」と「天池雪屋韶禪師塔銘」が収められており、この伝記史料は同じく道璨の詩文集である『柳塘外集』巻四「塏銘」にも「石霜竹崖印禪師塏銘」と「天池雪屋韶禪師塏銘」として載せられている。「石霜竹巖印禪師塔銘」が妙印の事跡を記した塔銘であり、いま一方の「天池雪屋韶禪師塔銘」は江西の名峰、廬山の天池禪寺に住持した曹洞宗真歇派の雪屋正韶（一一〇二—一二六〇）に対する塔銘である。正韶は明州天童山の長翁如浄（一一六二—一二三七）に参じて法を嗣いでいるから、日本の永平道元とは同門に当たつている。かつて慧開の本師月林師観は明州奉化県の雪竇山資聖禪寺に到つて真歇派の足庵智鑑（一一〇五—一一九二）のもとで首座を務めているが、その智鑑の法孫に当たるのが道元や正韶であり、師観の法嗣が慧開や妙印なのである。しかも覚心は日本で道元に就いて菩薩戒を受けた後、入宋して慧開の法を嗣いでいるのも不思議な因縁といつてよいだろう。

妙印に関しては月林師観の法嗣について列記した際にすでに簡略に触れておいたが、「石霜竹巖印禪師塔銘」には妙印が諸禪刹に住持してから示寂する前後に至るまでの動静をつぎのように伝えている。

舍人張公嗣古、以長沙谷山請出世。劬躬苦節、有古住山人風味。六年侍郎余公嶽遷之石霜。湖南自無散席、納子偃偃無所歸宿。至是、雲集如水赴壑。未幾、建之開元、瑞之黃蘗、南嶽之福嚴、洪之翠巖・宝峯、聘命交至、率謝不往。徙高安洞山、行道如石霜時。枢相賈公似道鎮九江、虛東林屈師、為廬山重。師入院、不兩月即去、歸臥旧業。僉枢陳公讎守潭、首以龍牙起師。未領事易石霜、法道復大振、長松片石皆長顔色。尽癸所積築、菴曰紫霞、為巖焉休焉之地。侍郎湯公中、為之記。丞相趙公葵、燕居里第招師、論道無虛月。宝祐二年秋、退居紫霞。明年示疾、

手書二四句偈<sup>一</sup>云、六十九年、一場大夢、帰去來兮、珍重珍重。実八月二十三日。茶毘牙齒數珠不壞、舍利陸離五色相激射。塔<sup>二</sup>于紫霞菴側。度<sup>三</sup>小師<sup>四</sup>四十餘輩。其徒患隆、以<sup>五</sup>師四會語<sup>六</sup>、走<sup>七</sup>數千里<sup>八</sup>、求<sup>九</sup>三校<sup>十</sup>於雪竇西江<sup>十一</sup>、復來<sup>十二</sup>番請<sup>十三</sup>余銘<sup>十四</sup>。余周<sup>十五</sup>旋諸老問<sup>十六</sup>、竊聞<sup>十七</sup>議論<sup>十八</sup>。

妙印は南宋後期に禪の古道場たる江西・湖南の禪利を守ることを自らの責務とした禪者であったといつてよく、浙江・江蘇の五山十刹などには一切陞住することなく世を終えている。すでに述べたごとく慧開も初めは江西の地で黄龍山などを中心に化導を敷いていたが、晩年は郷里浙江へと戻つて杭州の護国仁王寺を中心に活動しており、そのことが日本僧覚心が慧開に參ずる因縁ともなっている。

それに対して豫章（江西省）進賢の萬氏の出身であつた妙印は、修行參学期こそ浙江や江蘇の禪利で過<sup>①</sup>したものの、帰郷して後は生涯にわたり江西・湖南の禪利を離れなかつた。潭州（長沙府）長沙県西七〇里の谷山宝寧禪寺に開堂出世し、同じく潭州瀏陽県西南八〇里の石霜山崇勝禪寺、瑞州（筠州）新昌県（もと高安県）三〇都の洞山普利禪寺、および江州（九江府）德化泉南の廬山の東林太平興國禪寺という四ヶ寺の住持を務めており、一貫して江西・湖南の地に留まりつづけたのである。とりわけ、それまで湖南の地で化導を振るつた大慧派の無二〇月が逝去して後は、妙印が江西・湖南で活動する禪匠を代表する存在となつていたようである。『枯崖和尚漫録』卷中「潭州石霜竹巖印禪師」の項によれば、妙印が石霜山でなした活動や問答を記した後に「同門秀孤峰・開無門、皆推遜<sup>②</sup>之」（正統蔵一四八・八六b・c）という記事が存しており、同門の慧開や孤峰徳秀らが石霜山の妙印の化導を高く評していたことを伝えている。

妙印の四会録とは妙印が住持した潭州の谷山宝寧寺、潭州の石霜山崇勝寺、瑞州の洞山普利寺、江州の廬山東林寺という四ヶ寺でなした語録を編集したものであり、おそらく『竹巖和尚語録』といった表題であつたと推測される。妙印は石霜山（再住を含む）を中心にほぼ江西・湖南の地に留まつて住持職を務めており、曹洞宗発祥の祖庭である洞山普利寺にも住持している。現今に『竹巖和尚語録』が伝存していたならば、南宋後期の洞山普利寺や石霜山崇勝寺など埋もれた江西・湖南の禪利の状況についても多くの貴重な事跡を提供し得たはずであろう。

「石霜竹巖印禪師塔銘」は妙印が石霜山の一隅に創建した紫霞庵の一隅に立石されたと伝えられるが、状況からして編纂された『竹巖和尚語録』の末尾にも妙印の「塔銘」の全文は収録されたことであろう。紫霞庵は生前の妙印が退閑の居所となし、宝祐三年八月二三日に「六十九年、一場の大夢。帰去りなん来ざ、珍重、珍重」という遺偈を残して示

寂した場所である。妙印が示寂した後、紫霞庵の傍らに墓塔が立てられ、紫霞庵は妙印の塔所(塔頭)として機能したと伝えられる。「石霜竹巖印禪師塔銘」を道璨に依頼したのは妙印の門人であった惠隆という禅者であり、惠隆は妙印の四会の語録を編集して明州奉化県の雪竇山資聖禅寺に赴いて楊岐派の西江広謀に校勘を依頼しており、さらに饒州鄱陽県の東湖薦福禅寺に到って住持道璨に亡き妙印のために塔銘を撰述してほしい旨を依頼していることが知られる。

道璨が撰した「石霜竹巖印禪師塔銘」には、残念ながら慧開のことが何も記されていないが、慧開は妙印と修行期間を共にし、道交も深かったと見られることから、あるいは『竹巖和尚語録』の刊行に際して、慧開が序文か跋文の類いを寄せていたとしても不思議ではなからう。少なくとも『竹巖和尚語録』には同門の慧開や孤峰徳秀らとの関わりを伝える何らかの記事が収められていたものと推測される。

### 禅定院首座の覚心が護国仁王寺の慧開に書簡を呈する

一方、日本に帰国した覚心はその後も東シナ海を隔てて杭州護国仁王寺の慧開との間でしばしば書簡のやり取りをなしている。『法燈円明国師遺芳録』には、覚心が慧開に宛てた最初の書簡として、

上書無門和尚。

大日本国建長八年歲次丙辰二月十三日、紀州高野山禅定院首座比丘覚心、頓首百拜、奉書于大宋国行在臨安府護国禅寺仏眼禪師大和尚尊前。即日奉仲氣喧、伏惟、燕坐湖山、人天儼祐、法候動止万福。覚心、拜違慈相、粵遠隔海東、屈指三年、仰德之私、未嘗少忘、憶在西湖、屢扣禪関、開堯心地、肝腸裂破、胸中坦然、豈不是和尚方便之所致也。粉骨碎身、何足為報乎。日夜西望落日之邦、焚香馳想、遙拜而已。忽遇便風、謹裁小牘、以伸布万一。伏乞、棟梁此道、以度群生下情。不勝至禱。不宣。覚心、頓首百拜上覆。

水昌念珠一連(金子粧)・金子一塊(十二銭重)、因便拜上、聊表微志而已。冀幸咲留。覚心、百拜再覆。

(日仏全四八・二七一 a)

という文面の写しが載せられている。これは『法燈円明国師行実年譜』「丙辰、建長八(十月五日庚元改元)宝祐四年、師五十歳」の項にも「上書無門禪師云」として載せられている。この書簡を書き下すならば、つぎのようになるう。

書を無門和尚に上る。



大日本国建長八年歳次丙辰二月十三日、紀州高野山禪定院の首座比丘覺心、頓首百拝して、書を大宋国行在臨安府護国禪師の仏眼禪師大和尚の尊前に奉る。即日奉仲気喧、伏して惟るに、湖山に燕坐し、人天は儼祐にして、法候動止、万福たり。覺心、慈相を拝違し、粵に遠く海東に帰る。指を屈するに三年、徳を仰ぐの私、未だ嘗て少しも忘れず、憶いは西湖に在り。屢しば禪関を扣き、心地を開発し、肝腸は裂破し、胸中は坦然たり、豈に是れ和尚が方便の致す所にあらざらんや。粉骨碎身し、何もて報いと為すに足らんや。日夜、西のかた落日の邦を望み、香を焚きて想いを馳せ、遙かに拝するのみ。忽ち便風に遇い、謹んで小牘を裁て、以て万一を伸布す。伏して乞うらくは、此の道を棟梁し、以て群生下情を度せんことを。至禱に勝えず。不宣。覺心、頓首百拝して上覆す。

水昌念珠一連（金子粧）・金子一塊（十二銭重）、便に因りて拝上し、聊か微志を表すのみ。冀わくは幸咲して留めたまわんことを。覺心、百拝して再覆す。

この書簡は建長八年（南宋の宝祐四年、一二五六）二月一三日の日付けで著されており、紀伊（和歌山県）の高野山に存する禪定院（後の金剛三昧院）で首座を勤めていた覺心が杭州（行在臨安府）の靈洞山護国禪寺の慧開（仏眼禪師）に宛てたものである。当時、帰国した覺心は高野山中の禪定院に戻って首座を務めており、慧開のもとを辞してから丸二年近い歳月が経過した時点でこの書簡を認めているわけである。しかも「忽ち便風に遇い、謹んで小牘を裁て」と述べているから、これより先に慧開から何らかの便りが届き、それに応じて覺心は益々の活躍を願う返書を慧開のために認めたものらしい。慧開としては遠く日本に帰った覺心の安否が知りたくて、近況を伺う小牘（短い書簡）を送ってきたものである。おそらく覺心は帰国に際して高野山の禪定院に戻ることを予め慧開に告げていたはずであり、慧開は日本に向かう商船に高野山禪定院の覺心に宛てた書簡を託したものであろう。覺心は最初に慧開の動静を思い遣り、ついで帰国して足掛け三年目を迎えた自らの心境を語っており、西湖のほとり、護国仁王寺の慧開のもとで修行した日々を懐かしみ、落日の彼方（西方）に存する南宋の地を思い遣っている。しかもこのとき覺心は返書とともに微志として水晶の念珠一連と重さ十二銭の金子一塊を慧開に献上している。

高野山金剛峯寺編『高野山文書』六巻の内第二巻は「金剛三昧院文書」であり、三八二通の文書が活字化されている。その中に「金剛三昧院経蔵納之」として三七九「高野山金剛三昧院長老住持次第」が掲載されており、首座覺心に關する記述として、

第五長老真空、廻心房。衣笠大納言定能孫、大納言律師定兼。

南都東大寺住、三論碩学。遁世之後、当山參籠。本ハ醍醐理性院行賢法印入室也。仍以<sub>二</sub>彼流<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>本。遁世之後、受<sub>二</sub>諸流<sub>一</sub>印信一事五十餘人、云々。建長七年乙卯、被<sub>レ</sub>補<sub>二</sub>当寺長老<sub>一</sub>。寺務二ヶ年。辞退之後、木幡觀音院。其後於<sub>二</sub>関東無量寿院<sub>一</sub>。文永五年七月八日入滅。行年六十五。

首座覚心、心地房。(高野山文書六・四〇二〜四〇三頁)

と記されている。廻心房真空(大納言律師定兼、一二〇四—一二六八)という人が建長七年(一二五五)に金剛三昧院の第五世として入院し、建長八年まで二年間にわたり住持を務めている。このときに覚心が首座として真空の化導を補佐していたことを伝えているから、時期的に慧開に呈した書簡と合致していることになろう。<sup>37)</sup>

この覚心の書簡に対してさらに慧開が認めた回書(返信)も『法燈円明国師遺芳録』に載せられており、その全文はつぎのような内容となっている。

無門和尚回書。

人至<sub>レ</sub>収<sub>レ</sub>書、知<sub>二</sub>得心座元安樂<sub>一</sub>。蒙<sub>レ</sub>惠<sub>二</sub>教珠昌(水昂)並金重十二錢、一一收訖。山偈奉<sub>レ</sub>贈、

百八摩尼顆々円、遼天鼻孔一斉穿。恒河沙数仏菩薩、毎日呼来跳<sub>二</sub>一圏<sub>一</sub>。

御前靈洞護国仁王禪寺開山、賜対仏眼禪師。

書復<sub>二</sub>大日本国紀州高野山禪定院首座心公<sub>一</sub>、収。

宝祐五年三月十三日、大宋国臨安府靈洞山回書。(日仏全四八・二七一 a)

この書簡も『法燈円明国師行実年譜』「丁巳、正嘉改元、宝祐五、師五十一歳」の項に「仏眼禪師回書云」として収められている。慧開の回書も書き下してみるならば、つぎのようになるろう。

無門和尚の回書。

人至りて書を収め、心座元の安樂なるを知り得たり。数珠・水晶並びに金重十二錢を恵むを蒙り、一一に収め訖わる。山偈をば贈り奉る、

百八の摩尼、顆々として円かなり、遼天の鼻孔、一斉に穿つ。恒河沙数の仏菩薩、毎日呼び来たりて一圏を跳ぶ。

御前靈洞護国仁王禪寺開山、賜対仏眼禪師。

書を大日本国紀州高野山禪定院の首座心公に復す、収めたまえ。

宝祐五年三月十三日、大宋国臨安府の靈洞山より回書す。

この回書は宝祐五年（日本の康元二年・正嘉元年、一二五七）三月一三日の日付けで靈洞山すなわち護国仁王禪寺において記されており、慧開は高野山禪定院の首座覺心に対してその無事を悦ぶとともに、贈られた水晶と金子をありがたく受納した旨を述べ、併せて自ら詠じた七言の偈頌を返礼として寄せている。慧開のもとに到った人が誰なのかは定かでないが、覺心門下の僧侶なのか覺心ゆかりの海商（俗人の類いであろうか。慧開の回書には覺心を「禪定院首座心公」と表記しているから、慧開は回書を認めた時点で覺心をいまだ首座（座元）として認識していたことになろう。また「百八の摩尼、顆々として円かなり、遼天の鼻孔、一斉に穿つ」とは、覺心が贈った水晶の數珠の一粒一粒が円満なる宝玉であり、遙かなる天空の中心を一気に貫いているといった意であろう。つづく「恒河沙數の仏菩薩、毎日呼び来たりて一圏を跳ぶ」とは、ガンジス川の沙ほど無數の仏菩薩が毎日呼び合つて杭州護国仁王寺の慧開と高野山禪定院の覺心の間を飛び交っているといった内容であろうか。

### 覺心が禪定院に開堂して護国仁王寺の慧開に法嗣書を呈する

正嘉元年の後半に至つて覺心は禪定院の住持に就任しており、このとき覺心は一瓣香を慧開のために拈出し、慧開の法を嗣いで正式に臨濟宗楊岐派の禪者となつたことを高野山の内外に表明している。『法燈円明国師行実年譜』「戊午、正嘉二、宝祐六、師五十二歳」の項によれば「通<sub>二</sub>嗣書於無門<sub>一</sub>」という記載が存しているから、正嘉二年（南宋の宝祐六年、一二五八）に覺心は禪定院の住持となつた際に嗣書を遠く護国仁王寺の慧開のもとに送つてることが知られる。この場合の「嗣書」とは師匠から弟子に授けられる伝法の証しとしての「嗣書」や「血脉」の類いではなく、弟子が師匠と仰いだ禪者に呈する「法嗣書」のことであり、法を嗣いで開堂出世して陞座したことを本師のもとに告げる書簡をいう。覺心としてはこれより正式に慧開の法を嗣いだ高弟として活動を開始していくことを内外ともに公表する意味合いが存したわけである。真言密教の聖地である高野山中において、覺心は南宋禪者たる無門慧開の法を嗣いで禪定院に住持することを表明したわけであるから、宋朝禪風の晋山開堂に則つたかたちで入寺の儀式を行つたものと推測される。

『高野山文書』卷二卷「金剛三昧院文書」の「高野山金剛三昧院長老住持次第」に第六世長老覺心に関して、

第六長老覚心、心地房。信州神林人。

建長元年之比、為求道渡宋、即大宋国臨安府護国禪寺無門和尚參見、深致信敬。參禪參学無疲厭。和尚殊垂慈憐示仏法。其法之次第、併見彼塔頭之碑文。帰朝之後、康元二年丙辰、被補当寺長老、寺務三ヶ年。辞退之後、為由良西方禪寺長老。道德帰天下都鄙道俗之輩、致供養恭敬事如市、云々。然而永仁六年戊戌十月十三日、於西方寺帰円寂(端座)。行年九十二。

首座証忍、妙觀房。本号定珍、越前アサリ。(高野山文書一・四〇三頁)

という記載が存している。これによれば、覚心は康元二年丙辰に禪定院に長老として住持し、三年を経て住持を退いたことが知られる。ただし、康元元年(一二五六)が丙辰であり、この年は建長八年が一月五日に康元と改元されている。また康元二年(一二五七)は丁巳であり、三月一四日に正嘉と改元されている。いずれにせよ、覚心が禪定院に入院開堂したのが康元年限られるのであれば、この半年近い間のできこととなろう。しかも覚心が禪定院の住持を務めていた期間が三年間であったとされるから、康元元年の冬からとすれば、正嘉二年(一二五八)まで、康元二年の春からとすれば、正嘉三年(正元元年、一二五九)まで住持を務めていたことになろう。また住持覚心のもとで首座を務めたのは定珍証忍(妙觀房)という越前(福井県)出身の僧であったとされる。

いずれにせよ、高野山の禪定院に住持として開堂出世するのの際して、覚心は南宋禅林の慣例に則ったかたちで法嗣書を本師と仰いだ護国仁王寺の慧開のもとに呈しているわけである。いまだ健在であった老身の慧開にとって、遠く日本から覚心の法嗣書が届いたときの心情は如何ほどであったことだろうか、その感慨のほどが偲ばれる。

### 護国仁王寺の慧開が長老覚心に最後の回書を送る

覚心が慧開に宛てた法嗣書の書簡に関しては文面が知られないものの、『法燈円明国師遺芳録』にはつぎのような慧開からの回書が掲載されている。

無門和尚回書。

来書取訖、備悉其詳、今付去御前陞座法衣一頂・東山七葉図一本・十段錦十幅・賜対法語二幅・無門自警関振子一幅・先師月林観禪師躰道銘一幅。

大宋国御前靈洞護国仁王禪寺開山賜対仏眼禪師、書復<sup>二</sup>日本国覺心長老、收。

大宋開慶元年八月十五日回。(日仏全四八・二七一 a、b)

この慧開の回書も『法燈円明国師行実年譜』の「庚申、正元二(四月十三日、文応改元) 龜山院、兀庵来朝、宋景定元、師五十四歳」の項に「九月一日、於<sup>二</sup>鷲峰<sup>一</sup>接<sup>二</sup>無門所<sup>レ</sup>賜開慶元年八月十五日之回書并信物等、仏眼書云」として「来書收訖」以下の文面が載せられている。この慧開の回書も書き下してみるならば、つぎのようになる。

無門和尚の回書。

来書をば収め訖わり、其の詳しきを備悉す。今、御前陞座の法衣一頂と「東山七葉図」一本と「十段錦」十幅と「賜対法語」二幅と「無門自警閑振子」一幅と先師月林観禪師「鉢道銘」一幅を付し去る。

大宋国の御前靈洞護国仁王禪寺開山、賜対仏眼禪師、書して日本国の覺心長老に復す、収めたまえ。

大宋開慶元年八月十五日、回す。

ところが、由良の西方興国寺に所蔵される卷子仕立『興国寺記録』には、この「無門返書」として、

来書收訖、備<sup>二</sup>悉其詳<sup>一</sup>、今付<sup>二</sup>去御前陞座法衣一頂・東山七葉図一本(乃正伝宗派)・法語十段錦、賜対法語・無門自警閑振子・先師月林観体道銘<sup>一</sup>、住院切忘太惶々、誦<sup>レ</sup>暗些兒住易成。第一先須<sup>レ</sup>尊<sup>二</sup>仏戒<sup>一</sup>、第二且要<sup>レ</sup>合<sup>二</sup>人情<sup>一</sup>。常住絲毫不可<sup>レ</sup>犯、己行須<sup>レ</sup>教<sup>二</sup>徹底清<sup>一</sup>。善惡<sup>二</sup>二魔来括擾<sup>一</sup>、此時牢把<sup>二</sup>定盤星<sup>一</sup>。老僧年邁、来日無<sup>レ</sup>多、幻身有<sup>レ</sup>限。汝宜<sup>下</sup>加<sup>二</sup>其願力<sup>一</sup>、与<sup>二</sup>黄面瞿曇<sup>一</sup>出<sup>中</sup>一口气<sup>上</sup>、至祝至祝。

大宋国御前靈洞護国仁王禪寺開山、賜対仏眼禪師。

書復<sup>二</sup>日本国覺心長老、收。

大宋開慶元年八月十五日回。

〔印有<sup>レ</sup>三、日本正元元年、后深草院之代終〕(和歌山県史・中世史料二・八三五b、八三六a)

という慧開からの回書の内容が載せられており、『法燈円明国師遺芳録』や『法燈円明国師行実年譜』の内容に比べるとかなり詳しくなっている。おそらく『興国寺記録』に載る文面が慧開が禪定院の覺心に宛てた回書の全文を筆写した正確な写しと見られる。

慧開の回書は南宋の開慶元年(日本の正元二年、一二五九)八月一五日すなわち中秋の日付で書かれている。開慶元年

といえは慧開は七七歳に達しており、まさに示寂する一年余り以前に当たっている。回書の内容からすると、これに先立って日本の覚心から「法嗣書」の類いが届けられたものらしく、覚心からの「来書」というのが「法嗣書」のことを指すであろう<sup>(4)</sup>。しかも興味深いのは、これより先の回書が「心座元」「首座心公」として首座(座元)の覚心宛てであったのに対し、このときの回書では明確に覚心の肩書きを「日本国覚心長老」と尊称していることであろう。覚心は正嘉元年の後半に高野山の禅定院に住持として開堂出世し、その報告として翌年の正嘉二年の早々には海を隔てて本師慧開に「法嗣書」の類いを送ったものであろう。

覚心は高野山の禅定院に住持する際に真言宗の密教的なやり方ではなく、南宋禅林の規範に則った禅宗風に晋山開堂の入寺式を行なったものであろう。禅定院すなわち後の金剛三昧院は、鎌倉幕府の北条政子(尼御台、安養院、一一五七—一二二五)が我が子である三代將軍源実朝(大慈寺殿、一一九二—一二一九)の菩提を弔うべく高野山中に建立した禅院であり、開山に榮西門下の退耕行勇が迎えられ、密教と禅宗の併修がなされていた。もともと行勇門下であった覚心は禅定院の首座を経て住持を務めることになったわけであり、その一連の経過を踏まえた報告などを書面に認め、門人か海商を通して遠く南宋杭州の慧開のもとに「法嗣書」を呈したものと見られる。ただし、覚心はまもなく同じ正嘉二年の内に禅定院の住持職を退き、紀伊(和歌山県)日高郡由良荘の鷲峰山西方寺に居を移しているから、覚心が禅定院に住持していた期間は実質的に僅か一年余りに過ぎなかったことになろう。

長老住持として覚心が「法嗣書」を呈して報告したことに対し、慧開は自ら楊岐派ゆかりの伝法相承の品々を祝儀として回書とともに日本の覚心のもとへ贈っている。慧開からの回書と伝法相承の品々が由良鷲峰山の覚心のもとに届けられたのは、実に文応元年(南宋の景定元年、一二六〇)九月一日に至ってのことであった。慧開が回書を認めた南宋の開慶元年八月一五日から覚心がこれを拝受した日本の文応元年九月一日まで、一年以上もの歳月を費やした計算になる。おそらく商船の都合など諸般の事情が重なって多くの日数を費やしたものであるが、覚心がこれらの品々を実際に受け取ったのは、すでに慧開が示寂して数ヶ月を経過した時点のことであり、そのことはきわめて印象的なできごとであったといえよう。

慧開は独り立ちした日本の覚心に対して最後の訓戒として「第一に先づ須らく仏戒を尊ぶべし」と「第二に且らく人情に合せんことを要す」と示し、さらに「常住は絲毫も犯すべからず、己が行は須らく徹底して清からしむべし。善悪

の二魔、来たりて括擾するも、此の時、牢く定盤星を把えよ」と書き残している。その上で慧開は「老僧は年邁い、来日は多きこと無し、幻身に限り有り」と述べており、自らの死期が近いことを深く自覚していたさまが窺われる。

つぎに慧開が回書とともに最後に海を越えて覚心に授与した伝法の品々について、一通り整理してみることにした。御前陞座の法衣一頂とは、かつて慧開が皇帝理宗に謁見して陞座説法したときに身に搭けていた法衣すなわち袈裟一着のことである。『法燈円明国師行実年譜』の当該箇所には、

今付去御前陞座法衣一頂。法衣行青、地黄有<sup>二</sup>牡丹紋<sup>一</sup>、環玳瑁六角、條紫色。無門自筆<sup>三</sup>環之牌面<sup>四</sup>書<sup>二</sup>宣賜法衣之四字<sup>一</sup>。後牌裏<sup>五</sup>仏法僧宝之四字、左手之搭処<sup>六</sup>書<sup>二</sup>臣僧惠開授持之六字<sup>一</sup>。乃祈<sup>七</sup>雨時降。香之複子也前後一十八字、無門自筆也。

(由良町誌・史料、一三三二b～一三三三a)

とその形態や状況などが付記されており、この御前陞座の法衣には「宣賜法衣」「仏法僧宝」「臣僧惠開授持」など慧開自筆の文字が書き記されていたとされる。また「香之複子」とは香を包む袱紗のことであり、慧開自筆の一八字が書かれていたとされるが、具体的に如何なることばであったのかは記されていない。「東山七葉図」一本とは、東山すなわち楊岐派の五祖法演(東山)に関わる頂相のことであり、七葉とは五祖法演―開福道寧―月庵善果―老衲祖証―月林師観―無門慧開―無本覚心と次第した七代の祖師のことであるから、七葉図であれば日本の覚心を含めた七人の祖師を描いた図ということになる。したがって、慧開としては「東山七葉図」を覚心のもとに贈ることによって自派の正統な後継者、嫡嗣として真に覚心を認めたことを意味しよう。<sup>④</sup>「十段錦」一〇幅とは南宋内地で作られた美しい錦模様絹織物のことであろうか。つぎの「賜対法語」二幅とは、かつて慧開が皇帝理宗に招かれて入内した際に示した法語のもと原稿の類いと見られ、慧開直筆の墨蹟として二幅に軸装されていたものである。無門自警関振子」一幅とは、おそらく慧開が門下の修行僧に示した策励のための文章と見られ、これも慧開の直筆が一幅として軸装されていたものであろう。さらに「先師月林師観直筆鉢道銘」一幅とは、先師月林師観の直筆になる「鉢道銘」一幅のことであり、慧開は先師師観から付与された自筆の墨蹟を法嗣の覚心に授与しているわけである。<sup>⑤</sup>

これらはいずれも伝法の証としての相承物であって、最晩年の慧開が自ら所持していた貴重な品々を一括して日本の覚心のもとに遺物として託していることになり、慧開にとつて覚心の存在が如何に大きかったかを示す証拠でもある。これら慧開ゆかりの品々はいずれも現今に残されていたならば、きわめて貴重な楊岐派の絵画・墨蹟として国宝や

重要文化財に指定されて珍重されたはずの代物類であろう。

### 晩年に西湖湖畔の天龍庵に閑居する

日本の覚心が長老として独り立ちしたことを知ってか、老齢に達した慧開は晩年に護国仁王寺の煩瑣な住持職を退いて小庵に閑居している。この点は『補統高僧伝』では何も伝えていないが、『増集統伝燈録』によれば「師晩年倦於槌拈一庵居西湖之上、参学者猶衆」と記されている。槌は槌砧のこと、拈は拈子のことであり、いずれも住持が上堂説法する際などに使われる法具であるから、「槌拈に倦む」とあるのは住持としての職務とりわけ学人接化に疲れ果てた意にほかならない。そのため慧開は晩年に指導教化の第一線から身を引いて西湖の一隅に草庵を結んで閑居したものでらしい。晩年というのが具体的に何時のことを指すのかは明確でないが、先の覚心に宛てた回書によれば、開慶元年(一二五九)八月の時点でも慧開は「大宋国御前靈洞山仁王禅寺開山賜对佛眼禅师」と署名していることから、なお護国仁王寺の住持として活動していたことが知られる。慧開が住持職を退いたのはその後のことであり、開慶元年八月以降から景定元年(一二六〇)に入った頃までの間と見られ、まさに最晩年のできごとであったことになろう。法嗣の覚心が日本の地で新たに禅定院の住持として化導を開始したことを受け、自らの責務を果たし終えた安堵感から護国仁王寺の住持職を退く決断をなしたと見ることもできよう。

すでに触れたごとく後世の『民国杭州府志』卷三五「寺観二」の「錢塘泉」には、

天龍菴。在「掃帚鳴」(西湖志)。嘉定五年結菴。参政樓鑰書「天龍二大字」(咸淳志)。久圯(西湖志)。

と記されており、かつて慧開が嘉定五年(一二二二)に草庵を結んでしばらく天龍庵に閑居した頃より実に五〇年近い歳月が経過している。慧開は最晩年に至って再び天龍庵に隠閑したわけであり、天龍庵は護国仁王寺の広い境内地の一隅、掃帚塢に存したことが知られる。ただし、『増集統伝燈録』に「参学者、猶お衆し」と記されているから、天龍庵に退居したとはいえ、慧開は門戸を堅く閉ざして学人接化をすべて止めてしまったわけではなかった。天龍庵の慧開のもとにはその化導に浴したい参学の徒が多く集まり、慧開から直接に参禅学道の指南を受けんとしていたものらしい。老齢に達した慧開は煩雑な護国仁王寺の住持職を退きはしたものの、天龍庵の玄関は広く開けたままにし、訪れてきた学人らを接化育成することに邁進していたものであろう。まさに最晩年まで慧開はその道号・法諱のごとく無字の門



戸を広く開けて修行僧を指導接得しつづけたことなるう。

### 用意周到に慧開が七八歳の生涯を閉じる

慧開は景定元年（一二六〇）四月に杭州錢塘県の靈洞山護国仁王禪寺の一隅、天龍庵で七八歳の生涯を終えている。『増集統伝燈録』と『補統高僧伝』には慧開の示寂前後の動向が何も記されていないが、幸いに『無門開和尚語録』巻下の末尾に、慧開が示寂した前後の動向について、つぎのような「喪記」が付されている。

師於<sub>二</sub>庚申年三月二十八日<sub>一</sub>、辞<sub>二</sub>履齋丞相及諸府第朝士<sub>一</sub>。履齋問<sub>レ</sub>師、何日去。師答云、仏生日前去也。四月一日、師命<sub>レ</sub>工砌<sub>レ</sub>塔。至<sub>二</sub>初六日晚<sub>一</sub>、問<sub>レ</sub>匠、畢<sub>レ</sub>工也未。匠答云、已畢<sub>レ</sub>工来、早請<sub>二</sub>禪師看<sub>レ</sub>塔。師於<sub>二</sub>初七日早<sub>一</sub>看<sub>レ</sub>塔回<sub>二</sub>方丈。索<sub>レ</sub>紙写<sub>二</sub>遺書、自撰<sub>二</sub>起龕語<sub>一</sub>云、地水火風、夢幻泡影、七十八年、一彈指頃。孝子順孫休<sub>二</sub>恋慕<sub>一</sub>、八臂那吒攔<sub>レ</sub>不住。宝所在<sub>レ</sub>近、休<sub>レ</sub>恋<sub>二</sub>化城<sub>一</sub>。起<sub>二</sub>入塔語<sub>一</sub>曰、東西十万、南北八千、到处去来、不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>此。此之描不<sub>レ</sub>成兮画不<sub>レ</sub>就、贊不<sub>レ</sub>及兮休<sub>二</sub>生受<sub>一</sub>、本来面目露堂堂。外面風頭稍硬、帰<sub>二</sub>来暖処<sub>一</sub>商量。法身遍界不<sub>二</sub>曾藏<sub>一</sub>、毒惡声名播<sub>二</sub>大唐<sub>一</sub>。辞世偈云、虚空不<sub>レ</sub>生、虚空不<sub>レ</sub>滅、証<sub>二</sub>得虚空<sub>一</sub>、虚空不<sub>レ</sub>別。書<sub>レ</sub>偈畢、跣<sub>レ</sub>而逝。都知王太尉隨即敷奏、恭奉<sub>二</sub>理宗皇帝聖旨<sub>一</sub>、降賜<sub>二</sub>錢三千貫<sub>一</sub>、宣葬<sub>二</sub>于護国靈洞山<sub>一</sub>。

〔出統藏一二〇・二六四b・c〕

師、庚申の年の三月二十八日に於いて、履齋丞相及び諸の府第朝士を辞す。履齋、師に問う、「何れの日にかかれん」と。師答えて云く、「仏生日の前に去かん」と。四月一日、師、工に命じて塔を砌ましむ。初六日の晩に至りて、匠に問う、「工を畢えしや」と。匠答えて云く、「已に工を畢え来たる、早に禪師に塔を看んことを請う」と。師、初七日の早に塔を看て方丈に回る。紙を索めて遺書を写し、自ら起龕の語を撰して云く、「地水火風は、夢幻泡影のごとく、七十八年は、一彈指の頃なり。孝子・順孫、恋慕することを休めよ、八臂の那吒も攔り住ず。宝所は近きに在り、化城を恋することを休めよ」と。入塔の語を起りて曰く、「東西十万、南北八千、到る処に去来するも、此に在るに如かず。此の描き成せずして画き就ず、贊し及ずして生受を休め、本来の面目、露堂堂たり。外面の風頭は稍や硬く、暖処に帰り来たりて商量せん。法身は遍界曾て藏さず、毒惡の声名は大唐に播く」と。辞世の偈に云く、「虚空は生ぜず、虚空は滅せず、虚空を証得すれば、虚空は別ならず」と。偈を書き畢わり、跣して逝く。都知の王太尉隨即敷奏し、恭しく理宗皇帝の聖旨を奉じ、降して錢三千貫を賜い、宣して護国靈洞山に葬る。

この「喪記」は当然のことながら慧開の生前中に刊行された宋版『無門開和尚語録』には収録されていなかった記事であり、南宋が滅びた直後、至元一六年(一二七九)に重刊された元版『無門開和尚語録』に至って新たに付加されたものである。そこで、この「喪記」に記載されている内容について、逐一に吟味してみることにしたい。

慧開は景定元年三月二十八日に自ら死期を自覚して丞相の呉潜(字は毅夫、号は履齋、一一九六—一二六二)や杭州の官僚士大夫らに暇乞いをなしており、おそらく慧開自ら杭州府城に向いたか、あるいは呉潜らが天龍庵の慧開を訪ねたものと見られ、慧開はそれまでの呉潜らから受けた旧交に対して謝意を表している。ときに呉潜が慧開に「何れの日に去かれん」と質問すると、慧開は「仏生日の前に去かん」と答えたとされる。呉潜という人はすでにしばしば述べてきたごとく、慧開のもとに久しく参禅してきた官僚士大夫であり、この頃は右丞相の賈似道(字は師憲、号は秋壑、一二三—一二七五)との政争に敗れて失脚する時期に当たっている。しかも呉潜といえば、松源派の虚堂智愚(息耕叟、一一八五—一二六九)との間で不和を生じ、智愚を下獄へと追い込んだ高官として知られるが、この点の詳細については、すでに別に論じたところである。いずれにせよ、老齢に達した慧開の心情を察した呉潜が最後に慧開に問い掛けたことばが「何れの日に去かれん」であったものと見られ、呉潜は篤直に慧開に最期を問い質しているわけである。このとき慧開は呉潜に対して「仏生日(降誕会)に当たる四月八日より以前には逝去するだろう」と告げて自らの最期を予言しているが、そんなやり取りの中に両者の親密な道交のあとかたを窺い知ることができよう。

護国仁王寺の方丈(天龍庵のことか)に戻った慧開は、月の改まった四月一日に工匠(石工)に依頼して自らの墓塔を造らせている。おそらく門下の法嗣や学人からも慧開の死期に近いことを予め覚悟していたことであろう。僧侶の墓塔であるから卵塔すなわち無縫塔であり、あたかも六祖下の南陽慧忠(大証国師、?—七七五)や洞山下の疎山匡仁(矮師叔)の寿塔の故事が髣髴とされるが、慧開の場合はずでに死期を自覚しての建塔であった点が大いに異なる。四月六日の晩に墓塔が完成したことを聞いて、七日の早朝に慧開は実際に墓塔を見て回って方丈に帰ったとされるが、この方丈とは天龍庵のことを指しているものと解される。果たして慧開が自力で歩行できたか否かは定かでないものの、少なくとも示寂する直前まで意識はしっかりとしていたと見られる。また紙を求めて自ら遺書を書き残したというから、日頃から交流のあった近隣諸山の長老や有縁の在俗檀信に対して、一々に後事を託する書簡を書き残したものである。慧開は自

注目すべきは遺書を認めた後、慧開が「起龕法語」と「入塔法語」を自ら撰述したとされる事跡であろう。

らの「起龕法語」として、

地水火風は、夢幻泡影のごとく、七十八年は、一彈指の頃なり。孝子・順孫、恋慕することを休めよ、八臂の那吒も攔り住す。宝所は近きに在り、化城を恋することを休めよ。

という一文を残している。起龕の法語とは靈龕（棺桶）を持ち上げるときに起龕師が唱える法語のことであるが、慧開は自らの起龕の法語をも書き残したわけである。最初に遺偈のごときことばを述べて、七八年の生涯を一彈指すなわち一瞬のできごとであったと述懐した後、孝順なる法嗣や法孫に対して恋慕することを諫めている。那吒太子とは毘沙門天の子で三面八臂の形相をなし、父母に骨肉を折つて還し、孝養を尽くしたとされる天部である。宝所とは珍宝のある場所で大乗の涅槃に譬えられ、化城とは化作された幻の城の意で小乗の涅槃に譬えられる。

さらに「起龕法語」のみにとどまらず、つづいて慧開は自らの「入塔法語」も書き記しており、

東西十万、南北八千、到る処に去来するも、此に在るに如かず。此の描き成せずして画き就す、賛し及ずして生受を休め、本来の面目、露堂堂たり。外面の風頭は稍や硬し、暖処に帰り来たりて商量せん。法身は遍界曾て蔵さず、毒悪の声名は大唐に播く。

という一文が伝えられている。入塔の法語とは遺骨ないし遺骸を墓塔（無縫塔）に納めるときに行なう納骨安位の法語であり、慧開は自ら入塔の法語までも入念に残しているわけである。まさに慧開は完成したばかりの寿塔に自ら入塔法語を残して納まることを望んだことになろう。慧開はこの墓塔に納まることで、生前の悪辣な接化をなした悪名が大唐すなわち大宋国内に轟くことを望んでいるのごとくである。

最後に慧開は「虚空は生ぜず、虚空は滅せず、虚空を証得すれば、虚空は別ならず」という四言四句の辞世の偈頌すなわち遺偈を書し、すべてを成し終えて安堵感の中で身を正して結跏趺坐し、七六年の生涯を穏やかに閉じて逝去したとされる。虚空の語を四度も用いており、大道無門の生涯を貫いた慧開の最後に相応しい遺偈であろう。

慧開が実際に示寂したのは、杭州錢塘県の靈洞山護国仁王寺の方丈であったのか、寺の境内の一隅に存した天龍庵であったのか、あるいは方丈が天龍庵のことを指しているのか、そのいずれとも断定できないが、慧開が隱居所天龍庵で最晩年を過ごした期間は一年にも満たなかったものと見られる。都知で大尉の王随という官僚が朝廷に慧開の遷化を奏聞し、これに応じて皇帝理宗の聖旨を奉じて錢三〇〇〇貫が靈洞山護国仁王寺に下賜され、慧開の葬儀が執り行われた

と伝えられる。慧開が示寂して後、天龍庵は墓塔を祀る塔頭として機能し、門流に属する禅者らによって維持されたものである。<sup>(20)</sup>『西湖志纂』巻七「北山勝蹟上」の「護国仁王寺」の項に、

其東有「黄山橋」、塙内旧有「天龍菴・永安院・西靖宮」、並廢。

という記載が見られ、護国仁王寺の東に黄山橋があり、埽帚塙の内には天龍庵と永安院と西靖宮が建てられていたとされる。慧開の塔頭であった天龍庵はすでに触れたごとくかつて護国仁王寺が創建される以前から慧開が自ら草庵を結んで暫し閑居していた建物であり、その後は慧開の遺骨を祀る塔頭として存続していたものであるが、後代には永安院や西靖宮などともいづれも廢絶したのらしい。

ちなみに慧開と同じ景定元年に示寂した宋朝禅者としては、曹洞宗真歇派の雪屋正韶(一二〇二—一二六〇)と臨済宗破庵派の別山祖智(智天王、一二〇〇—一二六〇)が挙げられる。『無文印』巻五に所収される「天池雪屋韶禅師塔銘」によれば、雪屋正韶は慧開が亡くなる数日前、景定元年四月三日に江西の廬山天池禅寺の明月庵で世寿五九歳の生涯を終えている。<sup>(21)</sup>すでに触れたごとく正韶は天童山の如浄の法嗣であり、日本の道元と同門に当たる上に、慧開と同門に当たる竹巖妙印とともに無文道璨が『無文印』に塔銘を残している。また『鄞県志』巻五九「金石上」に載る「慶元府太古名山天童景德禅寺第四十代別山智禅師塔銘」によれば、景定元年九月一日には破庵派の別山祖智が世寿六一歳で示寂している。<sup>(22)</sup>祖智は破庵派の無準師範の高弟であり、法兄の西巖了慧(一一九八—一二六二)に代わって焼失した明州鄞県の天童山景德禅寺の伽藍復興に尽力した禅匠として知られる。

### 南洲永珍が亡き慧開に対して哀悼の偈頌を詠ずる

いま一つ注目すべきは慧開の示寂に際して、松源派の南洲永珍(南州とも、季潜、一二二五—一三〇〇)という禅者が慧開の遺徳を偈んでつぎのような哀悼の偈頌を残していることであろう。日本の南北朝期に夢窓派の義堂周信(空華道人、一三二五—一三八八)が編集した『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻中「哀悼」に、

無門死<sub>レ</sub>於天龍庵<sub>一</sub>。南洲。

仏祖冤家未<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>分、逃<sub>レ</sub>生無<sub>レ</sub>路死無<sub>レ</sub>門。虚空打<sub>レ</sub>个翻身<sub>一</sub>、転、龍挾<sub>レ</sub>雲歸洞府昏。(日仏全八八・四五c)

無門、天龍庵に死す。南洲。

仏祖の冤家、未だ分かつを解せず、生を逃るるに路無く、死するに門無し。虚空にて今の翻身を打して転じ、龍は雲を挟みて帰り、洞府昏し。

という偈頌が収められている。ただし、この偈頌は同じ周信による『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻一〇「哀悼」にはなぜか収録されていない。これは永珍が天龍庵で示寂した慧開に対し、哀悼の意を込めて詠じた偈頌であることが知られる。永珍は松源派の石溪心月の法嗣であり、日本に渡来した大休正念や入宋僧の無象静照とは同門に当たっている。『増集続伝燈録』巻五「蘇州万寿南州珍禪師」の章（正統蔵一四二・四二一d）があり、また『吳中人物志』巻一一「方外（宋）」に「永珍、字季潜」として伝記的な事跡がまとめられている。永珍は宝慶元年（一二三五）に撫州（江西省）臨川県に生まれている。浙江に到って破庵派の無準師範や曹源派の癡絶道冲に学んだ後、松源派の滅翁文礼（天目樵者、一二六七—一二五〇）の門を叩き、さらに松源派の石溪心月のもとに投じてその法を嗣いでいる。すでに触れたごとく心月は慧開とともに『大光明蔵』に「開版疏」を揮毫した因縁が存している。仏祖の冤家とは仏祖にとって讐敵の意であり、生を逃れようにも術はなく、死にも門がない。永珍は慧開の示寂を「虚空で宙返りをなし、龍は雲を頼りに神仙が居する死洞府へと帰っていった」と表現しているが、これは慧開が「虚空」の語を遺偈で多用したのを受けていよう。

ところで、先の「喪記」では慧開は護国仁王寺の方丈で結跏趺坐して示寂したことになるが、この「無門死」於天龍庵」の偈頌では護国仁王寺の境内の一隅に存した天龍庵で示寂したことになる。詳細は定かでないが、あるいは晩年の慧開は天龍庵を東堂が居する方丈のごとく使用していたのかも知れない。

慧開が七六歳で示寂した当時、永珍はいまだ三〇歳代半ばの若さであり、なぜ永珍がこのとき慧開の示寂を悼んだ偈頌を詠じているのか、両者にどのような接点が存したのかは明確でない。おそらく永珍は何らかの理由で慧開が護国仁王寺の天龍庵で示寂した際に立ち会う機会が存したのか、慧開の死去を間近に見聞する機会があり、その最期を惜しんで哀悼の偈頌を残したものであろうか。あるいは永珍は心月が示寂して以降、晩年の慧開のもとに投じて実際に訓戒を受ける機会が存したのかも知れない。おそらく同じ杭州錢塘県の西湖の南岸、淨慈報恩光孝禪寺などに寓居していたと見られる永珍が近隣の護国仁王寺で古老慧開の示寂した事実を知り、慧開の遺偈に示される「虚空」の語に因んで詠じた偈頌こそ先の哀悼の一首であろう。<sup>(33)</sup>

後に永珍は蘇州呉県の万寿報恩光孝禪寺（十刹位）に任持しているが、その万寿寺の永珍のもとで首座を務めたのが

松源派の西潤子曇であった。元の大徳三年(日本の正安元年、一二九九)一〇月に子曇は曹源派の一山一寧(妙慈弘濟大師、一山国師、一二四七—一三二七)に随行して二度目の日本渡来を果たしており、鎌倉円覚寺の住持となつてまもなく、亡き覚心の門人らから依頼を受けて「鷲峰開山法燈円明国師塔銘」を撰述している。永珍は慧開の最期と深く関わつており、永珍の晩年にそのもとで首座を務めた子曇が再来日を果たし、慧開の法嗣である覚心の塔銘を著す因縁に恵まれてゐるわけであり、そんな隠れた事実にかきわめて興味深いものを覚える。<sup>(54)</sup>

### 慧開にまつわる逸話と中峰明本

無門慧開という人はきわめて小柄な体格であつたものらしく、慧開自身もそのことをかなり気にしていたようである。『補続高僧伝』によれば、

師形体矮小、其赴<sub>レ</sub>召也、指<sub>レ</sub>日觀<sub>レ</sub>衆、而後踰<sub>レ</sub>闕、施<sub>二</sub>重城於座級<sub>一</sub>而升焉。朝士多竊笑<sub>レ</sub>之。師誓<sub>レ</sub>弘<sub>三</sub>法教、惟自諱<sub>二</sub>報身不<sub>レ</sub>偉、洞之顛有<sub>二</sub>玉峰一片<sub>一</sub>、削成挿<sub>レ</sub>天、瑩如<sub>二</sub>脂肪<sub>一</sub>、高二丈餘。因命<sub>レ</sub>工肖<sub>二</sub>己形<sub>一</sub>、長丈許、飛雲隱<sub>二</sub>其足<sub>一</sub>。緣<sub>レ</sub>背光燄蔚起、鑿<sub>二</sub>龍首蟠<sub>一</sub>、繞<sub>レ</sub>右向<sub>レ</sub>虛、左竇可<sub>二</sub>俛入<sub>一</sub>、前施<sub>レ</sub>案焉。皆就<sub>二</sub>石勢<sub>一</sub>鏤<sub>レ</sub>之、幻若<sub>二</sub>從<sub>レ</sub>地湧出<sub>一</sub>。而登坐<sub>二</sub>於空中<sub>一</sub>者、私祝云、願後有身視<sub>レ</sub>此。という逸話が伝えられている。興味深い記事なので、書き下してみようならば、つぎのようになる。

師、形体は矮少なり、其の召しに赴くに、日を指して衆を觀、而して後に闕を踰え、重城に座級を施して升る。朝士、多く竊かに之れを笑えり。師、法教を弘めんことを誓うも、惟だ自ら報身の偉ならざるを諱む。洞の顛に玉峰一片有り、削り成して天に挿み、瑩くこと脂肪の如く、高さ二丈餘なり。因みに工に命じて己れが形を肖り、長さ丈許にして、飛雲は其の足を隠す。背を縁る光燄は蔚起し、龍首の蟠るを鑿り、右に繞りては虚に向い、左は竇にて俛き入るべく、前には案を施す。皆な石の勢いに就きて之れを鏤り、幻にして地より湧き出づるが若し。而して登りて空中に坐すれば、私かに祝ひて云く、「願わくは後有の身にて此れを視んことを」と。

慧開が理宗に招かれて雨請いのために文徳殿に上殿した際、踏台を用いて法座に登つたことから、居並ぶ官僚士大夫らが思わず失笑したという記事を伝えている。また杭州の護国仁王寺が存した靈洞山の巔に高さ二丈あまりの玉峰一片が存したため、慧開は石工に命じて自らの姿を大きく刻ませ、後有(来世)にはこのような身になりたいものだと願つたと伝えられる。

いま一つ『補統高僧伝』には、先の逸話に付随してつぎのような興味深い記事が付け足されている。

師遷化之夕、錢塘孫氏婦、夢一僧篝燈、自称開道人寄宿。翼日産男子、後為大禪師、即中峰本公也。

慧開が遷化した日の夜に、杭州錢塘県の孫氏の夫人が灯火を手にした一僧の夢を見たという。一僧は自ら「開道人」と称して夢の中でその家に寄宿したのであり、翌日、孫氏の夫人は立派な男子を産み、その子が成長して破庵派（幻住派祖）の中峰明本（幻住老人、仏慈円照広慧禪師、智覚禪師、普応国師、一二六三—一三三三）となつたとされる。明本を慧開の再来とする説を最初に伝えるのは、明本が示寂した翌年に当たる泰定元年（一三三四）八月に法弟の祖順が録した「元故天目山仏慈円照広慧禪師中峯和尚行録」であり、そこにはつぎのように記されている。

禪師諱明本、号中峯。杭之錢塘人、俗姓孫。母李氏、夢無門開道者持燈籠至其家。翌日遂生師。神儀挺異、具大人相。（中略）年十五、決志出家、礼仏然臂、誓持五戒。（中略）居近靈洞山、時登山顛習禪定。（出蔵三一七、六八六c）これによれば、明本が示寂した直後から、すでに明本を慧開の再来とする説が行なわれていたことが知られる。この点は『西天目祖山志』卷二「尊宿（宋）」の「無門開禪師」の項にも、

師膺殊錫、誓宏法教、唯自諱報身不偉。於洞之巔、鑿峯肖己形、長丈許。每私祝云、願後有身等此。師遷化之夕、錢唐孫氏婦李氏、夢一僧篝燈、自称開道者寄宿。翌日産男、法相非常。実宋景定四年歲癸亥十一月二日也。逮長、身長九尺有奇、出家称法王子、是為中峯大師。中峯居天目活埋庵、亦奉有石像、形不滿五尺云。自火宅所遷即無門本相也。師嘗作補衲看經二偈伝世。其詞無見和尚、字瞎驢、亦做無門之義。高峯語石屋云、温有瞎驢、是也。と記されており、中峰明本が慧開の再来であるとする伝承が広く杭州地内で知られていたものらしい。ただし、実際には景定元年四月七日に慧開が示寂し、景定四年（一二六三）十一月二日に至つて明本が生まれているわけであるから、慧開の示寂と明本の誕生には三年半の開きが存しており、この伝承自体は成り立たない。明本は慧開と違い、身長九尺とかなり大柄の人であつたらしく、同じ杭州に生まれたことから、慧開の再来と言い伝えられるようになったものである。

### 現存する無門慧開の墨蹟

つぎに慧開が揮毫した墨蹟で現今に伝えられるものについて一通り触れておきたい。田山方南編『禅林墨蹟拾遺（中国篇）』に五七「無門慧開墨蹟（郁山主函賛）」として、

百尺竿頭話最親、一交橋断絶<sub>二</sub>織塵。死中得<sub>レ</sub>活珠離<sub>レ</sub>蚌、甘作<sub>二</sub>驢前馬後人<sub>一</sub>。

賜対仏眼題。〔慧開〕(小方印)〔無門〕(方印)〔護国仏眼〕(大方印)

百尺竿頭、話は最も親し。一交、橋断ちて織塵を絶す。死中に活を得て珠は蚌を離れ、甘んじて驢前馬後の人と作る。

賜対仏眼、題す。〔慧開〕〔無門〕〔護国仏眼〕

という「郁山主図」に対して慧開が贊を付した墨蹟が逸見家蔵として載せられている。郁山主とは臨濟宗(楊岐派祖)の楊岐方会(九九二—一〇四九)の門人とされる茶陵郁山主のことである。郁山主が驢馬に乗っている図に贊を付したもので、郁山主は驢馬から降り落とされたときに大悟したとされる。『無門開和尚語録』「贊仏祖」にも「郁山主」と題して、百尺竿頭話最親、一交橋断絶<sub>二</sub>織塵。死中得<sub>レ</sub>活珠離<sub>レ</sub>蚌、甘作<sub>二</sub>驢前馬後人<sub>一</sub>。(正統蔵一・二〇・二六—d)

として載せられている。しかも現存する画賛において慧開は自ら「賜対仏眼」と称しており、また「護国仏眼」の落款を押印していることから、仏眼禅師の勅号を受けて護国仁王寺の開山となつて以降の作であることが知られる。ただし、『無門開和尚語録』に収められていることから、語録が初版される以前の作ということにならう。

同じく『禅林墨蹟拾遺(中国篇)』に五八「無門慧開墨蹟(政黄牛図贊)」として、

資福從來不<sub>レ</sub>識<sub>レ</sub>羞、橘皮熟炙<sub>二</sub>風流<sub>一</sub>。倚<sub>レ</sub>筇懶<sub>レ</sub>赴<sub>二</sub>賢侯命<sub>一</sub>、又却騎<sub>レ</sub>牛更覓<sub>レ</sub>牛。

御前護国開山書。〔慧開〕(小方印)〔無門〕(方印)〔護国仏眼〕(大方印)

資福は從來、羞を識らず、橘皮熟炙して風流を逞しくす。

筇に倚りて賢侯の命に赴くに懶し。又た却て牛に騎りて更に牛を覓む。

御前護国の開山、書す。〔慧開〕〔無門〕〔護国仏眼〕

という「政黄牛図」に寄せた慧開の仏祖贊が同じ逸見家蔵として載せられている。政黄牛とは法眼宗の浄土惟政(字は煥然、九八六—一〇四九)のことであり、他所に赴くときは常に黄色い牛に跨つて出掛けたことから政黄牛と称された禅者である。しかも『無門開和尚語録』「贊仏祖」に「政黄牛」と題して、

資福從來不<sub>レ</sub>識<sub>レ</sub>羞、橘皮熟炙<sub>二</sub>風流<sub>一</sub>。倚<sub>レ</sub>筇懶<sub>レ</sub>赴<sub>二</sub>賢侯命<sub>一</sub>、又却騎<sub>レ</sub>牛更覓<sub>レ</sub>牛。(正統蔵一・二〇・二六一—d)

という仏祖贊が載せられていることから、この図は語録に収められた仏祖贊の基となつた「政黄牛」の図の現物ということにならう。「政黄牛図」の賛でも慧開は「御前護国開山」と称しており、同じく「護国仏眼」の落款を用いているから、





無門慧開禅師墨蹟  
「政黄牛図賛」



無門慧開禅師墨蹟  
「郁山主図賛」

両幅とも田山方南編『禅林墨蹟拾遺〈中国編〉』(思文閣出版)より転載

先の「郁山主図」と同じ頃に慧開が護国仁王寺の住持として揮毫したものである。

二幅とも縦六二・八センチ、横三二・六センチであることから、対幅として珍重されたものである。日本の覚心との間で交わされた書簡などは現存していないようであるものの、この二面賛は自賛頂相とともに慧開の貴重な筆蹟を現今に伝える宝物なのである。ただ、慧開の自賛頂相の書体や筆致に比べると、この二幅の画像賛のそれは一見して別人の筆のごとくに解されるのは問題であつて、あるいはこの二幅は慧開自筆の原本を複製筆写したものかも知れない<sup>56)</sup>。一方、すでに触れたごとく護国仁王寺の慧開は日本僧覚心に自筆の品々を付与しており、また覚心が帰国した後も海を越えて日本の覚心に書簡などを送っている。それらの品々が現今に残されていたならば、いずれも国宝や重要文化財に指定されるべき墨蹟であつたはずであらう。

### 覚心が慧開の遺像頂相に遺偈を書する

『無門開和尚語録』『真贊』には「孟無菴与レ師同軸請」「孟少保絵レ師握レ拳缺レ指相一請」「牧菴簡菴師三人共軸」「法孫天龍長老思賢請」「日本覚心長老請」「南劍州伏虎巖請レ師開山請」「徒弟普頭請」「護国嗣源長老請」「徒弟普山請」「護国嗣本長老請」という一〇点の真贊が載せられていることから、慧開にはいくつかの自賛頂相が存したことが知られる<sup>57)</sup>。この中で「孟無菴与レ師同軸請」と「孟少保絵レ師握レ拳缺レ指相一請」はすでに触れたごとく少保の孟珙(無庵居士)との関わりから描かれたものである。「牧菴簡菴師三人共軸」は同じ楊岐派の牧庵法忠(忠道者、一〇八四—一四九)と簡庵嗣清と慧開の三人を同軸に描いた頂相と見られる。この三禪者をなぜ一軸に描いたのかは定かでないが、牧庵法忠は慧開より一世紀早く黄龍山に住持した禅者であり、あるいは袁州宜春県の仰山太平興国禅寺に化導を敷いた簡庵嗣清もかつて黄龍山に住持した因縁が存したのかも知れない。「法孫天龍長老思賢請」は慧開が法孫で杭州天龍寺に住持した思賢に付与したものであり、「日本覚心長老請」はすでに触れたごとく日本に帰国する覚心に授与したものである。「南劍州伏虎巖請レ師開山請」は南劍州(福建省)の伏虎巖(寺名は未詳)が慧開を開山に拝請した際に描かれた頂相と見られるが、その詳細などは定かでない。

いま一つ先に示した自賛頂相とは別に京都市の東山建仁寺の塔頭である堆雲軒に絹本着色「無門慧開禅師頂相」一幅が所蔵されており、肖像画の方は十三世紀後半の南宋末期に描かれたものと推定されている。この頂相の慧開は曲象に

坐して本人から見て左を向いており、白髪の頭に髭を伸ばして袈裟を掛け、右手に払子を持った老齢の姿で描かれている。上部には法嗣の覚心が記した語句が存しているが、慧開の「虚空不<sub>レ</sub>生、虚空不<sub>レ</sub>滅、証<sub>レ</sub>得虚空、虚空不<sub>レ</sub>別」という遺偈を揮毫したものであるから、賛は鎌倉後期の作ということになる。<sup>(60)</sup>

慧開が示寂した南宋の景定元年（一二六〇）四月以降、覚心が示寂する日本の永仁六年（二二九八）一〇月までの間に慧開の遺偈が付されたことなるうが、おそらく状況的に慧開が示寂してまもない時期に杭州護国仁王寺に在った門人

無門慧開禪師頂相 無本覚心賛 京都市・堆雲軒所蔵



らから慧開の訃報と遺偈および慧開晩年の頂相が同門に当たるとして日本の覚心のもとに届けられたものであろう。これに応じて覚心が慧開の最晩年の姿を描いた頂相の上段に記念として慧開の遺偈を揮毫したと解するのが自然であろう。

一方、鎌倉円覚寺に所蔵される『仏日庵公物目録』の「諸祖頂相」には、多くの南宋禅者の頂相に伍して「無門（自賛）」という記載が存している。円覚寺開基である鎌倉幕府第八代執権の北条時宗（法光寺殿道泉、一二五一—一二八四）を祀る仏日庵には、かつて慧開が自賛を付した頂相が所蔵されていたことが知られる。この慧開の自賛頂相が如何なる内容のものであったのか、『無門開和尚語録』の「真賛」に載るものの一つであったのか否かも定かでないが、この自賛頂相も南宋末期か元代初期に日本に請来されたものであろう。しかも状況からして、これは京都の妙光寺や建仁寺堆雲軒に現存する二本の慧開の頂相とは全く別のものであると推測される。

このほか大慧派の中巖円月（中正子、仏種慧濟禅師、一三〇〇—一三七五）の『東海一漚別集』「真賛」に、  
 贊<sub>二</sub>無門仏眼肖像<sub>一</sub>。

予昔看<sub>二</sub>仏眼録、有<sub>二</sub>狗子無仏性話、頌<sub>レ</sub>之。但連<sub>二</sub>写二十箇無<sub>一</sub>而已矣。是大神咒、使<sub>二</sub>誦者無明自除<sub>一</sub>。想<sub>二</sub>其為<sub>レ</sub>人可<sub>レ</sub>敬也夫。今拜<sub>二</sub>遺像<sub>一</sub>、白雪盈<sub>レ</sub>顛、巖容凜乎。是真可<sub>レ</sub>敬也夫。（五山全集二・四〇頁と五山新集四・五二四く五二五頁）

と題する真賛が載せられているから、円月も慧開の頂相（遺像）に祖賛を揮毫することが存したことが知られる。円月なども知られる。また円月が賛を付した慧開の画像も「今、遺像を拝するに、白雪は顛に盈ち、巖容は凜乎たり」とあるから、白髪姿で威厳に満ちたものであったらしい。

聖一派の乾峰土曇（少雲、広智国師、一二八五—一三六一）の『乾峰和尚語録』卷三「真賛」にも、  
 仏眼禅師。

祝<sub>二</sub>延一人万歳寿、頌<sub>二</sub>出四十八古則<sub>一</sub>。掃<sub>二</sub>除仏祖黒竹篋<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>奈<sub>二</sub>滿頭白髮雪<sub>一</sub>。  
 護国無門開禅師。

出世宏開<sub>二</sub>護国門<sub>一</sub>、竹篋頭上定<sub>二</sub>乾坤<sub>一</sub>。法燈統焰円明処、大樹扶桑挂<sub>二</sub>海嶽<sub>一</sub>。（五山新集別一・四九三頁）

とあり、慧開のために「仏眼禅師」と「護国無門開禅師」と題した二つの頂相の祖賛を残したことが知られる。「仏眼禅師」の賛にある「四十八古則」とは『無門関』のことであり、土曇が『無門関』を読んでいたこと、慧開の肖像がやはり白

髮姿であつたことなどが窺われる。<sup>(8)</sup> また「護国無門開禪師」の賛では慧開が護国仁王寺で竹篋を振るつて活動したこと、その法門が覺心（法燈円明国師）によつて日本（扶桑）の禪林に伝わつた点が強調されている。

## おわりに

以上、南宋後期に活躍した臨済宗楊岐派の無門慧開という禪者の事跡を『無門関』と『無門開和尚語録』および法嗣となつた日本の無本覺心との関わりなどを中心に考察したわけであるが、従来、慧開に関しては『無門関』の著者である点のみが強調され、その禅旨を考究することに意が注がれ、細かな活動や事跡の研究などはほとんどなされた形跡が見られない。本稿では『無門関』を中心に据えつつも、あくまで南宋禅者として生きた慧開の足跡を一通り解明することに努めたつもりであり、これが現時点で辿り得る一応の研究成果といつてよいだろう。ただ、慧開には示寂直後に特定の伝記史料が編纂された形跡が見られず、明代成立の『増集続伝燈録』や『補続高僧伝』の記載に頼らざるを得なかつた点は如何ともし難い。慧開はあたかも破庵派の無準師範より六歳若く、松源派の虚堂智愚よりは二歳年長に当たつているが、師範や智愚らと比すると特定の伝記史料がない分だけ研究成果が乏しいわけである。

とりわけ慧開の修行時代の徧参過程や諸山歴住期の活動には不明な点が多く、これを補足し得たのが本師月林師観の『月林観和尚語録』と慧開自身の『無門開和尚語録』であつて、『無門開和尚語録』の存在は住持期の消息をつぶさに伝えている点で貴重である。『月林観和尚語録』も慧開が帰国する覺心に付与したものであり、希有にして現今に残された貴重な語録なのである。

いま一つ、慧開は晩年をほぼ郷里杭州に在つて活動しながら、なぜか浙江を中心とした五山十刹などの大刹に一度も入寺していない。慧開が晩年に活動の拠点としたのは杭州钱塘県西湖の湖畔に存した護国仁王禪寺であるが、同じ杭州内で住持を務めていたにも拘わらず、なぜか慧開は餘杭県の径山興聖万寿禪寺（第一位）や钱塘県の北山景德靈隱禪寺（第二位・南屏山淨慈報恩光孝禪寺（第四位）という五山の三大禅刹に住持することなく終わつている。これは理宗が慧開を護国仁王寺の開山始祖に迎え、五山とは別格に慧開を引き立てたためであるうか。慧開には祈雨神異僧としての一面が高く評価されており、当時、一般の禅僧たちの活動とは一線を画していた感がある。

『無門関』は慧開の修行時代から初期の住持期を代表する著作であつて、慧開が如何なる研鑽をなしてきたのかを伝え

る貴重な頌古集でもあった。おそらく慧開は折に触れて古則公案を参究する度に頌古を詠じて自らの禅を確立していったものであろう。紹定年間(一二三二—一二三三)の初めに『無門関』は初版が刊行されており、慧開自身もこれに基づいて提唱をなしている。淳祐年間(一二四一—一二五二)の初めにも『無門関』が再刊されているが、これは祈雨の神異によって理宗の帰依を得て慧開の活動が評価され、護国仁王禅寺の開山に拝請された直後の賜物であったといつてよい。

しかも慧開が国都杭州の護国仁王寺で化導を敷いていたことから、日本僧覚心も慧開に参学することができたわけであり、もし慧開が同門の竹巖妙印のごとく晩年まで江西の黄龍山崇恩寺などに留まりつづけていたならば、両者が相見する機会もあり得なかつたであろう。まさに諸般の因縁が熟したことによって覚心は護国仁王寺の慧開に参学することができ、慧開も覚心という希有なる人材を門下に育成することができたわけである。また帰国する覚心に対して慧開が餞別に『無門関』を付与したことによって、『無門関』は海を越えて日本禅林に請来されて日本国内に広まる縁が生まれている。このように慧開の生涯にとつて各節目で『無門関』は重要な役割を演じて来たことが知られる。覚心によって日本に請来された『無門関』は日本禅林でしだいに受容されていき、やがて日本禅を特色づける禅籍公案集として不動の位置を占めることになった。その面では慧開と覚心の出会いが後世の日本禅林の体質を決定づける基となったとすら言つてよいだろう。一方、慧開の流れは中国禅林では禅宗燈史や宗派図による限り法孫の代までで消滅している。また『無門関』もやがて中国禅林から忘れ去られていったようである。<sup>(83)</sup>

本稿を作るに当たつて、京都市東山建仁寺塔頭堆雲軒に所蔵される無本覚心贊「無門慧開禅師頂相」一幅と、京都市正覚山妙光寺に所蔵される「無門慧開禅師自贊頂相」一幅の掲載許可を得た。また思文閣出版からは『禅林墨蹟拾遺』に載る個人蔵「無門慧開禅師墨蹟」対幅の転載許可を得た。ここに併せて御礼申し上げる次第である。

## 註

(1) 西潤子曇が鎌倉円覚寺の住持として撰述した「鷲峰開山法燈円明国師塔銘」は内閣文庫所蔵『禅林僧伝』五や臨

濟宗法燈派大本山興国寺刊『鷲峰餘光』(昭和一三年発行)の「下篇第一」(一八b—二〇b)に載せられている。ここでは『由良町誌(史料編)』「第2章中世」の「興国寺文

書」に収められている「鷲峰開山法燈円明国師塔銘」(二四三 b~二四五 b)の頁数を示しておきたい。

(2) 雲林師啓が撫州金谿県の疎山白雲禪寺の住持として撰述した「興国開山法燈円明国師塔銘」も「禪林僧伝』五と『鷲峰餘光』の「下篇第一」(二〇 b~二三 b)に載せられている。同じく「由良町誌(史料編)』「第2章中世」の「興国寺文書」に収められている「興国開山法燈円明国師塔銘」(二四五 b~二四八 a)の頁数を示しておきたい。雲林師啓については嗣承や事跡などが定かでないものの、日本から依頼者の日岩一光があえて浙江ではなく、江西の疎山にまで遠く足を運んで訪ねていることからすると、慧開の系統に関わる禪者あるいは慧開の法孫(直孫)に当たたる禪者であつたのかも知れない。

(3) 『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』一卷は、法燈派の自南聖薫が覚心の示寂してしばらくした頃に覚心の事跡を編年体で編集した伝記史料である。聖薫は法燈派の孤山至遠(広照禪師、一二七八—一三六六)の法嗣であり、覚心の法孫に当たる。北朝の永徳二年(南朝の弘和二年、一三八二)頃に由良庄の西方興国寺に住持している。西方興国寺には至遠が元弘三年(一一三三)八月一日に撰した「法燈国師」頂相靈驗記」が所蔵されているが、その末尾に「先師孤山每々説」与児曹、故薫記」持之」(由良町誌・史料、二五〇 a)とあり、聖薫が先師至遠の「頂相靈驗記」に付記を追加していることが知られる。

(4) 虎関師鍊著『元亨釈書』は鈴木学術財団編『大日本

仏教全書』第六二巻に所収され、「釈覚心」の章の在宋中の記事が九九頁 b 段に載せられている。また藤田琢司編『訓読元亨釈書』二巻が禅文化研究所より平成二三年(二〇一)一月に発刊されている。

(5) 元代後期に丘茲の盛照明(玄一道人)が撰述した『補陀洛迦山伝』「興建沿革品第四」によれば、

謹攷<sub>レ</sub>此寺、自<sub>二</sub>日本鏐<sub>一</sub>兆<sub>レ</sub>基。真歇了禪師、道風振起、改<sub>レ</sub>講為<sub>レ</sub>禪。繼<sub>二</sub>以<sub>一</sub>然・自得暉・弁至瀾、而恢<sub>二</sub>大基業<sub>一</sub>。恩球以次相統者曰、雪屋立・坦堂円・蓮菴成・還菴深・鑑菴実・小菴高・間雲韶・大川濟・鐵脚清・古岳顯・深谷喚・無咎吉・寒岳悟・夢臆清・石屋環・寒岳拳・松州基・東岳日・混溪清・白雲恭・愚溪智・東州永・一山寧・次翁元・險崖遇・太虚沖・孚中信・古鼎銘・大方聘・朴翁淳・元虚照・竺芳聯・所菴簪。(已統蔵一五〇・二五八 b)とあり、曹洞宗(真歇派祖)の真歇清了(寂庵、悟空禪師、一〇八八—一一五一)が普陀山の観音宝陀寺を禪刹に改めて以降、元代後期に至る歴代住職の名が記されている。しかも「繼<sub>二</sub>以<sub>一</sub>然・自得暉・弁至瀾、而して基業を恢大す」とあるから、雲門宗の繼<sub>二</sub>以<sub>一</sub>了然や曹洞宗宏智派の自得慧暉(一〇九七—一一八三)および嗣承未詳の弁至<sub>二</sub>瀾<sub>一</sub>という三代の間に、観音宝陀寺は禪寺として発展の基礎が形作られたものらしい。その後も雪屋<sub>二</sub>立<sub>一</sub>・坦堂<sub>二</sub>円<sub>一</sub>・蓮菴<sub>二</sub>成<sub>一</sub>・還菴<sub>二</sub>深<sub>一</sub>・鑑菴<sub>二</sub>実<sub>一</sub>・小菴<sub>二</sub>高<sub>一</sub>と歴住した禪者によって伽藍が維持されているが、これらの禪者については嗣承も事跡も定かでない。嘉定八年(一一二五)に至つて大慧派の

間雲徳韶(一に徳紹とも)が拙庵徳光(東庵、仏照禅師、一一二一—一二〇三)の高弟として入寺し、堂塔伽藍の充実に努めたことが『延祐四明志』卷一六「釈道攷上(昌国州寺院)」の「宝陀寺」の項によって知られる。さらに『大川和尚語録』『慶元府宝陀観音禅寺語録』によれば、徳光の法孫に当たる大慧派の大川普濟(一一七九—一二五三)も宝陀観音禅寺に住持しているが、それは覚心が入宋するかなり以前のことである。『普陀洛迦新志』卷六「禅徳門第六」の「宋」によれば、普濟と同門に当たる大慧派の夢窓嗣清(清鉄脚)も住持しているが、この人の名が「鐵脚清」と「夢臆清」として二度も記載されており、あるいは再住しているのかも知れない。いずれにせよ、覚心が到った当時、宝陀観音禅寺で住持を勤めていた禅者が具体的に誰であったのかは定かでない。

(6) 『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』の末尾に付録される記事として、

師在<sub>二</sub>惠峯会裏、居<sub>二</sub>紀綱職<sub>一</sub>久矣。告<sub>二</sub>聖一<sub>一</sub>国師曰、入<sub>二</sub>宋城<sub>一</sub>歴<sub>二</sub>遍諸知識、發明<sub>二</sub>心地、利<sub>二</sub>濟群生<sub>一</sub>。聖一曰、大宋有<sub>二</sub>我師<sub>一</sub>、是七世善知識也、汝入<sub>二</sub>異域<sub>一</sub>、參<sub>二</sub>見<sub>一</sub>仏鑑、必得<sub>二</sub>所証<sub>一</sub>。聖一付<sub>二</sub>指教<sub>一</sub>一簡。師懷<sub>レ</sub>之登<sub>二</sub>徑山<sub>一</sub>。仏鑑已帰寂、以為<sub>二</sub>遺憾<sub>一</sub>矣。其書今在<sub>二</sub>興国<sub>一</sub>矣。

(由良町誌・史料、一四〇a)

という円爾とのやり取りや徑山の無準師範のことが記されている。円爾は入宋する覚心に対して徑山の師範(仏鑑禅師)への紹介状を付与している。すでに師範が示寂してい

たため、この紹介状は実際には使われなままに終わり、その後は由良の西方興国寺に秘蔵されていたものらしい。

(7) 無準師範の出生年時に關しては、京都東福寺に所蔵される徳如撰「大宋国臨安府徑山興聖万寿禅寺住持特賜仏鑑禅師行状」にのみ明確に「生<sub>二</sub>於淳熙四年丁酉六月初五日<sub>一</sub>也」と記されている。一般に師範は淳熙五年(一一七八)戊戌に出生したかのごとく解されることが多いが、これは実際には誤りである。この点は『仏鑑禅師語録』卷二「住臨安府徑山興聖万寿禅寺語録」の「結夏上堂」において師範自ら「山僧淳熙四年生、経<sub>二</sub>今六十五歳<sub>一</sub>。本命丁酉、西生人属<sub>レ</sub>鶏。何故。不<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>道、養<sub>レ</sub>鶏意在<sub>二</sub>五更初<sub>一</sub>」(卍統藏一一・四四八a)と述べており、淳熙四年(一一七七)丁酉の出生であったことを表明していることから確かめられる。師範は自らの本命すなわち生まれた干支を「丁酉」の年すなわち淳熙四年丁酉であったことを明言し、酉年に鶏に属することを自覚していたのである。

(8) 永正一四年(一一五七)に法統の遠孫に当たる法燈源の徳馨有隣が覚心関係の史料を収集して編纂した『紀州由良鷲峯開山法燈円明国師之縁起』には、さらに詳しい覚心の事跡がまとめられている。『紀州由良鷲峯開山法燈円明国師之縁起』はもともと由良興国寺所蔵の写本であり、『由良町誌(史料編)』「第2章中世」に「法燈国師縁起(紀州由良鷲峯開山法燈円明国師之縁起)」「二八九a~三〇九b」として、また『和歌山県史(中世史料二)』に「紀州由良鷲峯山法燈円明国師之縁起」(八三九b~八五二b)とし



て、貞享二年（一六八五）一〇月に書写した写本が活字化されている。ただし、ここでは加賀（石川県）瑞応山伝燈寺三世となった三星等晟（？—一五六五）が天文一二年（一五四三）正月に由良興國寺の思遠庵（覺心の塔頭）で筆写し、それをさらに天正五年（一五七七）八月に伝燈寺三世の鉄山南谿（？—一五七九）が再写した越中（富山県）国泰寺所蔵本を用い、これに『由良町誌』本の頁数を付記しておきたい。国泰寺本『紀州由良鷲峯開山法燈円明国師之縁起』には、覺心が入宋した建長元年（一二四九）の記事として、

同三月二十八日、自博多津、乘宋大船、過吾朝左界、赴他州新土。雲海渺々、難辨東西。以南針所指、暗知方角者也。四月廿五日、初而見宋山。先到補陀落山（非自那智渡処、依唐地音也）。此山在海中、似三壺仙山。昔慧懿法師、上五臺山、迎觀音像。皈朝之時、宿此山。欲出船、更不動。然則觀音可安坐此山。瑞相乎、同法師止矣。又十四五町上、有觀音影現窟。師泊此島、夙縁所致也。祖師堂額有開山日本慧懿法師、依無限丈夫有懷土意焉。

図、補陀落山、又乗船。

自補陀落山、著長津。戴三衣、築拄杖。是謂頂包行脚。忽逢日本覺儀・親明、従是同行。初到徑山、麓有總門、額書天下徑山矣。登六十里、而中途有接待、名化城矣。寺在二山頂、開山国一大師也。昔此山多虎每害人。或時大師結跏趺坐前、而八十餘老翁出

来云、奉怖和尚、故我等率眷属、従是北天目山可去。謂了忽然不見。天下第一寺、衆僧一千人。此内道者二十人計、道者麻布衣袈裟也。有二階衆寮、扁二千僧閣。大慧禪師住持之時建立矣。乾方有大石一、俱胝禪師喝時、二破也。是以名喝石。然三人同行可遍參一処。約諾之処、頃来有支那与日域船往来禁制之旨、於是二人僧帰明州而皈朝、師唯一人留矣。遂参住持癡絶和尚、寓一單於僧堂、昼夜作工夫。止住二ヶ年。師帰朝之後、癡絶自宋朝送書有一偈矣。

図、徑山寺。（由良町誌・史料、二九二b、二九三b）と記されている。三月二十八日に覺心は南宋の商船に乗って博多津を出港し、四月二五日に初めて宋国の山並みを視界に捉え、明州昌国県の普陀山（補陀落山）に到っている。唐代に普陀山の靈場を開いた日本僧慧萼（慧懿と記する）の事跡を仰ぎ、さらに普陀山から長津に赴いて雲水行脚の装束を整えている。しかもこのとき長津で日本僧の覺儀と親明に会って同行したことを伝えているから、暫し覺心はこの両者と行動を共にしたことになろう。その後、覺心らは杭州餘杭県へと向かい、山麓に存した「天下徑山」の総門額を眺め、唐代に牛頭宗の徑山法欽（国一大師、大覚禪師、七一四—七九二）によつて開かれた化城塔院を仰いで法欽の事跡を慕い、興聖万寿禪寺に掛搭して南宋初期に楊岐派（大慧派）の大慧宗杲によつて建立された千僧閣（衆寮）の姿に驚嘆している。まもなく覺儀と親明の二僧は日本に帰国したとされ、覺心はひとり留まって住持の癡絶道沖に

参じており、僧堂内の一単に坐して足掛け二年にわたって昼夜に工夫参禅したとされる。末尾に「師が帰朝しての後、癡絶、宋朝より書を送りて一偈有り」とあり、覚心が帰朝した後に道冲が南宋から日本の覚心に一偈の書を送つてきたと記されている。しかしながら、道冲が示寂したのは淳祐一〇年五月一三日のことであるから、この説は成り立たない。もし覚心ゆかりの寺にかつて道冲が覚心に寄せた墨蹟が伝存していたのであれば、それは在宋中の覚心が径山の道冲から直に付与されたものと解さざるを得ない。

(9) 国泰寺本『紀州由良鷲峯開山法燈円明国師之縁起』によれば、覚心が湖州烏程県の道場山護聖万寿禅寺に掛搭して楊岐派の荊叟如珏(縁起には如覚とある)に相見した因縁について、つぎのように伝えている。

師四十四歳、宋淳祐十年、於道場山掛搭。寺在山頂、開山伏虎禪師也。昔此山多虎、每出邑殺人。禪師入山而坐禪、虎皆伏于前後左右、故名曰伏虎禪師也。師謁当住如覚荊叟長老、每示衆云、世界末有時有此性、世界壞時此性不壞矣。昼夜每巡堂、以警策戒坐禅僧睡、令工夫綿密。衆寮録一卷不置、若有則大誡。不立文字、教外別伝。夫人心万差、多迷文似向録、不若坐禅。落著寂靜、則坐禅亦甚應用。這事契当于師意、故一夏止此山焉。

因、道場山伏虎禪師坐禅、左右有虎。

(由良町誌・史料、一九三〇)

最初に青原下の道場如訥(伏虎禪師)が唐末に湖州道場

山に入つて猛虎を帰伏せしめた故事が挙げられた後、当住の荊叟如珏の示衆として「世界未だ有らざる時に此の性有り、世界壞るる時に此の性壞れず」のことが載せられている。また如珏が昼夜の坐禅のときに自ら巡堂して警策で坐禅僧の坐睡を戒めて工夫綿密ならしめていた厳格な気風を伝えており、この気風はあたかも道元の本師である長翁如浄の故事にも比せられよう。しかも如珏のもとでは衆寮に一巻の書も置かせず、もし書物などを見つけると厳しく戒めたとされ、坐禅に徹した行履がなされていた様子を伝えている。如珏の厳格な風貌が気に入つたため、覚心は道場山で淳祐一〇年の夏安居を過ごし、坐禅辦道に努めたとされる。如珏は婺州(浙江省)の人で、蘇州靈巖寺で楊岐派の癡鈍智穎に、常州無錫の華藏寺で楊岐派の淳庵善浄に参じ、智穎の法を嗣いでいる。楊岐派の高原祖泉のもとで維那を務め、湖州道場山などに住持した後、杭州浄慈寺(四一世)や杭州靈隱寺(四〇世)を経て杭州径山(三八世)に陞住している。如珏は景定五年(一二六四)一二月一〇日に示寂しているものと見られ、仏心禅師の勅諭号が存している。南宋末の陳世崇(字は随隱、一二四五一—一三〇八)の『随隱漫録』巻五に「珏荊叟住靈隱」として、珏荊叟住靈隱。僧求掛搭不得。一日五鼓久立三方丈、忽問云、何方狗子、甚处猫兒。僧云、某甲温州。叟曰、温州王小婆、布針帶得来麼。曰、有。入何不出去。僧於叟脇下槌一拳。叟以竹篋連打不止。僧忽云、打則任打。祖師西来意、未許你在。僧曰、如何是祖

師西来意。答云、五峰青更青。叟曰、便与掛搭。

隨隱拈云、靈隱雖<sub>二</sub>則方便垂<sub>レ</sub>慈、争奈這僧尚居<sub>一</sub>門外。という記事が存する。後に杭州の靈隱寺に住持したときのことではあるが、ここでも如珪が修行僧の掛搭に關してきわめて厳格な接化をなしていた消息を伝えている。また覺心のほかに入宋した聖一派の無伝聖禪（関聖房、一二二六—一三三五）が径山で如珪に参学し、如珪の印可を受けて帰国している。同じく入宋した聖一派の藏山順空（無量房、円鑑禪師、一二三三—一三〇八）も径山の如珪に参学した経験が存している。

(10) 『明州阿育王山統志』卷一「先覺攷〔補遺〕」には、覺心が到った頃の阿育王山の歴代住職に關して、

第三十九代、笑翁堪禪師（嗣<sub>二</sub>無用全公<sub>一</sub>。三月廿七日忌）。

第四十代、偃溪開禪師（嗣<sub>二</sub>浙翁琰公<sub>一</sub>。六月初十日忌）。

第四十一代、東谷光禪師（嗣<sub>二</sub>華藏祚公<sub>一</sub>）。

第四十二代、毒川濟禪師（嗣<sub>二</sub>浙翁琰公<sub>一</sub>。六月十四日忌）。

第四十三代、虚堂愚禪師（四明人。嗣<sub>二</sub>法于道場巖公<sub>一</sub>）。

と伝えている。また『扶桑五山記』一「育王住持位次」にも覺心が到った頃の阿育王山の歴代住職として、

卅七、笑翁堪禪師。卅八、偃溪開禪師。卅九、東谷光禪師。

師。四十、毒川濟禪師。四十一、虚堂愚禪師。

と記されている。『偃溪和尚語録』卷末「塔銘」によれば「戊申移<sub>二</sub>育王<sub>一</sub>、辛亥移<sub>二</sub>淨慈<sub>一</sub>」（<sub>二</sub>正統藏<sub>一</sub>一二一・一五五<sub>a</sub>）とあるから、大慧派の偃溪広開は淳祐八年（一二四八）から淳祐十一年（一二五二）まで阿育王山に住持している。曹

洞宗宏智派の東谷妙光は広開の後席を継いでいるから、淳祐十一年から宝祐元年（一二五三）春まで阿育王山に住持しているものと推測される。つぎの毒川口濟については真に大慧派の浙翁如琰（仏心禪師、一一五一—一二二五）の法を嗣いだ禪者なのか否かも定かでない。状況的には覺心が到った当時、阿育王山の住持を務めていたのは広開と妙光であったことになろう。

(11) 国泰寺本『紀州由良鷲峯開山法燈円明国師之縁起』によれば、覺心が明州鄞県の阿育王山広利禪寺に掛搭した後も寓止しつづけていたことについて、

師四十五歳、宋淳祐十一年、掛<sub>二</sub>搭於明州育王山<sub>一</sub>（育唐音）。寺在<sub>二</sub>平坦山中<sub>一</sub>、爰有<sub>レ</sub>塔是阿育王八万四千基之

其一也（故曰<sub>二</sub>育王山<sub>一</sub>）。伝曰、定海網人、牽<sub>二</sub>上此塔<sub>一</sub>。又説、從<sub>レ</sub>寺四五町外、現<sub>二</sub>大石上<sub>一</sub>、放<sub>二</sub>舍利光明<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>諸国<sub>一</sub>每年二三月、人多参詣、奇瑞太多矣。大権菩薩為<sub>二</sub>守護神<sub>一</sub>。師於<sub>二</sub>此山<sub>一</sub>建<sub>二</sub>一字堂<sub>一</sub>、安<sub>二</sub>日本將軍実朝遺骨於等身観音像肚内<sub>一</sub>。凡実朝前生之雁蕩山合<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>納<sub>二</sub>遺骨<sub>一</sub>、安<sub>二</sub>措此山<sub>一</sub>。未審、師意如何。師止<sub>二</sub>住此山<sub>一</sub>三年矣。

図、育王山塔、師建立之堂。  
（由良町誌・史料、二九三b～二九四a）と伝えている。ここでも阿育王山の仏舍利宝塔のことのほか、当時の阿育王山の舍利信仰と参詣者の賑わい、伽藍守護の招宝七郎大権修利菩薩のことなどが語られているが、ときの住持の名については何も触れられていない。一方、注目すべきは覺心が阿育王山の一角に一堂宇を建

て、鎌倉幕府三代將軍の源実朝(幼名は千幡、一一九二—一二一九)の遺骨を等身の觀世音菩薩像の肚内に安置したとする記事が存していることであろう。しかも覺心は三年間も阿育王山に寓止しつづけているから、堂宇が完成して実朝の遺骨を堂内の等身觀音菩薩像の肚内に奉安するまで、諸方行脚を控えて阿育王山に留まっていたことになるうか。

(12) 国泰寺本『紀州由良鷲峯開山法燈円明国師之縁起』には、淳祐一二年(一二五二)に覺心がなした動向として、師四十六歳。宋淳祐十二年、登天台台山。路傍有三間廊、其中間壁有書云、念起是病、不統是菓矣。師以為此文抓著痒处焉。昔白湯涌開震旦有五百羅漢住处、自三天竺尋來、雖七日祈請、不得度石橋、揮羅漢悲淚落窪石、其痕在干今。前山有聲云、汝在胎内時、母食五辛故、汝息不淨、不レ可レ叶也。涌還石城、繰出五臟洗之、重祈而終不レ拝。石城有川、川中流十丈計之岩上有池、乃洗臟処也。石橋前有供茶於羅漢之拝殿、橋側瀑布、落凡四十五丈計、水被風吹懸石橋、橋下深不レ知幾許也。石橋長四丈五尺、広纔五寸、厚五寸、莓苔厚茂滑也。肉身人努不レ可レ得度。然師度石橋如平路、過橋直奉礼心身羅漢影向。其時童子自天降、以藕絲袈裟付師。甚奇特事也。又有高岩、扁飛來峰。其頂有二坐具跡、天台大師常拝羅漢之壇也。此山最頂有華頂峯、真歇了禪師拝羅漢之地也。寺側有三十丈許岩、名円座峰、

天台大師坐禪処也。同山中有国清寺、是三隱(豊干・寒山・拾得)之旧跡也。又三十里、登大慈寺、有石碑文曰、日本取澄法師献黄金百両、求二乘之地也。吾朝人事、特着目看之焉。

図(天台山三間廊・供茶拝殿・石橋・天童付袈裟・瀧・飛來峯・円座峯・三隱旧跡)

(由良町誌・史料、一九四a、b)

と記されており、台州の天台山における活動が細かに語られている。覺心の足取りとして、天台山に到る路傍の三間廊で「念起是病、不統是菓」という壁書を見たこと、山中の石橋(石梁瀑布)を難なく渡って五百羅漢に茶を献じたこと、飛來峰にて天台宗祖の天台智顛(智者大師、五三八—五九七)の史蹟を拝登したこと、華頂峰では曹洞宗の真歇清了(悟空禪師)ゆかりの史蹟と天台智顛が坐禪を行じた円座峰を拝登したこと、国清寺では豊干・寒山・拾得の国清三隱の旧跡に到ったこと、仏隴峰の大慈寺に登って日本の最澄(伝教大師、七六七—八二二)が黄金百両を献じたことを刻む碑文を仰いだことなどが触れられている。

(13) 源心に関しては、かつて覺心が日本にある頃に同参であつたと記されていることから、高野山の金剛三昧院か鎌倉の寿福寺などで退耕行勇に参学していた人ではないかと推測されるが、覺心在宋中の記事以外に源心の事跡を伝える史料が他に存していないため定かでない。『虚堂和尚語録』卷四「法語」に「示日本国心禅人」(大正蔵四七・二〇二c—二〇二a)が収められており、松源

派の虚堂智愚と関わった日本僧として□心と称する禪人が存している。ここにいう日本僧の□心禪人というのが覚心のことを指すのか、源心のことを指すのか、あるいは全く別に□心という日本僧がいたのかは定かでない。

(14) 国泰寺本『紀州由良鷲峯開山法燈円明国師之縁起』では、覚心が明州大梅山に上つて「法常禪師塔」を拝登し、日本僧源心と邂逅した状況について、

師四十七歳。宋宝祐元年二月二十八日、登明州大梅山、  
拜法常禪師塔。昔馬祖曰、梅子已熟、云々。此山中荷  
衣沼(亭名)壁、書一偈曰、一池荷葉衣無<sub>レ</sub>尽、数樹  
松花食有<sub>レ</sub>餘、強被<sub>レ</sub>世人知<sub>レ</sub>住処、更移<sub>レ</sub>茅舎入<sub>レ</sub>深居  
矣。禪師端坐、獅子与<sub>レ</sub>象、昼夜奉<sub>レ</sub>左右守<sub>レ</sub>護之。禪師  
円寂、二獸亦同時死。彼獅象之遺骨收在<sub>レ</sub>箱、令<sub>レ</sub>後人  
見<sub>レ</sub>之矣。師於<sub>レ</sub>此山<sub>レ</sub>邂逅于日本源心。師問曰、你久  
參<sub>レ</sub>此邦、還遇<sub>レ</sub>明眼知識<sub>レ</sub>也無。源心云、杭州無門和尚、  
一代明師、応<sub>レ</sub>往參見<sub>レ</sub>焉。

図(大梅山、沼有<sub>二</sub>荷葉、亭名<sub>二</sub>荷衣沼。法常坐禅、  
左右有<sub>二</sub>獅子象<sub>一</sub>)

(由良町誌・史料、二九四b~二九五a)

と伝えている。宝祐元年二月二八日に覚心は明州鄞県の大梅山に登り、大梅法常の墓塔を拝しており、山中の荷衣沼に到つて亭の壁に「一池の荷葉は衣として尽くる無く、数樹の松花は食するに餘り有り。強いて世人に住処を知られ、更に茅舎を移して深きに入りて居す」と書された一偈を見ている。また法常が晩年に獅子や象を従えて端坐したと伝

えられる坐禅石なども拝したものでらしい。そうした中で覚心は大梅山で日本僧源心と邂逅し、杭州の慧開の存在を知らされたと記している。

(15) 国泰寺本『紀州由良鷲峯開山法燈円明国師之縁起』では、覚心が護国仁王寺の慧開と初相見した状況について、  
師四十七歳。宋宝祐元年九月二十八日、源心相牽到杭  
州護国寺。直入<sub>二</sub>方丈、無門僅見、即擒住曰、我這裏無<sub>レ</sub>  
門、從<sub>二</sub>何処<sub>一</sub>入。師云、從<sub>二</sub>無<sub>レ</sub>門<sub>一</sub>入。門問、你名什  
麼。覺心。門即作<sub>レ</sub>偈曰、心即是仏、仏即是心、心仏如  
如、亘<sub>レ</sub>古亘<sub>レ</sub>今。酬对数回、蒙<sub>レ</sub>印可。門曰、你来太遲  
生、吾七十一歳、餘命無<sub>レ</sub>幾、今日來訪隨喜、云々。門  
復相引入<sub>レ</sub>室、以<sub>二</sub>左手<sub>一</sub>握<sub>レ</sub>師手、以<sub>二</sub>右手<sub>一</sub>举<sub>レ</sub>扇子曰、  
見麼。師云、見了。即於<sub>二</sub>言下<sub>一</sub>大悟。実九月廿八日也。  
昔靈山会上、世尊拈<sub>レ</sub>花、迦葉微笑、亦復如<sub>レ</sub>是。師問云、  
抛<sub>レ</sub>却一切、以<sub>レ</sub>何示<sub>レ</sub>人。門曰、覩<sub>レ</sub>箇覩底。自執<sub>レ</sub>筆曰、  
不<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>後三字、唯一箇覩字也。此時以<sub>二</sub>对御録二冊并袈  
裟一頂<sub>一</sub>付<sub>レ</sub>師(初相看入室、無門和尚搭<sub>二</sub>此袈裟<sub>一</sub>、故云  
入室法衣。今塔主頂<sub>二</sub>戴之<sub>一</sub>)。

(由良町誌・史料、二九五a~b)

と伝えている。これによれば、覚心は宝祐元年九月二八日に源心に伴われて護国仁王寺に到り、直ちに慧開の待つ方丈に入室している。慧開は覚心が方丈に入ろうとする際、すぐさま覚心を引捕まえて「我が這裏に門無し、何れの処より入る」と迫っている。覚心は「門無き処より入る」と答えており、その後には慧開はようやく覚心の名を問うて一

偈を示している。さらに問答商量を数回交わして印可証明を蒙ったとされる。しかも他の伝記史料より詳しいのは慧開のことばとして「你来たること太遅生、吾れ七十一歳、餘命は幾くも無し、今日来たり訪うこと随喜す」と述べている点であり、慧開が宝祐元年の時点で七一歳であったことが示されている。慧開が淳熙一〇年(一一八三)に出生したことがこの『紀州由良鷲峯開山法燈円明国師之縁起』によっても確かめられる点は興味深い。さらに慧開が覚心を入室せしめるのに「門復た相い引きて室に入り、左手を以て師の手を握り、右手を以て扇子を挙げて曰く」とあり、両者の問答として、

師問うて云く、「一切を抛却して、何を以てか人に示さん」と。門曰く、「箇の覲る底を覲よ」と。自ら筆を執りて曰く、「後の三字を用いず、唯だ一箇の覲の字のみなり」と。というやり取りも記されている。また慧開が覚心に付与した袈裟は「入室法衣」と称されて後代に伝えられており、慧開が室内で覚心と初相見したときに実際に搭けていた袈裟である点が付記されている。慧開は自ら左手で覚心の手を握り、方丈に入つて右手で扇子を掲げて「見るや」と覚心に尋ねている。覚心が「見了る」と述べた途端、自らその言下に大悟したと伝えており、その日が九月二八日であつたと明記している。

(16) 覚心は慧開の示した偈頌をかなり気に入つていたものらしく、『由良町誌(史料編)』に「覚心書」として、

心即是仏、仏即是心、心仏如如、亘<sub>レ</sub>古亘<sub>レ</sub>今。

正応六年七月十七日、覚心。「印」

(由良町誌・史料、一二五b)

とあり、晩年に至つた覚心が正応六年(一二九三)七月七日にこの慧開のことばを揮毫している。

(17) 『聯燈会要』巻四「蒲州麻谷宝徹禪師」の章に「師使<sub>レ</sub>扇次、僧問、風性常動、無<sub>二</sub>処不<sub>レ</sub>周、和尚、為<sub>二</sub>甚麼却使<sub>レ</sub>扇。師云、爾只知<sub>二</sub>風性常動、且不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>無<sub>二</sub>処不<sub>レ</sub>周。云、作麼生は無<sub>二</sub>処不<sub>レ</sub>周底道理。師却揺<sub>レ</sub>扇。僧作礼。師云、無<sub>二</sub>用処<sub>一</sub>。師僧、著<sub>二</sub>得<sub>二</sub>一万箇、有<sub>二</sub>甚麼益<sub>一</sub>」(正統蔵一三六・二五二c)とあり、宝徹の「麻谷風性常動」の因縁が記されている。

(18) 『無門関』第五則「香巖上樹」に「香巖和尚云、如<sub>二</sub>人上<sub>レ</sub>樹、口啣<sub>二</sub>樹枝、手不<sub>レ</sub>攀<sub>レ</sub>枝、脚不<sub>レ</sub>踏<sub>レ</sub>樹。下有<sub>レ</sub>人間<sub>二</sub>西来意。不<sub>レ</sub>对即違<sub>二</sub>他所問<sub>一</sub>、若对又喪身失命。正徳<sub>レ</sub>麼時、作麼生对」(正統蔵一一八・二六一c)とある。

(19) 南宋代に皇帝と問答を交わした禅僧の奏対録としては、楊岐派の瞎堂慧遠(仏海禪師、一一〇三—一一七六)の『仏海瞎堂禪師広録』巻二に「靈隱仏海禪師入内陞座録」「靈隱仏海遠和尚受禪師号謝恩陞堂語録」「特賜仏海禪師住靈隱奏対語録」(正統蔵一一〇・四六四d~四七二c)が収められ、『古尊宿語録』巻四八に大慧派の拙庵徳光(東庵、仏照禪師、一一二一—一二〇三)の『仏照禪師奏対録』(正統蔵一一八・四一d~四一八b)が収められ、『仏鑑禪師語録』巻六に破庵派の無準師範(仏鑑禪師)の「徑山無準和尚入内引対陞座語録」(正統蔵一一一・四八一a~四八三

d) が収められている。

(20) 京都国立博物館編『高僧と袈裟―ころもを伝えころもを繋ぐ―』(平成二二年(二〇一〇)一〇月発行)では、京都市右京区宇多野上ノ谷町の妙光寺に所蔵される慧開伝来の袈裟に関して、46重要文化財「九条袈裟(無門慧開料、無本覚心相伝)一領」と題して「絹(文綾)」「丈一三七〇 幅三四五・〇」「中国・南宋時代 十三世紀」「京都・妙光寺」と形態や所蔵寺院を記した後、つぎのような山川曉氏による解題が付されている。

妙光寺の開山である無本覚心(一二〇七〜九八)が、師である無門慧開(一一八三〜一二六〇)から授けられたと伝える九条袈裟である。

田相は明るい黄色で、間隔を空けて菱を均等に配し、その間に花に戯れる鳥を置いた、浮織の綾である。経糸は生糸に近い質感で細くしまり、緯糸はふんわりとした練糸であるため、柔らかな糸浮きでありながら、文様の輪郭がしっかりと表現されている。菱とその間を埋める花鳥という組み合わせは、中国・西夏の遺跡であるカラホトから出土した錦やそれと極めて類似する神護寺一切経経帙の錦にも見られ、十二世紀から十三世紀にかけて流行した意匠構成と考えられる。また菱の内部に注目すると、柿の蒂あるいは四合如意と呼ばれる、四つの如意頭を組み合わせた文様が納められていることに気づく。これは「花折枝・柿の蒂文様裂」(No.56)に見るように、南宋の頭文紗に頻出する特徴的な文様である。以上の諸

点から、この生地は、中国・南宋において製作されたものであろう。

行は、かつての日本人の色彩感覚では青と呼ばれた色であり、動きのある山茶花唐草が、六枚綾によって緊密に織り出される。山茶花を積極的に染織の文様に取り込んだのは、遺例からみて南宋時代と考えられる。山茶花の葉がひるがえるさまや、枝から分岐した蔓が力強く巻き込むさまから推して、この生地もまた、中国・南宋時代の製作ではないだろうか。

ところでこの行には、左縁に「永仁二年十二月十日、紐座に「佛法僧寶」、環座に「入宋覚心」との墨書があり、この袈裟が無本覚心ゆかりの品で、墨書が永仁二年(一二九四)に記されたことを示している。この墨書は、ほかの手跡との比較から、本人自筆の可能性が高いと指摘されているが、彼が袈裟にこのような墨書を残したのは、『法燈国師行実年譜』(No.49)に記されるように、師である無門慧開から嗣法の証として授けられた袈裟にならつたためであろう。そのことから、この九条袈裟は無門慧開からの伝法衣ではなく、無本覚心自身が妙光寺に留めたものであつたらう。墨書によって製作年代の下限が知られ、東アジア染織史の基準作として重要な事例である。

一方、東京国立博物館等『京都五山・禅の文化展』(二〇〇七年七月)には京都妙光寺所蔵「七九条袈裟(無本覚心所用)」として、京都国立博物館『高僧と袈裟』(二〇一〇年一〇

月)にも「46九条袈裟(無門慧開料・無本覚心相伝)」として、慧開から覚心へと相伝されたとする九条袈裟がカラー写真とともに解題・翻刻がなされており、東京国立博物館『榮西と建仁寺』(二〇一四年三月)にも「56九条袈裟(無本覚心相伝)」としてカラー写真と解題が載せられている。ただし、この九条袈裟は慧開相伝と伝えられるものの、慧開が覚心に付与した原品ではなく、覚心が慧開相伝の袈裟に準じて永仁二年(一二九四)一月一日に作製され、覚心自身が所持していたものであるとされる。

(21) 夢窓派の空谷明応(若虚、仏日常光国師、一三二八—一四〇七)は『仏日常光国師空谷和尚語録』卷上「陞座」の「鷲峯開山法燈国師百年忌請」において「適逢<sup>二</sup>郷僧源心<sup>一</sup>、指見<sup>二</sup>護国仏眼<sup>一</sup>。眼問、名何。答曰、覚心。眼示、偈曰、心即是仏、仏即是心、心仏如如、亘<sup>レ</sup>古亘<sup>レ</sup>今。酬对数回、即蒙<sup>二</sup>印可<sup>一</sup>。師遂問云、一切抛却、以<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>人。眼曰、覩<sup>二</sup>箇<sup>レ</sup>覩底<sup>一</sup>。師便礼拝。辞去遊<sup>二</sup>諸方<sup>一</sup>」(大正藏八・一一三b)と述べており、慧開と問答して印可を得た後、一旦、覚心が慧開のもとを辞去して諸方に歴遊したことになる。ちなみに覚心の百回忌正当は応永四年(一三九七)一〇月に当たり、この当時、明応としては、覚心が暫し護国仁王寺の慧開のもとを離れていたと解している。

(22) 国泰寺本『紀州由良鷲峯開山法燈円明国師之縁起』では、覚心が護国仁王寺の慧開のもとを辞して帰国の途に着く過程について、

師四十八歳。宋宝祐二年三月廿七日、重謁<sup>二</sup>護国<sup>一</sup>、告<sup>二</sup>

回郷意。無門以<sup>二</sup>達磨・寒山・拾得系贊共三幀<sup>一</sup>付<sup>レ</sup>之。同廿九日、請<sup>レ</sup>示<sup>二</sup>末後句<sup>一</sup>。門曰、覩<sup>レ</sup>便了。師炷<sup>二</sup>香礼拝<sup>一</sup>。門復以<sup>二</sup>月林録并無門関<sup>一</sup>授<sup>レ</sup>之。并偈曰(再<sup>二</sup>釈前偈<sup>一</sup>)、心即是仏仏即心、心仏元同亘<sup>二</sup>古今<sup>一</sup>、覚<sup>二</sup>悟古今<sup>一</sup>心是仏、不<sup>レ</sup>須<sup>二</sup>向<sup>レ</sup>外別追尋<sup>一</sup>。

日本覚心禅人、遠来炷<sup>レ</sup>香、請益求<sup>レ</sup>語。迅<sup>レ</sup>筆賜<sup>レ</sup>之。御前護国禅寺開山、選徳殿賜<sup>二</sup>对仏眼<sup>一</sup>、慧開書。(師以此偈<sup>一</sup>付<sup>二</sup>嘱鉄関<sup>一</sup>。自筆書<sup>二</sup>此十五字<sup>一</sup>云、正応二年正月十七日、覚心授<sup>二</sup>与心開<sup>一</sup>)。

仍需<sup>二</sup>頂相讚<sup>一</sup>。讚曰、

用<sup>二</sup>迷子訣<sup>一</sup>、飛<sup>二</sup>紅炉雪<sup>一</sup>、一喝当<sup>レ</sup>鋒、崖頰石裂。有時方便、以<sup>二</sup>無字<sup>一</sup>為<sup>二</sup>鉄掃帚<sup>一</sup>、蕩<sup>二</sup>四衆疑<sup>一</sup>。有時拍盲、似<sup>二</sup>有意<sup>一</sup>揮<sup>二</sup>匏拳頭<sup>一</sup>、結<sup>二</sup>千聖舌<sup>一</sup>。化<sup>二</sup>生蛇<sup>一</sup>作<sup>二</sup>活龍<sup>一</sup>、点<sup>二</sup>黄金<sup>一</sup>為<sup>二</sup>鈍鉄<sup>一</sup>。去<sup>レ</sup>縛解<sup>レ</sup>粘、抽<sup>レ</sup>釘拔<sup>レ</sup>楔。更將<sup>二</sup>仏祖不伝機<sup>一</sup>、此界佗邦俱漏泄。(日本覚心禅人、繪<sup>二</sup>予陋質<sup>一</sup>、就<sup>レ</sup>請著<sup>二</sup>語<sup>一</sup>。宝祐二年、西湖護国禅寺賜对仏眼、老僧慧開書)。

師曰、予為<sup>レ</sup>法不<sup>レ</sup>惜<sup>レ</sup>身、凌<sup>二</sup>万里波濤<sup>一</sup>、来<sup>二</sup>于宋国<sup>一</sup>、首尾六年間、遍<sup>二</sup>歴処々<sup>一</sup>。爰有<sup>二</sup>宿縁<sup>一</sup>之故、參<sup>二</sup>護国寺仏眼禅師<sup>一</sup>、而定<sup>二</sup>心境<sup>一</sup>畢、七十餘之師範、生前復不<sup>レ</sup>可<sup>二</sup>拝覲<sup>一</sup>。別淚湿<sup>レ</sup>衣、礼辞出矣。

函 護国寺 入室拳<sup>二</sup>扇子<sup>一</sup>。

同六月初、乘<sup>二</sup>智定法眼船<sup>一</sup>。(後略)

(由良町誌・史料、一九五b〜一九六a)

とかなり克明に伝えている。実際に慧開が覚心に授けた偈



頌と頂相贊の全文がほぼ原文のまま忠実に記載されている上に、このときの覚心の心情を伝える語として「予、法の爲めに身を惜まず、万里の波濤を凌えて宋国に来たり、首尾六年間、処々に遍歴す。爰に宿縁有るの故に、護国寺の仏眼禪師に参じて心境を定め畢むる。七十餘の師範、生前には復た拝観すべからず」と述べており、再び逢うことのない本師慧開との別れを惜しんだとされる。宝祐二年六月初めに覚心が智定法眼という海商の商船に便乗して帰国の途に着いたことを伝えている。ちなみに慧開が覚心に付与した偈頌は、後に正応二年（二二八九）正月一七日に覚心から法嗣の鉄関心開（靈照庵）に授与されている。

(23) 末後一句とは末後句、ぎりぎり決着の一句。とくに禅僧が示寂に臨んで唱える最後の一句を意味する。『景德伝燈録』卷一六「澧州樂普山元安禪師」の章に「師示衆曰、末後一句、始到牢関。鎖断要津、不<sub>レ</sub>通<sub>二</sub>凡<sub>一</sub>聖<sub>二</sub>」（大正藏五一・三三一b）とある。牢関とは堅牢な関所、思量分別では到達通過することのできない向上の境地をいう。

(24) 『仏日常光国師空谷和尚語録』卷上「陞座」の「鷲峯開山法燈国師百年忌諱」においては「後将帰<sub>二</sub>本<sub>一</sub>国<sub>二</sub>、再詣<sub>二</sub>護<sub>一</sub>国<sub>二</sub>、問<sub>二</sub>末<sub>一</sub>後<sub>一</sub>句。眼曰、覩<sub>レ</sub>便<sub>レ</sub>了。有<sub>二</sub>送<sub>一</sub>行<sub>一</sub>偈、頂相贊付<sub>レ</sub>之。又授<sub>二</sub>对<sub>一</sub>御<sub>一</sub>録・月林語・無<sub>一</sub>門<sub>一</sub>関。遂附<sub>二</sub>商<sub>一</sub>舶、逾<sub>二</sub>海<sub>一</sub>帰<sub>一</sub>朝。（中略）甲寅、師四十八歳、帰<sub>二</sub>日<sub>一</sub>本<sub>一</sub>」（大正藏八一・一三b）とまとめられており、慧開が「送行偈」や「頂相贊」を付した後に、『月林觀和尚語録』『無<sub>一</sub>門<sub>一</sub>関』などの品々を授けたことになっている。とくに「对御録」のことが記されて

いるから、空谷明応は『元亨釈書』の記事を受けていることになろうか。

(25) 覚心と『無<sub>一</sub>門<sub>一</sub>関』との関わりを論じたものに海老澤早苗「無<sub>一</sub>本<sub>一</sub>覚<sub>一</sub>心<sub>一</sub>の思想における『無<sub>一</sub>門<sub>一</sub>関』の位置づけ」（『駒沢大学大学院仏教学研究會年報』第三六号、二〇〇三年五月）が存する。

(26) 『鷲峯開山法燈円明国師行実年譜』の末尾に、  
從<sub>二</sub>宋<sub>一</sub>国<sub>一</sub>帰<sub>一</sub>朝之時、商舶俄解<sub>レ</sub>纜、忘<sub>二</sub>主<sub>一</sub>丈<sub>一</sub>・伽梨於<sub>二</sub>杭<sub>一</sub>護<sub>一</sub>国<sub>一</sub>。主<sub>一</sub>丈<sub>一</sub>化<sub>レ</sub>龍<sub>一</sub>游<sub>二</sub>泳<sub>一</sub>万<sub>一</sub>里<sub>一</sub>鯨<sub>一</sub>波<sub>一</sub>、伽<sub>一</sub>梨<sub>一</sub>龜<sub>一</sub>背<sub>一</sub>上<sub>一</sub>負<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、來<sub>二</sub>由<sub>一</sub>良<sub>一</sub>湊。名<sub>二</sub>其<sub>一</sub>丈<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>游<sub>一</sub>泳<sub>一</sub>主<sub>一</sub>丈<sub>一</sub>、名<sub>二</sub>其<sub>一</sub>衣<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>龜<sub>一</sub>背<sub>一</sub>袈<sub>一</sub>裟<sub>一</sub>、或作<sub>二</sub>伽<sub>一</sub>梨<sub>一</sub>。普<sub>一</sub>広<sub>一</sub>相<sub>一</sub>公<sub>一</sub>時、南<sub>一</sub>京<sub>一</sub>工<sub>一</sub>芸、七<sub>一</sub>月<sub>一</sub>燈<sub>一</sub>籠<sub>一</sub>、模<sub>一</sub>刻<sub>二</sub>游<sub>一</sub>泳<sub>一</sub>主<sub>一</sub>丈<sub>一</sub>、獻<sub>二</sub>相<sub>一</sub>公<sub>一</sub>。公<sub>一</sub>問<sub>二</sub>蔭<sub>一</sub>涼<sub>一</sub>仲<sub>一</sub>方<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>何<sub>一</sub>人<sub>一</sub>主<sub>一</sub>丈<sub>一</sub>。仲<sub>一</sub>方<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>南<sub>一</sub>紀<sub>一</sub>興<sub>一</sub>国<sub>一</sub>祖<sub>一</sub>翁<sub>一</sub>之<sub>一</sub>丈<sub>一</sub>也、主<sub>一</sub>丈<sub>一</sub>化<sub>レ</sub>龍<sub>一</sub>到<sub>二</sub>由<sub>一</sub>良<sub>一</sub>海<sub>一</sub>浜<sub>一</sub>、夜<sub>一</sub>々<sub>一</sub>放<sub>レ</sub>光<sub>一</sub>、漁<sub>一</sub>人<sub>一</sub>網<sub>一</sub>而<sub>一</sub>得<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>。相<sub>一</sub>公<sub>一</sub>感<sub>二</sub>其<sub>一</sub>靈<sub>一</sub>威<sub>一</sub>、遣<sub>二</sub>專<sub>一</sub>使<sub>一</sub>於<sub>二</sub>由<sub>一</sub>良<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>有<sub>レ</sub>所<sub>一</sub>求<sub>一</sub>乎。寺<sub>一</sub>衆<sub>一</sub>胥<sub>一</sub>議<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>大<sub>一</sub>藏<sub>一</sub>經<sub>一</sub>半<sub>一</sub>藏<sub>一</sub>欠<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、願<sub>一</sub>作<sub>二</sub>全<sub>一</sub>藏<sub>一</sub>衆<sub>一</sub>望<sub>一</sub>亦<sub>一</sub>足<sub>一</sub>矣。相<sub>一</sub>公<sub>一</sub>命<sub>二</sub>洛<sub>一</sub>東<sub>一</sub>西<sub>一</sub>諸<sub>一</sub>利<sub>一</sub>能<sub>一</sub>筆<sub>一</sub>補<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、每<sub>一</sub>卷<sub>一</sub>記<sub>二</sub>筆<sub>一</sub>者<sub>一</sub>名<sub>一</sub>字<sub>一</sub>。見<sub>一</sub>今<sub>一</sub>収<sub>二</sub>在<sub>一</sub>由<sub>一</sub>良<sub>一</sub>絳<sub>一</sub>藏<sub>一</sub>焉。

(由良町誌・史料、二四一a)  
という逸話が載せられている。覚心が帰国に際して商船の都合から慌てて護国仁王寺に主丈（拄杖）と伽梨（袈裟）を忘れてしまったという内容であり、逸話がすべて史実とは到底見られないが、おそらく「游泳主丈」と「龜背袈裟」は後に海商によって由良の西方興国寺の覚心のもとに届けられたというのが史実であろうか。ちなみに後段に載る普広相公とは室町幕府第六代將軍の足利義教（普広院

殿、一三九四—一四四一)のことであり、仲方とは相国寺鹿苑院の蔭涼軒に住した臨済宗夢窓派の仲方中正(仲芳、一三七三—一四五一)のことを指している。

(27) 平成二六年(二〇一四)に行われた「(開山・栄西禅師八〇〇年遠忌特別展) 栄西と建仁寺」の図録「栄西と建仁寺」(東京国立博物館、二〇一四年三月)の解題に「51 無門慧開像(自賛)」には救仁郷秀明氏による解題が付されており、その全文を示すならば、つぎのようである。

一幅 絹本着色 縦八四・一 横四五・九

中国・南宋時代 宝祐二年(一二五四)

京都・妙光寺

無門慧開(一一八三—一二六〇)は、南宋時代の禅僧。臨済宗楊岐派の月林師観の法嗣で、公案集として名高い『無門関』の著者である。南宋の理宗皇帝に召されて説法し、仏眼禅師号と金蘭法衣を賜った。法燈派の開祖、無本覚心の師である。

No. 51は、頭髮と髭を伸ばし、袈裟を着て拱手する無門慧開の半身像で、自賛を有する。面部の表面の彩色はほとんど剥落し、画絹の下辺から右辺にかけて大きな補絹が認められることが惜しまれる。しかしながら鋭い眼光を放つ眼や、鼻や顎の細く柔らかい線など、残存する部分からみて、当初は上質な肖像画であったことがうかがえ、本画像の製作時期は南宋時代としてよいとみられる。上部に書かれた賛の末尾には「日本覚心長老、絵予陋質、就請著語、宝祐二年西湖護国禅寺開山賜対仏眼老僧慧開

書」とある。無本覚心は帰国に際して無門慧開から『無門関』『月林師観語録』などとともに自賛頂相を与えられたと『法燈円明国師行実年譜』に記載されている。この画像は、無本覚心が宝祐二年(一二五四)に日本に帰国するに際し、中国の絵師に無門慧開の肖像を描かせ、杭州の護国寺で師に着賛を求めたものにあたるかと考えてよいだろう。

平田高士『禅の語録18 無門関』(筑摩書房、昭和四四年一〇月刊)の口絵にも白黒写真で載せられている。

(28) 迷子訣については慧開が自ら『無門関』第一五則「洞山三頓」の頌古でも「獅子教兒迷子訣、擬前跳躑早翻身」(正統藏一一八・一六二d)と述べている。紅爐雪の語は慧開は他に述べていないが、例えば『仏海瞎堂禅師広録』巻二「特賜仏海禅師住靈隱奏対語録」に「正如陛下向時所」作布袋贊、其略曰、別別分明、一点紅爐雪、豈容駐一也」(正統藏一二〇・四六八d)とある。

(29) 『禅籍志』巻上「宗門略史類」の「伝燈大光明蔵」に、延寿住持宝曇、字少雲、法号橘洲。嗣大慧杲、著光明蔵若干卷。上自二七仏、下至三大慧。有二冲虚道人史彌遠・鳳山明公二人序、無門開公・石溪月公二人讚偈、滅翁礼公・寛湖先生趙孟垢二人跋。滅翁有謂、寂音嘗作僧宝伝矣、但載其出処与師資相擊節而已。於羅紋結角处、則罕有之。如二斯編、皆釣索仏祖玄奥。

(日仏全九六・二四八a)

と説明されている。『大光明蔵』三卷三冊は、東京都世田

谷区上野毛の五島美術館の大東急記念文庫に南北朝初期に刊行された五山版が所蔵されており、椎名宏雄編『五山版中国禅籍叢刊第十二卷（公案・注解）』（臨川書店刊、二〇一八年三月）に影印と解題が所収されている。

(30) 石溪心月（仏海禪師、一一七七？—一二五六）は眉山（四川省）青神の王氏の出身である。松源下の掩室善開の法を嗣いでいるが、特定の伝記史料が存しないため、詳しい事跡が定かでない。諸刹を歴住し、蘇州（江蘇省）の虎丘山雲巖寺から杭州の靈隱寺に遷住し、さらに径山に陸住している。宝祐四年（一二五六）に世寿八〇歳前後で示寂しており、『径山志』が伝える六月九日が忌日とする。と、宝祐四年六月九日に示寂したと推測される。晩年に郷里の先哲である楊岐派の瞎堂慧遠（仏海禪師、一一〇三—一一七六）と同じ仏海禪師の勅号を賜わっている。語録として『石溪和尚語録』三巻が存する。

(31) 『癡絶和尚語録』巻下「径山癡絶和尚法語」には「示紹明維那」（前住「建康天禧」）と題した法語が収められており、その末尾に、

紹明維那、悦衆茲山、以三無心一応三帥天禧之命、袖紙覓語。不覺引筆及レ此。逗三到天禧、忽地此毒流行。

切莫三錯恠三蔣山一好。（出統蔵一二・二七三d）

とあるから、竹窓紹明は建康府（南京）の蔣山太平興国禪寺で維那を務めた後、同じ建康府の天禧禪寺に住持している。おそらく道冲が径山に住持した際にそのもとに戻って首座を務め、道冲が示寂して後も径山に留まり、石溪心月

のもとで書記を務めて『大光明蔵』の開版に尽力していたものであろう。

(32) 『大光明蔵』の刊本には石溪心月と無門慧開の二人の開版疏のほか、松源派の滅翁文礼（天目樵者、一一六七—一二五〇）の跋文（出統蔵一三七・四五四d、四五五a）が収められているが、その跋文は心月や慧開に先立つ淳祐元年（一二四一）の夏に記されている。一方、竹窓紹明の自序（出統蔵一三七・三八五c、d）によれば、実際に『大光明蔵』三巻は咸淳元年（一二六五）に至って漸く刊行されたことが知られる。

(33) 南北朝期の『仏祖正伝宗派図』や江戸期の『正誤仏祖正伝宗派図』によれば、大慧派の拙庵徳光の法嗣に「福嚴無二□月」の名が存し、無二□月が徳光の法を嗣いだことが知られる。『虚堂和尚語録』巻一〇「行状」や『環溪和尚語録』巻下「行状」によれば、松源派の虚堂智恵や破庵派無準下の環溪惟一が南嶽の福嚴寺で無二月に参学しているから、無二月が湖南の南嶽を中心に化導を敷いていたことが知られ、無二月は生涯にわたって江西・湖南に留まっていたものと見られる。

(34) 椎名宏雄『宋元版禅籍の研究』（一九九三年八月、大東出版社刊）の「付録二、宋金元版禅籍逸書目録」には、残念ながら『竹窓和尚語録』に関する記述は存していない。(35) 『無文印』巻一九「書劄」の「西江和尚」に、

在三四明一、辱三千里賜書、而申レ之以三厚惠。未レ及三拜答、而有三番江之役一、来レ番。逾レ年未レ及三拜状、而和

尚奉<sub>レ</sub>詔東上。八九月間、竹巖之徒隆上人、求<sub>レ</sub>書參礼。隆未<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>行、而專价已來。雷動法施、又得<sub>レ</sub>竊窺<sub>二</sub>一<sub>一</sub>、既足<sub>三</sub>以慰<sub>二</sub>渴法之意<sub>一</sub>。教誨諄諄、又足<sub>三</sub>以見<sub>二</sub>愛念之盛<sub>一</sub>。心喜甚可<sub>レ</sub>知也。二浙後学、俟<sub>二</sub>望法王大宝之來<sub>一</sub>。維日已久、磨<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>去、無<sub>二</sub>足怪者<sub>一</sub>。更望、以<sub>二</sub>天地<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>量、來輒受<sub>レ</sub>之、隨<sub>二</sub>其根性大小<sub>一</sub>、滿<sub>二</sub>其所<sub>一</sub>欲。它日不<sub>レ</sub>必歷<sub>二</sub>天育靈淨<sub>一</sub>而直登<sub>中</sub>双徑<sub>上</sub>、此特分内事。雖然、明覺不<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>乳峯<sub>一</sub>、而道行<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>。後世何以<sub>二</sub>屋大衆多<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>哉。某東游二十年、日夜望<sub>二</sub>和尚出<sub>レ</sub>浙。而今乃背馳如<sub>レ</sub>此、其於<sub>二</sub>法施<sub>一</sub>何其無<sub>レ</sub>縁也。霍山曾講<sub>二</sub>交承之契<sub>一</sub>否。某頃也待<sub>レ</sub>之以<sub>二</sub>知事<sub>一</sub>、後到<sub>二</sub>乳竇<sub>一</sub>、見<sub>二</sub>其有<sub>レ</sub>長処<sub>一</sub>、因与往来。其住院規模、無<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>言者。和尚新政、但用<sub>二</sub>曹參<sub>一</sub>、代<sub>二</sub>蕭何之法<sub>一</sub>、則事無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>節矣。郷曲後來兄弟未嘗無<sub>二</sub>受<sub>レ</sub>道之資<sub>一</sub>、但二十年來、二浙無<sub>レ</sub>郷尊宿<sub>一</sub>、低<sub>二</sub>回折<sub>一</sub>困於它人門戶、多齎<sub>レ</sub>志而歸。未<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>衆者、聞<sub>二</sub>浙中風味<sub>一</sub>、遂不<sub>レ</sub>敢出。所以、近來五山求<sub>二</sub>一辦事人<sub>一</sub>、卒不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得。縱有<sub>二</sub>一箇半箇<sub>一</sub>、又自欲<sub>二</sub>長雄<sub>一</sub>流輩不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>汲引、郷社且以不<sub>レ</sub>競。某卷卷望<sub>二</sub>和尚<sub>一</sub>三老之出、政為<sub>レ</sub>此也。頃見<sub>二</sub>晦巖諸公<sub>一</sub>、直以<sub>二</sub>此語<sub>一</sub>告<sub>レ</sub>之。為<sub>レ</sub>之点首不<sub>レ</sub>已。伏望、多方撰受、稍加<sub>二</sub>盼睐<sub>一</sub>、以長<sub>二</sub>養其志氣<sub>一</sub>。安知、世無<sub>レ</sub>揚子雲<sub>一</sub>哉。乾淳間、拙庵諸老在<sub>レ</sub>浙。於<sub>レ</sub>是有<sub>二</sub>秀巖孤雲<sub>一</sub>、相繼出興。今世豈無<sub>レ</sub>若人。有<sub>二</sub>是爐鞴<sub>一</sub>、則有<sub>二</sub>是法器<sub>一</sub>矣。清奚翁留<sub>二</sub>山中<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>和尚<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>旧徒、其人可<sub>レ</sub>以語<sub>レ</sub>上。惜乎不<sub>レ</sub>奈。寂寞急<sub>二</sub>於温煖<sub>一</sub>、而以<sub>二</sub>知事<sub>一</sub>汗<sub>二</sub>其名<sub>一</sub>。為<sub>レ</sub>之滴<sub>二</sub>洗塵滓<sub>一</sub>、豈無<sub>二</sub>善巧方便<sub>一</sub>哉。某奇疾日甚、一刹在<sub>二</sub>

三司之側、不堪<sub>二</sub>応酬<sub>一</sub>。幸而諸公粗安、内外無<sub>二</sub>一毫不如意事<sub>一</sub>。朔望迫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>已、亦不<sub>レ</sub>免<sub>二</sub>東語西話<sub>一</sub>。但恨、去<sub>二</sub>師友<sub>一</sub>遠、無<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>正<sub>二</sub>其非謬<sub>一</sub>者。謾錄<sub>二</sub>一二<sub>一</sub>則拜呈、尽力翻<sub>二</sub>筋斗<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>此、因<sub>レ</sub>便書來。乞指<sub>二</sub>其乱道<sub>一</sub>、批抹見<sub>レ</sub>教乎。平生尊敬者、莫<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>和尚<sub>一</sub>。所以、不<sub>レ</sub>遠<sub>二</sub>千里<sub>一</sub>而納<sub>二</sub>敗缺<sub>一</sub>。空東山所謂、如<sub>レ</sub>此敗缺、非<sub>二</sub>妙喜面前<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>納也。所<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>言<sub>二</sub>於和尚<sub>一</sub>者甚多。目眩且止。と記されている。隆上人とは妙印の門人惠隆のことであり、惠隆が雪竇山(乳峰)の西江広謀のもとを訪ねたことなどが伝えられる。

(36) 国泰寺本『紀州由良鷲峯開山法燈円明国師之縁起』の建長八年「師五十歳」の項には、

師五十歳。上書於無門和尚曰、大日本国建長八年(改<sub>二</sub>元康元年<sub>一</sub>)丙辰二月十三日、紀州高野山禅定院首座比丘覺心、頓首百拜、奉<sub>二</sub>書于大宋国行在臨安府護国寺仏眼禅師大和尚尊前<sub>一</sub>。粵遠販<sub>二</sub>海東<sub>一</sub>、屈<sub>レ</sub>指三年、仰<sub>二</sub>德之私<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>嘗<sub>レ</sub>少忘、憶<sub>二</sub>西湖<sub>一</sub>。屢扣<sub>二</sub>禅関<sub>一</sub>、而心地開發、肝腸裂破。胸中坦然、豈不<sub>二</sub>是和尚方便之所<sub>一</sub>致也。粉骨碎身、何足<sub>レ</sub>報乎。日夜西方望<sub>二</sub>落日之邦<sub>一</sub>、焚<sub>レ</sub>香馳<sub>レ</sub>想、遙拜而已。忽遇<sub>二</sub>便風<sub>一</sub>、謹裁<sub>二</sub>小牘<sub>一</sub>、以伸<sub>二</sub>布万<sub>一</sub>、云々。水晶念珠一連(金子粧)・金子一塊(十二錢重)、因<sub>レ</sub>便拜上、聊表<sub>二</sub>微志<sub>一</sub>而已。仰冀笑留。覺心再拜。

(由良町誌・史料、一九七b・一九八a)

とあり、覺心が慧開に宛てた建長八年二月の書簡を部分的に省略したかたちで掲載している。

(37) 『高野山文書』第二卷「金剛三昧院文書」の三八一「金剛三昧院紀年誌」にも建長六年と建長七年の記事として、

六年甲寅八月、覺心婦二自宋一。七年乙卯、第五長老真空。

今歳、真空補二長老一。(高野山文書二・四三八〜四三九頁)

と記されており、覺心が南宋から帰国して高野山に戻つたのを建長六年八月と伝え、真空が禅定院第五世として長老に補任されたのを建長七年と記している。

(38) 『高野山文書』第二卷「金剛三昧院文書」の「金剛三昧院紀年誌」には「康元元丙辰」の記事として「二月、覺心奉二書宋仏眼禪師一」(高野山文書二・四三九頁)と記されているが、これが首座覺心が慧開に呈した書簡を指すものと見られる。同じ「金剛三昧院紀年誌」にはつづいて「正嘉元丁巳七月、仏眼回書到」(同・四三九頁)とあるが、

これは慧開が南宋の宝祐五年三月一日の日付で首座覺心に宛てた回書が同じ年に当たる日本の正嘉元年七月に高野山に届いた消息をいうものである。

(39) 国泰寺本『紀州由良鷲峯開山法燈円明国師之縁起』の正嘉元年(一二五七)の「師五十一歳」の項に、

師五十一歳。仏眼禪師回書云、人至収書、知二得心座元安樂一。蒙レ惠二数珠水晶者一、金重十二錢一々収訖。山偈奉レ贈。百八摩尼顆々円、遼天鼻孔一斉穿。恒河沙數仏菩薩、毎日呼来跳二一圏一。

御前靈洞護国仁王禪寺開山、賜対仏眼禪師。

書二復大日本国紀州高野山禅定院首座心公一、収。

宝祐五年三月十三日、大宋国臨安府靈洞山回書。

日本正嘉元年七月一日、右回書到二来高埜山一。  
茲歳住二禅定院一、仍嗣法香為二無門和尚一拈出。

(由良町誌・史料、二一九a)

と記されており、慧開が送つた回書の全文を掲載している。『興国寺文書』の卷子仕立「興国寺記録」には「無門返書」として前半を欠く「書復日本国紀伊州高野山禅定院心公首座。賜対仏眼禪師(有印、第一寸古文也)」(和歌山県史・中世史料二・八三五b)という記載が存しており、おそらく断簡として返書の一部のみ書き残されたものである。南宋の宝祐五年(一二五七)三月一日に慧開が託した回書は、同じ年に当たる日本の正嘉元年七月一日に高野山禅定院の覺心のもとに届けられており、およそ三ヶ月半を費やして伝えられたことが知られる。

(40) 『高野山文書』第二卷「金剛三昧院文書」の「金剛三昧院紀年誌」には「康元元丙辰、第六長老覺心、心地房」(高野山文書二・四三九頁)と記されており、覺心が禅定院長老に補任されたのを康元元丙辰のことと記しているから、康元元年から正嘉二年まで住持を務めたことになろう。

(41) 『仏日常光国師空谷和尚語録』卷上「陞座」の「鷲峯開山法燈国師百年忌請」で空谷明応は「入二高野山一、住二金剛三昧院一、嗣香為二仏眼一。越二二年一、通二嗣書一、并献二水晶数珠一。眼有二回書一、誨語諄諄。併付二法衣・七葉図・賜対十段錦・月林體道銘・念珠頌等一。(中略)康元丙辰、年五十、出二世金剛一。逾二年正嘉戊午一、通二嗣書一」(大正蔵八一・一三b)と述べている。

(42) 国泰寺本『紀州由良鷲峯開山法燈円明国師之縁起』の

「師五十二歳、正嘉二年」の項に、

師五十二歳。正嘉二年戊午、通嗣書於無門和尚。罷禪定院住持、遊由良鷲峰、有終老志。功德主願性拜請、以為開山住持、而同心同力新於精藍、而資蔽後鳥羽禪定法皇仙駕、專為実朝公・真如禪定尼、追修道場。安貞元年丁亥、由良庄地頭願性、始從建立此西方寺、三十二年之間、他宗也。茲年、回前意、而改為禪刹、拜請覺心長老、以為開山住持。願性云、師戒珠無疵、道眼是明、是故道俗冒嶮、遠近趨風、云々。

(由良町誌・史料、二九八a～b)

とあり、「師五十四歳、文応元年」の項には、

師五十四歳、文応元年庚申九月一日、於鷲峯接無門所賜開慶元年八月十五日回書并信物等。佛眼書曰、來書取訖、備悉其詳、今付去御前陞座法衣一頂(法衣行青黃、有牡丹紋、環珉瑠六角、條紫色。無門自筆環之牌面書宣賜法衣之四字。後牌裡書仏法僧宝之四字。左手搭処、書臣僧慧開授持之六字。前後一十四字、無門自筆也。複子有祈雨降香之四字者破却)・東山七葉図一本(乃正伝宗派)・法語十段・錦十幅(三計在此中)・賜対法語二幅・無門自警一幅・関板子一幅・先師月林體道銘一幅(此銘、無門述作有二八句偈、肩対一聯云)。第一先須尊佛戒、第二且要合人情、云々。

大宋国御前靈洞山仁王禪寺開山賜対佛眼禪師

書復日本国覺心長老一收。

大宋国開慶元年八月十五日回

右信物之已上、法衣一頂、書十六幅(内十五幅印書、体道銘者筆書)。

於中、七葉図最上也(詳見于左)。法衣者、宋理宗皇帝之朝、天旱如湯年、天下人民渴死、依是雖令諸宗請、終不雨。帝詔無門和尚、陞座說法。即時雨降蘇天下。王臣咸仰和尚道德、王命一針三札令縫此袈裟。即於御前選德殿賜之、同仏眼禪師号賜之。故云祈雨法衣、云宣賜法衣。然今以付師。可謂、雖足秘藏黃梅密付。其故者、不付護国会裡徒、遠贈外国日域一來。寔是衣表信、不可力争者乎。

(由良町誌・史料、二九八b～二九九a)

と記されている。これら慧開が寄せた品々が文応元年(南宋の景定元年、一二六〇)九月一日に由良の鷲峰山西方寺に在った覺心のもとに届いたことが知られる。

(43) 『東山七葉図』とは五祖法演・開福道寧・月庵善果・老衲祖証・月林師観・無門慧開という、楊岐派の五祖法演(東山)より慧開に至る六代(六葉)の頂相に、さらに日本に帰国した無本覺心の頂相を加えた七代(七葉)の祖師図のことである。富山県高岡市太田の摩頂山国泰寺(臨濟宗国泰寺派本山)には「東山七葉頂相宗派之図」(初祖絵軸七葉図)とも一幅が所蔵されており、五祖法演(東山)・開福道寧・月庵善果・老衲祖証・月林師観・無門慧開・無本覺心という七代の祖師が描かれており、上段には臨濟宗脈を説明した文章が載せられている。絹本墨画で七人の

祖師を描いた半身像であり、縦八九・五センチ、横三八・四センチで、鎌倉後期から南北朝期の作と推定されており、もとは石川県金沢市伝灯寺町の瑞応山傳燈寺の所蔵であった。慧開から送られた原本ではないが、原本をもとに複製した画像と見られ、覚心が慧開より伝えて法嗣である伝燈寺開山の恭翁運良（仏慧禪師、仏林慧日禪師、一二六七—一三四一）に付与したものとされている。しかしながら、画像の剥落などが激しく慧開をはじめ各祖師の姿も確認できない状況となっている。傳燈寺保存会編『加賀傳燈寺—歴史資料調査報告—』（平成六年三月刊）に白黒写真が載せられ、解題が付されている。ちなみに松源派（金剛幢下）の了庵清欲（南堂、慈雲普濟禪師、一二八八—一三六三）の『了庵和尚語録』巻五「贊語」に「開福・月菴・老衲・月林・無門・法燈・高山凡七世、日東久藏主繪<sub>二</sub>其像<sub>一</sub>、請<sub>レ</sub>贊以<sub>レ</sub>歸」と題した贊語が存するから、覚心は「七葉図」を運良のみでなく、門下の高山慈照（広濟禪師、一二六六—一三四三）などにも付与していたことが知られ、ここでは開福道寧から高山慈照までを七世（七葉）としている。ここに清欲が寄せた「七葉図」に対する贊語を載せるならば、つぎのようである。

開福・月菴・老衲・月林・無門・法燈・高山凡七世、  
日東久藏主繪<sub>二</sub>其像<sub>一</sub>、請<sub>レ</sub>贊以<sub>レ</sub>歸。

（開福）春山青、春雨晴、白雲三片四片、黃鳥一声兩声、  
壳<sub>二</sub>弄東山家法<sub>一</sub>、鬧<sub>二</sub>熱開福門庭<sub>一</sub>。咄。大悲不<sub>レ</sub>展<sub>レ</sub>手、  
通身是眼睛。

無門慧開の生涯と『無門関』（三）（佐藤）

（月菴）奚仲造<sub>レ</sub>車一百輻、拈<sub>二</sub>却兩頭<sub>一</sub>、除<sub>二</sub>却軸<sub>一</sub>。只因<sub>三</sub>錯認<sub>二</sub>定盤星<sub>一</sub>、正音往往無<sub>二</sub>人統<sub>一</sub>。無<sub>二</sub>人統<sub>一</sub>、六六依然三十六。

（老衲）控<sub>二</sub>仏祖大機<sub>一</sub>、廓<sub>二</sub>人天正眼<sub>一</sub>、鮎魚上<sub>二</sub>竹竿<sub>一</sub>、巴蛇入<sub>二</sub>蘆管<sub>一</sub>。咄。物相本無何用斷。

（月林）一門超出是鳥回、喝下曾經海岳摧、笠国不<sub>レ</sub>伝唐土信、薰風吹得桂華開。

（無門）白日青天、迅雷激電、万象耳聾、虛空眼眩。須彌躡跳舞<sub>三</sub>臺<sub>二</sub>、千古無<sub>レ</sub>門八字開。

（法燈）正眼洞明、真風卓邁、親見<sub>二</sub>無門<sub>一</sub>、話行<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>。八十二載、脇不<sub>レ</sub>印<sub>レ</sub>床、三百餘人、入<sub>二</sub>大爐鞴<sub>一</sub>。髮毛爪齒、動<sub>レ</sub>地放<sub>レ</sub>光、青紫緇黃、望<sub>レ</sub>塵再拜。是所謂日本國九十九歲法燈国師、火後摩尼珠鉄鎚打不<sub>レ</sub>壞。

（高山）高山仰止、景行行止、大名之下、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>久処<sub>一</sub>。賓則全賓、主則全主。三千里外定<sub>二</sub>諳訛<sub>一</sub>、打<sub>二</sub>破鏡<sub>一</sub>、來相見去。（巳統藏一二三・三五二b・c）

慈照の門人で入元して蘇州（江蘇省）呉県の靈巖寺で清欲に参じた久藏主とは、慈照の法を嗣いだ約庵徳久（一二三二—一三七六）のことである。「約庵久禪師略伝」（続群九下・六二一a）によれば、徳久は嘉興府（浙江省）師子墩の円通禪寺の住持となり、帰国することなく明の洪武九年（一三七六）九月二四日に六四歳で示寂している。

(44) 月林師觀の『月林觀和尚語録』巻末に「體道銘」（巳統藏一二〇・二四八d・二四九a）の文面が付録されており、『禪門諸祖師偈頌』巻下之下にも「月林觀和尚體道銘」

(16) 『正統蔵』一六・四八五b-c) が収められている。おそらくここでは師観揮毫の真筆「體道銘」であったと見られ、月林師観から無門慧開に付与され、さらに慧開から無本覚心へと親しく相承されたものということになる。

(45) 『無門開和尚語録』卷下「偈頌」に吳潜について「賀吳丞相生日」(正統蔵二二〇・二六二b)と「吳尚書尊堂死以偈問師、用韻以復」(同・二六二c)「吳履齋以脚踏日影、索偈」(同・二六二c)といった一連の偈頌を収めており、同じく「真贊」にも「履齋相鈞容」(同・二六三c)が載せられているから、吳潜が久しく慧開のもとに参禅し、慧開からの信認も厚かったことが窺われる。

(46) 松源派の虚堂智愚と宰相吳潜との確執については、佐藤秀孝「虚堂智愚の住持期の動静(三)」(駒澤大学禅研究所年報』第二九号、平成二九年一月)の「宰相吳潜との確執を伝える史料」「吳潜と浙江禅林」「智愚が吳潜と不和になる」「下獄事件に至る経緯」の各項を参照。

(47) 『景德伝燈録』卷五「西京光宅寺慧忠国師」の章に「師以化縁将畢、涅槃時至、乃辞代宗。代宗曰、師滅度後、弟子将何所記。師曰、告檀越造一所無縫塔。曰、就師請取塔様。師良久曰、会麼。曰、不。会。師曰、貧道去後、有三侍者、真、却知此事」(大正蔵五一・二四五a)とあり、『聯燈会要』卷二「撫州疎山羌仁禅師」の章に「師因知事為造壽塔畢、來白師。師云、将多少錢与匠人。云、一切在和尚。師云、為将三文与匠人、為将兩文与匠人、為将一文

与匠人。若道得、与吾親造塔。知事無对」(正統蔵一三六・四〇一d)とある。

(48) 『無門関』冒頭に載る慧開の「禅宗無門関」の自序にも「若是箇漢、不顧危亡、单刀直入、八臂那吒攔他不住、縱使西天四七東土三三、只得望風乞命」(大正蔵四八・二九二b)とある。

(49) 『無門開和尚語録事畧』卷四の「王太尉隨」の項では、北宋代の王隨(字は子正、九七五?—一〇三九)のことを取り上げた後に「私云、王隨似先輩、別有三王隨乎待重考也」と注している。

(50) 法燈派の孤峰覚明(三光国济国師、一二七一—一三六一)の伝記史料「孤峰和尚行実」に、入元した覚明の活動の一端として「末後至護国寺、礼開山仏眼禅師之塔、蓋師之祖翁也。彼住持者、請師補知藏職」(統群類九下・五六九a)という記事が存する。覚明が護国仁王寺に到って祖翁慧開の墓塔を拝登していることが知られるとともに、当時の護国仁王寺の住持(未詳)が覚明を知藏(藏主)に拝請したことが伝えられる。

(51) 『無文印』卷五「天池雪屋韶禅師塔銘」に「築菴山阿、鑿池引泉、環以幽花細竹、夷猶其間、以遂所樂。端明厲公文翁爲扁曰明月。景定元年四月庚子示寂、壽五十九、臘四十」とある。詳しくは佐藤秀孝「雪屋正韶と廬山天池寺—天童如浄が晩年に道元とともに育成した嗣法門人—」(愛知学院大学禅研究所紀要』第三九号、平成二三年三月)と同「雪屋正韶と廬山天池寺—天童如浄の



法を嗣いで同調せず」（曹洞宗総合研究センター『学術大会紀要』第二二回、平成二三年七月）を参照。

(52) 『郵県志』巻五九「金石上」に載る「慶元府太古名山天童景德禪寺第四十代別山智禪師塔銘」には「師本無<sub>二</sub>宿疾<sub>一</sub>、領<sub>レ</sub>衆如<sub>レ</sub>常。歲庚申九月旦、忽示<sub>レ</sub>衆云、雲澹月華新、木脱山露骨、有<sub>レ</sub>天有<sub>レ</sub>地來、幾個眼睛活。於是、老參宿

納始疑<sub>レ</sub>師、有<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>末後句<sub>一</sub>者<sub>上</sub>。自是不<sub>三</sub>復出<sub>二</sub>丈室<sub>一</sub>矣。有<sub>二</sub>省問者<sub>一</sub>遽曰、不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>相見<sub>一</sub>、各宜<sub>二</sub>努力<sub>一</sub>。後十日夜分、呼<sub>二</sub>侍者<sub>一</sub>囑<sub>二</sub>後事<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>一語亂<sub>一</sub>、珍<sub>二</sub>重大衆<sub>一</sub>、又手長寂。壽六十一。臘四十七。師嘗日囑<sub>二</sub>其徒<sub>一</sub>令<sub>二</sub>從<sub>レ</sub>火浴<sub>一</sub>。已而寺衆謂、師於<sub>二</sub>本山<sub>一</sub>有<sub>二</sub>大功<sub>一</sub>、寧忍。遂塔<sub>二</sub>全身於中峯密庵之右<sub>一</sub>。送者嗔塞、皆掩<sub>レ</sub>袖飲泣如<sub>レ</sub>喪」と記されている。

(53) 佐藤秀孝「南洲永珍と渡來僧―南宋末元初に日本に向かう宋元禅僧を見送る―」（『駒澤大学禅研究所年報』第二六号、二〇一四年二月）の「無門慧開の示寂」の項を参照。

(54) 佐藤秀孝「西澗子曇の渡來とその功績―蒙古襲來を挟んで二度の來日を果たした中国禅僧の教奇な生涯―」（『駒澤大学仏教学部論集』第三八号、平成一九年一〇月）の「円覺寺における広範な活動」の項を参照。

(55) 中峰明本に関する伝記史料には祖順が撰した「元故天目山仏慈円照広慧禅師中峯和尚行録」のほかに、翰林直学士の虞集（字は伯生、号は道園、邵庵先生、一二七二―一三三八）が撰した「有元勅賜智覺禅師法雲塔銘」と同じく集賢直学士の宋本（字は誠夫、一二八一―一三三四）が

撰した「有元普応国師道行碑」が存し、ともに『天目中峯和尚広録』巻三〇に収められているが、明本を慧開の再来と書き記すのは祖順撰「元故天目山仏慈円照広慧禅師中峯和尚行録」のみである。

(56) 大阪市立美術館・五島美術館編『書の国宝』墨蹟』（平成一八年四月）に付録される『墨蹟資料集』では「無門慧開」の項目そのものが存していない。

(57) 無門慧開の頂相に関する論文として、竹内尚次「法灯派の肖像画について―新出・無門慧開像など―」（MUS EUM東京国立博物館美術誌』第二〇八号、一九六八年七月）の考察が存している。

(58) 孟珙（字は璞玉、無庵居士、一一九五―一二四六）が逝去したのは淳祐六年（一二四六）一〇月一三日であるから、慧開と孟珙の二人を描く頂相は、孟珙が亡くなる以前、慧開が五〇歳代から六〇歳代の頃に描かれた肖像画であったと見られる。

(59) 牧庵法忠については『嘉泰普燈錄』巻一六、『五燈会元』巻二〇、『乾道四明図経』巻二、『宝慶四明志』巻九などに伝が載り、『羅湖野録』巻一（己統蔵一四二・四八三bと四八八b）と『叢林盛事』（己統蔵一四八・二九bと四〇c）にも法忠の記事が存する。法忠は楊岐派の龍門清遠（仏眼禅師）の法嗣であり、慧開が慕う黄龍山の住持の一人が法忠であろう。熱海市MOA美術館には紹興二〇年（一一五〇）一〇月に智肱が贊を付した絹本着色「牧庵法忠禅師頂相」一幅が所蔵されている。禅椅に坐して左を

向く坐像であり、紹興二二年正月の趙巖谿居士の賛も付されている。奈良国立博物館『聖地寧波』(平成二二年七月)に法忠の頂相が載せられ、解題・翻刻がなされている。簡庵嗣清は楊岐派の或庵師体(一一〇八一―一七九)の法嗣であり、『増集続伝燈録』巻一(卅統編一四二・三八二a)と『攻媿集』巻五七「仰山太平興國寺記」に記事が載り、『禪林宝訓』(大正蔵四八・一〇三五b)に嗣清のことばが載せられている。あるいは嗣清は慧開が若い頃に参学した禅者の一人なのかも知れない。法忠・嗣清・慧開の三禅者は神異僧としての共通項があるのではなからうか。

(60) 東京国立博物館『菜西と建仁寺』の「52無門慧開像(無本覚心賛)」に救仁郷秀明氏がつぎのような解題を付している。

一幅 絹本着色 縦九三・八 横三八・六

中国・南宋時代 十三世紀 京都堆雲軒

No.52は、頭髮と髭を伸ばした無門慧開が袈裟を着し、手に扠子を持ち、法被をかけた曲糸に坐する姿を描いているが、彩色の剥落、修理、補彩の痕跡が多く残り、制作当初の画趣はかなり失われている。しかしながら当初と考えられる部分には精緻な描写もみることができ。図上には無本覚心が、師、無門慧開の遺偈「虚空不生、虚空不滅、証得虚空、虚空不別」を書いている。なお本画像の伝わる堆雲軒は、法燈派の正仲彦貞が靈洞院内に高山慈照(建仁寺第二十六世)を開基として創建した退隱所である。

(61) 『中巖自歴譜』には中巖円月が無門慧開の頂相に賛を

付する因縁や法燈派の禅者との関わりを伝える記事は存しない。ただ、『東海一漚別集』の「真賛」には「無門」に対する祖賛につづいて「鷲峰開山法燈国師」の頂相に四首の祖賛を寄せており、その中で三首に「仏心庵主請」「覚眼庵主請」「普康庵主求」(五山新集四・五二五頁)と記されているから、こうした法燈派の禅者から依頼を受けて慧開の頂相にも祖賛を寄せているものであろう。

(62) 乾峰士曇の「乾峯和尚行状」や「乾峰和尚語録」には法燈派の禅者に参学したという事跡や法燈派との親密な道交などは確認できないが、『乾峰和尚語録』巻三「真賛」には無門慧開に対する真賛の後に「法燈国師(三首)」として覚心に対する三首の真賛(五山新集別一・四九四頁)が載せられている。第二首には「心即是仏、仏即是心」の語が存し、第三首には「透三無門関、不レ勞三問吏、拳三破扇子、不レ涉三廉織」といった語が存するから、士曇は慧開と覚心の師資の伝法や『無門関』の相承についてかなり深く知っていたと見られる。

(63) 『策彦和尚入明記初渡集』巻下「大明嘉靖十九庚子年」によれば、遣明正使であった幻住派の湖心碩鼎(頤賢・三脚、一四八一―一五六四)が嘉靖一九年(一五四〇)一二月六日から一四日まで寧波府(浙江省)の地で『無門関』の講義を行なっている。その中で遣明副使であった夢窓派の策彦周良(謙斎、一五〇一―一五七九)は「中峯国師を開無門の再来と云ふ」(日仏全七三・三三四a)と書き残している。



〔虎丘派〕

虎丘紹隆—応庵曇華—密庵咸傑—松源崇嶽—  
 掩室善開—石溪心月—大休正念—南洲永珍—中峰宗海—  
 無相□範—  
 運庵普巖—虚堂智愚—南浦紹明—宗峰妙超—関山慧玄—  
 石帆惟衍—西澗子曇—  
 無明慧性—蘭溪道隆—  
 滅翁文礼—木大守真—  
 石林行鞏—断江覚恩—  
 横川如珙—古林清茂—  
 別翁紹甄—  
 頑極行弥—一山一寧—  
 竹窓紹明—  
 愚谷智慧—清拙正澄—  
 西巖了慧—木庵若訥—  
 月舟法乘—  
 東山湛照—虎関師鍊—  
 乾峰士曇—  
 南山士雲—  
 無伝聖禅—  
 蔵山順空—  
 断崖了義—遠溪祖雄—湖心碩鼎—  
 千巖元長—無用守貴—  
 祖順—  
 無極志玄—空谷明応—仲方中正—  
 默翁妙誠—策彦周良—

破庵祖先—無準師範—  
 石田法薰—  
 曹源道生—癡絶道冲—  
 一翁慶如—  
 曹源道生—癡絶道冲—  
 頑極行弥—一山一寧—  
 竹窓紹明—  
 愚谷智慧—清拙正澄—  
 西巖了慧—木庵若訥—  
 月舟法乘—  
 東山湛照—虎関師鍊—  
 乾峰士曇—  
 南山士雲—  
 無伝聖禅—  
 蔵山順空—  
 断崖了義—遠溪祖雄—湖心碩鼎—  
 千巖元長—無用守貴—  
 祖順—  
 無極志玄—空谷明応—仲方中正—  
 默翁妙誠—策彦周良—

〔曹洞宗〕

芙蓉道楷—丹霞子淳—真歇清了—大休宗珏—足庵智鑑—  
 宏智正覚—自得慧暉—明極慧祚—東谷妙光—直翁可挙—  
 棘林□杞—雪屋正韶—若鳳—  
 永平道元—孤雲懷奘—徹通義介—瑩山紹瑾—  
 無外義遠—  
 断崖了義—遠溪祖雄—湖心碩鼎—  
 千巖元長—無用守貴—  
 祖順—  
 無極志玄—空谷明応—仲方中正—  
 默翁妙誠—策彦周良—